釘本久春著

戦争と日本語

株式会社
龍文書局

戰爭と日本語

釘本久春著

東京外国語大学
図書館蔵書
673902
平成 23 年度

株式會社
龍文書局

日本語と南方の新しき生活

——はしがきに代へて——

（一）

四ヶ月あまり、私は南の豐かな日光と清澄な大氣の中を歩み廻つて來た。私達の言葉——日本語が南の土にどのやうに滲み入り、伸びてゐるかを見つめるのが私の旅の目的であつたが、日本語の普及といふ地味な仕事を通じて南方の人々の心に新しい火を點し、新しい生活を生み出させてゐる數多くの立派な働きを見た。

地下水の流れのごとく質實であるが、澄明にして力強い、民心把握の實證を見た。それらの三つ四つを、私の追懷の中から手操り出してみよう。

×　　×　　×

3158

ハノイのある小さな學校である。日本語講習會が、また新しく開講するので、肌寒い一月の朝の校庭に、數名の教授諸氏が總動員で出で立ち、志願者の受付をしてゐる。

——こゝで働いてゐると、どんな小さな仕事でも、張り合ひを感じます。たとへば志願者募集の廣告文などを書いてゐても、一行々々が日本のいのちにつながつてゐるやうな氣がして、うれしいのです。」

フランス文學の若き大學講師たりしキノウへ教授が、一緒に歩いて來る道でふと言つた言葉をかみしめながら、私は校庭の様子を見守つてゐた。

志願者は多い。年齡も服裝もまち／＼である。しかし、どの志願者の顔も、極めて明るい。

× × ×

やがて、私はキノウへ教授が切りに紹介するまゝに、ひとりの安南人青年と話

しあつた。

——ワタクシハ、ト テイ ロクト イフ ナマヘデス。トシハ十九サイデス コノ ガクカウニ ハイルノハ 三ドメデス。」

と話しはじめる。お辭儀や話をする態度もなか／＼立派である。一語々々の發音や全體の抑揚には中國人のそれに近い誤りや癖があるが、半年ほどの勉强にすれば無理はない。

——どうして、そんなに講習會に入りたいのですか。」

——うちで勉强したらどうですか。」

キノウへ教授と私がきく。教授の人手も足りないために、この青年などの入るべき高次の課程は、まだ開設できずにゐるのである。

——ニツポンゴガクカウハ、ワタクシノ タメニ ナリマス。」

それから、幾つかの志願の理由と、日本語學校觀が、口ごもりつゝ答へられる

トテイロク青年は、家計豐かならざる勤勞青年である。しかし、いつの日にか、笈を負うて日本へ學びにゆきたいといふ最高の希望と空想のために、彼は早くから準備をかためておかなければならぬのだ。

さうしてこゝには、夕方の一時間、わづか一時間ながら、敎へる者の熱意と學ぶ者の一生懸命さとの結びついた雰圍氣、新しくて、きりゝとひき緊つた日本語敎室の雰圍氣である。

× × ×

私は、知つてゐる。大東亞共榮圏建設に關する生硬な寄生理論を振り廻すやうなことは、キノウヘ敎授達の日本語講習會にはない。そこに在るものは、あくまでも親切な學習上の手引きであり、强制を全く伴はない躾である。細やかな配意を以て、敎室の中に滿たされつゝある日本的禮讓の慣習である。

また、そこに伸びつゝあるものは、勤勞後の一ときを遊惰から守り共に學ばう

とする健康な上向的意慾である。たしかに、こゝには生活がある。トテイロク青年の立場でいへば、學歷獲得のためでもなく、就職のためでもなく、何か新しいまことを學び、身につけるための空氣があるのだ。

——ワタクシノ　ナマヘヲ　カンジデ　カキマセウ。」

志願票を受理されて歸るとき、この安南人青年は、私の手帖に、ゆつくりと力をこめて「杜庭祿」と書きつけた。

私は、漢字を書きつゝある杜庭祿青年の頰に、一際紅味のさして來るのを見のがすことはできなかつた。

（二）

敎室は、二つしかない。しかし、床の高い小ざつぱりしたバンガローの建物である。龍頭蛇尾やこけおどしは、日本人の最も嫌ひで不得手なところ、北泰最初の日本人學校たるには、誠にふさはしい建物だ。

ひとつの教室をのぞいてみる。腕まくりしたシャツ一枚の十三四の少年から、眞白の背廣で威容を保つ五十五六の老紳士まで、四五人の近代的な洋裝をした少女を交へて、六十人ばかりの人がぎつしり机を並べてゐる。

――アナタハ、ジテンシャニ　ノル　コトガデキマスカ。」

イトウ教授が、大きな聲で、きく。

――ハイ、ジテンシャニ　ノル　コトガ　デキマス。」

中學生らしい少年が答へる。

――アナタハ　ウマニ　ノル　コトガ　デキマスカ。」

――ウマニ　ノル　コトハ　デキマセン。ジテンシャニ　ノル　コトモ　デキマセン。」

泰國の役人であらう。カーキー色の制服シャツを着た、堂々たる中年紳士がにこ〳〵しながら答へる。聲が大きい。皆、どつと笑ふ。

――コマリマシタネ。アナタハ　ヒカウキニノル　コトガ　デキマスカ。」

今度は、うら若い少女だ。

――デキマセン。オカネガ　アリマセンカラ。」

明快な答に、先生が先づ笑ひ出す。皆、笑ひ出す。手を打つて賞讃する生徒もある。

×　　×　　×

もう一つの教室では、トホヤマ教授が平假名を敎へてゐるところだ。老若男女これまたぎつしり並んで、黒板を見上げては、ノートに萬年筆を走らせてゐる。

時間になる。汗を拭きながらイトウ教授とトホヤマ教授がヴエランダに出て來る。山を間近かに見る北泰の一月の夕は、涼しくて快適だ。しかし、二人の背中は汗ぐつしよりである。

――そろ〳〵、月がいゝ。また敵さん、來るかな。」

──こんやあたり、おいでかもしれない。」

二人が言ふ。それから、元氣ないろ〳〵の話になる。

あきずに、敵はひよろ〳〵來るであらう。しかし、この日本語學校は、二人の若き先生を中心にして、潑溂として伸びゆくに違はない、

北泰ばかりではない。バンコックでも、日本語の教育は、潑溂として續けられてゐたある日本語學校は、敵機の盲爆によつて被害を受けた。その際、十數名の生徒と一緒に寢泊りしてゐるコバヤシ教授は、直ちに生徒を指揮して、落下した九發の燒夷彈のうち八彈までを、自らの手で完全に消しとめたのである。さうして、安全に生徒を退避させたのである。

歸京後、最近私は、泰國の若き留學生を連れて上京したスズキ教授と逢つた。

──長い旅で、なか〳〵大變だつたでせう。」

──大したことはありません。夜だけ起きてゐればいゝのですから。」

誰に命ぜられ頼まれたわけでもないのに、スズキ教授は、長い船旅の間、夜の睡眠を多くはひるまに代へて、夜は生徒の眠つてゐるのを見守りつゝ來たのである。

日本語教育の傳統、若くは日本語教育者精神の傳統が、今、泰國の日本語教授團の間に、潑溂として生れつゝあるのである。

（三）

タマリンドの木立は、すが〳〵しい。若葉のやうに爽やかな薄緑である。芝生は、校庭を敷きつめてあをい。内地の晩春をやゝすぎた快さであらうか。涼風が渡る。とにかく熱帶の午後は、かつと强い日光の外には、存外にどぎつい何物もない。

──タダイマヨリ　五ニンヌキヲ　イタシマス。」

──ヨシ、ゲンキニ　ヤレ。」

土俵の東側西側に十人づつ並んだ生徒の中から一人走り出て來たマライ人の青年が、南側に立ち側んだ私達の前でぴたりと止まり、聲高に云ふ。

防暑服半ズボンの〇〇教官が、敬禮を受けて　激勵すると、足早に驅けもどる華僑の出身らしい比較的色の白い青年が、謚團扇をとつて土俵に驅け上る。

「——五ニンヌキ、ハジメ！」

さう怒鳴ると、東側から先のマライ人の當番生徒が直ちに驅け上る。西側から、タアバンを脱ぎ捨てた、力士まげのやうな髮恰好に見えるインド人の丈高い生徒が、さつと驅け上る。

それからが、大變だ。負けたり、勝つたり。三人抜き、いや四人抜きまで行くのがある。しかし、遂に五人抜きには至らない。

「——あれの腰は、しつかりしてますよ。」

「——あれの相撲は、少々柔道がかつてゐますね。」

五六人の教官たちが、私の方を向いて云ふ。力がこもる。私も、夢中である。

「——ナニヲッ！」

「——ヨイショ！」

土俵では歯切れのいゝ日本語の懸け聲だ。次々に闘ふ生徒たちが、いつか見物人の私達のことも忘れて、行司を待たずに、一番の勝負の終るや否や、間髪を入れず土俵に驅け上り、懸け聲かけてがんばる。

それ〴〵の年はよく分らないがみんな若い。ひげを生やした一人のインド人の青年が、到頭、やつと五人抜をし終へる。みんな、元の列に整列する。

「——モウ一度、五人ヌキ、モツトゲンキニヤレ。」

〇〇教官が、叫ぶ。すぐさま兩側から飛び上る。褌を締め直す生徒もある。

「——みんな、實に相撲が好きなのですよ。相撲となると、大喜びです。」

「——教官が指導されたのですか。」

――はい。しかし、この頃は、うつかりすると私もやられる位です。」

かういつて、三十をわづか越えたばかりの○○教官は私に微笑みかけた。

こゝは、マライ地區の少壯原住民官吏の再訓練を行つてゐるマラッカの興亞訓練所である。

こゝの日本語教育は、生徒と共に常住宿泊して苦樂を分つ數名の日本人教官によつて、完全に廿四時間教育である。從つて、兩虎相搏つ相撲のときにも、懸け聲に日本語が飛び出すわけである。

――五人拔きが終つて、一劃の褌一つで眞裸の青年が、黒い背中に汗を滴らせつゝ、肅々として寄宿寮へ歩み去るのを見送りながら、私は切に思つた。

――日本人の本能的に感じてゐる、持つてゐるよいものを、どし〳〵南方の人々に與へることだ。ためらはず、まつ直ぐに。日本語の力を、日本人の生活の一切を。」

（四）

スマトラの中部、印度洋に面した要衝パタンに程近い臺地、海拔三千米に近いメラピ・シンガランの二つの峻峯を椰子の葉の屋根の軒近くに望むところ。土地は、高爽。人情は淳朴。

――全く、內地と同じやうな感じがしますよ。氣候のことばかりではない、一緒に毎日寢泊りしてゐると、所生も全く日本の青少年と同じやうです。私は、內地でも配屬將校をしてゐたことがあるから、よく分るのです。同じですよ、青少年の氣持は。純心で。よく頑張りますよ。」

スマトラ興亞訓練所長の○○大佐は、まひるの今も卷脚絆をしたまゝの姿で語られる。

――ショチョウドノ、ハイリマス。」

元氣な聲がして、メナンカボウの青年が入つて來る。續いて、日本語擔當の○

○教官も入つて來られた。

――おう、おまへか。さつそく卒業式の時の答辭を練習してごらん。」

――お客様に遠慮せず、やつてみよ。」

○○大佐と○○教官が激勵される。一兩日中に卒業式を控へて、この卒業生總代は、答辭の豫行演習をするのである。

「我等の覺悟」といふ題だ。やがて官吏たるべきこの青年は直立不動の姿勢で十五分ばかり訓練所に於ける六ケ月の學業と生活への感激と共に、郷土スマトラの生活を豐かにするための覺悟と具體的な方策とを、ラリルレロの發音がいくらか巻舌になる日本語で述べ續ける。

――エイ、ヤッ！」

窓の外では、絹糸のやうな雨の中を半ズボンから黒い足をニヨキリと出した一團の所生たちが、掛け聲勇ましく銃劍術だ。

――いや、ものがないといふことは、いゝことですね。教科書が足りないから教育は所生がしつかりのみこむまで何べんでも話して教へます。所生も腑におちるまで何べんでも質問して、しつかり覺えようとします。教官も所生も一生懸命ですよ。」○○大佐がいはれる。

私は、ふと、幕末維新前後の日本人の書生たちのことを思ひ浮べた。燃えるやうな智識慾、猛烈な勉强、書物の足りなさなどは問題ではなかつた私達の先輩のことを思つた。

（五）

スマトラにも、いま新しく眞の學徒が生まれつゝある。

――ウガヒノ水ヲ、モウ一ドイレカヘテオアゲナサイ。ドウグヤクスリハ、マヘノジユンジヨニ、スグナラベナサイ。」

處置が終ると、○○教授は、傍らの少女にゆつくりした口調で言ふ。

――ハイ。」

はつきりと返事をして、インドネシヤの少女は○○教授の指圖の通りに働く。この齒科治療室には外にも五六臺機械があるが、髮を引きつめて結、色も柄も地味なサロンを着た少女たちが、それ〳〵付き添つて働いてゐるスラバヤで、思ひもかけず專門學校の附屬病院で齲齒の治療を受け得た有り難さと意外さを、私は述べた。教授達は、交々、言はれる。

――小規模ですが、看護婦の養成も始めてゐるわけです。みんな素直で一生懸命ですから、すぐ役立つと思ひます。

――いろ〳〵初めは考へましたが、學校の教育も看護婦の指導も、すべて日本語で行ふやうにしました。術語などには、うるさく云へばいろ〳〵問題もありますが、なに、全部日本語で大丈夫です。生徒たちもその方を喜びますし、全寮制度ですからどん〳〵覺えますよ。」

――いや、私たちが內地でもつと日本語を勉強してくれればよかつたと思ふ位ですよ。」

治療がすんだので、化學の實驗室に行く。

――ケイレイ！。」

薄暗い室の奥で潑溂たる聲がして、十五人の青年が、一齊にこちらを見た。案內の○○教授が「構はぬ構はぬ。」といふ風に手を振られると、皆すぐに實驗臺にとりついて操作を續ける。

日本語とマライ語の交つた簡單な言葉が時々交はされてゐる。聲は低いが、青年らしくせか〳〵した調子だ。

窓の外は、かつと明い。學生が作業で植えたといふ幾列かのパパイヤの木が、若芽のやうな爽やかな綠色だ。

（六）

遠い山脈の上には、入道雲が湧き上つてゐる。眼も遙にうち續く水田、植え揃つた稻田の連なり。椰子さへなければ、全く内地だといふ氣が又してもする。たゞし、田植を過ぎて間もない頃としては、餘りに强い日ざしだ。

——ミヨトウカイノソラアケテ……」

——アサダヨアケダウシホノイブキ……」

——アアアノコエデアノカホデ　テガラタノムトツマヤコガ……」

あちらに一團、こちらに二かたまり、それ〴〵七八十人の少年少女達が一列に並んで、日本語の歌を唄ひながら草をとつてゐる。

——これまで集團的なことをやつてゐなかつたのですから、みんな勤勞奉仕は大いに愉快がります。」

南部セレベス東岸のこの地區を擔當してゐる〇〇司政官が云はれる。

——今まで雜草をとることさへも殆んどしなかつたのです。勤勞奉仕で田や畑

をきれいにしたら、出來高が違つて來た。それで一層、皆熱心にやるやうになつて來ました。インドネシャ人の指導は、すべて論より證據です。いゝ結果を見せてやることだと思ひます。」

若い農事指導員の〇〇氏はかう云つて、柄のついた櫛のやうな草とりの農具を私に示した。

——鐵が足りませんから、齒の所も木で造つたのですが、今は部落の者がみんな自分で造るやうになりました。かたい木ですからこれで結構役に立ちます。」

なるほど、今皆は、これで草をかきとつてゐるのか。ぐい〳〵とれるので面白いであらう。

目の前に、一廓繩をはりめぐらした、一際よく植え揃つた水田がある。聞けば〇〇氏自身が田植をしして丹精してゐる模範田だといふ。

——朝は日本語の勉强、午後は勤勞奉仕では、部落の若い連中活氣が出てゐる

でせうね。」

――連中ばかりではありませんよ。」

――こつちも活氣づいて來て大車輪です。

勤勞奉仕の赤い旗が三本、あをい水田の中でひら〳〵搖れてゐる。

（七）

――先づラジオ體操を見て下さい。」

と○○司政官が云はれる。私は、今日の「月例日本語教授研究授業」に集つてゐる數名の先生といつしよに、兒童たちの並んだそばに立つた。

內地のラジオ體操の伴奏よりはやゝゆつくりと、比島人の先生がピアノを彈く比島人の校長先生が、謹嚴な顏付で「イチ、ニイ、サン、シイ」と聲をかけながら、これまたゆつくりと「第一體操」「第二體操」を自ら行ふ。

四年生の男の子・女の子。日本の兒童にくらべると背丈がずゐぶん不揃ひだが

みんな得意滿面にこ〳〵しながら、手を伸ばし、足をかゞめ、身體を動かすゆつくりした體操ではあるが、元氣だ。運動場が殆んどなく、猫の額といひたいほど小さな校庭なため、アーケードのやうに造つた廊下にまで溢れてゐるのがいぢらしい氣がする。アメリカは、子供の幸福を思はなかつたのだ。

日本の兒童のラジオ體操にくらべたら、間のびがしてゐて、力がこもつてゐないと批評もできよう。たしかにマニラ式のラジオ體操である。しかし、マニラ化するほどに、ラジオ體操はマニラの青少年のものになつてゐるのだ。

比島ばかりではない。何れの土地でも、日本語とラジオ體操は、南の人々のものとなりつゝある。このことは、日本の新しい教育の仕方を、米英や和蘭の教育と明瞭に異る新しい教育の性格を論より證據、はつきり物語ることなのだ。

日本の言葉と共に日本の心をへだてなく限りなく摑めるやうにすること。さうして、南方の人々が、頑健な、强い人間になるやうにへだてなく限りなく力をか

すこと。私は、又しても日本の仕事の大きさを思ふ。

やがて、授業が始つた。うら若い比島人の女性の先生が、勿論全部日本語で授業を進めてゆく。外の先生たちは、ノートを出して感想や批評を書きとめつゝ授業を見守つてゐる。内地の國民學校の先生達の様子が、熱心な研究授業の様子がふと私の頭に浮かんで來る。日本語は、ひろがつたばかりではない。研究的一意慾によつて、深く滲みこむ狀態にまでもたらされてゐるのだ。新しい生活の仕方を示しながら。新しい生活の根となりながら。(了)

昭和十九年五月

目　次

日本語と南方の新しき生活
——日本語普及と國語生活——

はしがきに代へて

第一　大東亞建設と日本語……一
大東亞戰爭と文化の道……三
興亞言語政策の重點……二一
日本語普及の目的と方法……三一
思想戰と日本語教育……五三
文化工作と日本語普及……七五
宣傳戰と日本語普及……九三
日本語普及史の諸問題……一一七
大東亞戰爭第三年と日本語普及……一五三

日本語學校論……一六七

第二　國語生活の刷新……一八七

大東亞戰爭と國語生活……一八九
國語學への期待……二〇七
國語問題への用意……二一三
生活秩序と話し言葉……二二三
國語と思想——心といふ言葉……二三七
國語教養の環境——せりふと話し言葉……二四九
國語生活の倫理——話し上手と聽き上手……二六一
正しい日本語……二七七
言葉のたしなみ……二九七
標準語と雅語……三一三

第一　大東亞建設と日本語

大東亞戰爭と文化の道

——新東亞文化卽ち世界文化——

一

無限に高く純美なる究竟境、止むに止まれずしてその境を求め、その高貴なる、太古さながらなる渾融一如・綜合完結の至上境を追求して、無限に自らの矮小なる現實卑俗の「生」をひき上ぐる努力、その切々たる人間的努力、之を稱して、「文化」といふ。人間的「生」の地盤、制約、ともすれば「生」をひき下げんとするその繫縛の强さは、もとより人間的「生」の時間を通じて弛むことはない。煩惱卽菩提と自證しても、それは人間的「生」に對する澄明な觀照に達し得た心境に於いて、しかもその觀照的立場の限界に於いてのみ許されることである。

人間的「生」を無限に高次なる位層に開展しようとする願ひなくしては、至上境に迎りつかうとする「道」に自らの「生」を位置せしめ、常住不斷に自らの「生」を推進しようとする營みを怠るときは、人間的「生」は、遂に悲慘と無限地獄に陷沒する。「文化」とは、人間的「生」を頽廢と陷沒とから救ひ、支へ、創造の悅びに至らしめようとする「道」であり、その凛烈、嶮峻なる性格に於いてのみ體感されなければならない。現代の日本に於ける文化の概念が、いかやうに歪曲せられ、紛飾せられてゐようと、更に又、「文化」といふ未熟なる飜譯的用語例が文化の根本を體認するについて混亂を生じ易き嫌ひを持つことはいふまでもないが、ともあれ「文化」をいひ「文化」を思ふ心情に於いて確かに捉へらるべき第一義は、凡ゆる場合、凡ゆる刹那に際して人間的「生」を至上・至大の境にひき上げんとする努力である。その努力のひそかに描く透視圖である。從つて「文化」は、人間的「生」をあくまでも地盤としつゝ、しかも人間的

「生」に對して最も苛烈、峻烈な命令を課さうとする道程である。その嶮しき道程を齒をくひしばりつゝ受けとめる心情なくして、「文化」をいひ、「文化」を思ふは、凡庸か然らずんば破廉恥である。それは、商業主義に飼はれたる近代的動物の、ぬけぬけと爲し能ふところである。「文化」といふ言葉そのものは、もとより問題ではない。「文化」の名で考へられてゐる精神が「文の道」に常に在るごとくわれ・ひと共に努めることこそ問題であり、心せちに自らを「文の道」の遠きに立たせつゞける「事」及び「行」こそ、「文化」に於ける本質的な問題なのである。

世々、謙虛にして高邁な人々は、かくのごとき衝迫と憧憬とに自らを捉へられつつ、無邊際の彼方に向かつて努力した。その時代的、個人的素質の限度を賭して、切々と努力した。その切々たる努力の果に、遺績乃至は足跡をそれぞれ殘した。それぞれの遺績・足跡にはすべて氣高さと共に、運命・限界の傷痕がある。

かやうな人間的努力の遺績・足跡之を稱して「文化財」といふ。遺された「文化財」は、かくして常に、人間的努力の象徴としてのみ最も本質的な存立の理由を持つものであり、その成果に對して、その「かたち」のまゝに心醉する安易な好愛心は些したる意味を持つことはできない。「文化財」は、その形態・形骸に於いては、常に、限界と未熟とを示す宿命に在る。「文化財」は、その「かたち」に於いて、微笑しつゝも、常に乘り超えらるべきものとして後人の前に立つてゐるのである。「文化財」は、その最も偉大なるものと雖も、自らの構造の中樞に秘められた永遠への願ひ、白金のごとく鋼鐵のごとく純白にして强靱な、彼の至上境への悲願を、謙虛に探り求め、その願ひの烈しさに迫切せられる心情のみを朋友として期待してゐる。その心情に受納せられることによつてのみ、自らの存立の意義を充足する。文化財は、その形骸に對する凡庸な愛好者によつて、いはゆる聰明なディレタンティスムによつて、存立の意義を全うすることは決してない。

皇國の現代は、いはゆる文化主義若くは文化財主義の否定を、きびしく教へつゝある。さうして、眞に「文の道」を思ひ「文化」の眞諦を祈念すべきことを切實に體認せしめつゝある。東亞に新しき秩序を現實化しようとする、從つて全世界の人間的「生」に新しき秩序をうち出さうとする事業、これこそさながらに「文化」の眞諦ではないか。「文化」の何たるかの明確な、調べ高き表現ではないか。

東亞新秩序は、嚴肅なる大東亞戰爭の進展の中に、砲煙と血潮との中に、一歩一歩と建立せられつゝある。遙かなる、高朗なる至上境、即ち地球上のなべての人間的「生」に新しき秩序を確立せんとする目標を追求しつゝ。

「文化」とは、生ぬるき遊戲ではない。凡庸な合理主義や羸弱な感傷主義の玩び得る遊戲ではない。卑俗を切斷し、高貴に轉身せしめる念々の「道」である。この骨格脫落すれば、「文化」は即ち人生に於ける遊戲である。「文の道」といふも、要は「道」であり、「人の道」のすゝめであり、更にいへば「臣道」を掘り

下げる指針である。「道」に於けるこの峻烈なる決斷的性格を、別の理念でいへば、それは「武」の性格でもあらう。文武兩道は、日本的性格を生活現象としての實現面で捉へてみた上での差にすぎず、「文の道の中核」は即ち「武の道」の神髓であることはいふまでもない。「文化」は「文化財」を結果するも、「文化」は所謂「文化財」によつてのみ存立するものではない。

大東亞戰爭の世界史的、又は世界文化史的意義が盛に說かれる。その言說の公約數的な妥當さはもとよりであるが、その根據は「文化」の眞義「文化の道」の高貴さと凜烈さとをわれらに啓示するところに存するであらう。從つて、大東亞戰爭の意義を理解するといふも、その意義を自らの身にひきつけて切實に考へる受けとり方がなくては、未だその本質的意義に通ずることにはならないのである。

二

大東亞戰爭は、われらに「文化」の眞諦を教へ、人間的「生」に於ける新しき秩序への常住不斷の努力を指示してゐる。そも〱現實改變の逞しき前進、そこにこそ倫理も、宗教も、藝術も淵由するのであり、それを離れて一切の文化的なるものの形成はあり得ぬ以上、大東亞戰爭こそは、戰爭さながらに新文化胎生の根柢であると考へねばならない。

西歐文化、西歐的生活秩序に對する反撃であるといふ以上に、大東亞戰爭の意義は深いであらう。アジアを、物心兩面に於いて解放するといふこと、若くはアジアに於ける歐米化から解脫せしめるといふこと、大東亞戰爭は、この意義の外にこの形式的意義の上に、更に深いでもあらう。それは、人間的「生」を頹廢と陷沒から徹底的に解脫する「道」を、眞に「文化」によつてのみ高く在り得る「道」を、嚴肅に切實にたゝきこむ教へなのではないか。

新しき東亞文化の建設が求められ、說かれる。ともすれば、われらは安易に新

しき東亞文化圏の建立を云爲する。舊きものゝ破壞が新しきものゝ建設を導き出すことの必然を意識し得るにしても、それは甘い夢想であることを規れなければならない。

いはゆる舊き「文化財」の破壞と、いはゆる新しき文化財の建設とのために、たゞかやうな觀念論のために大東亞戰爭は戰はれてゐるのではない。これに類した事例でいへば、いはゆる抽象的な「思想」いはゆる觀念的な「世界觀」のために、大東亞戰爭は戰はれてゐるのではない。

骨身に徹して戰爭を感得してゐない現在の銃後人たる私達は、大東亞戰爭を戰ひつゝある將士を離れて易々と新しき東亞文化の設計を考へる傲慢をむしろ愼むべきであらう。砲煙と血潮、抜きさしならぬ、嚴肅な事實が、そこに在るばかりである。人間をたゝき直さうとして、そこに在るばかりである。

それ故に、新しき東亞文化の建設とは、この嚴肅な事實の敎へを、われら日本

人はもとより、異民族のおのも〳〵がしかと體認すること、自らの人間的「生」にしかと受けとめることから發足するであらう。

異民族の社會から西歐文化を驅逐し、文化面に於いていはゆるアジャ的停滯ともよばれる狀況を離脱せしめること、それは當然成立するし、成立せしめねばならぬことでもある。

しかし、純美高朗なる、遙けき魂の故郷に向かはうとする苛烈な自己脱皮の心情と身構へを、大東亞戰爭の嚴肅な事實そのものによつて東亞の諸民族に深く滲透せしめ得ること、そこに東亞文化圏の基本的性格がうち出されるであらう。

おのもおのもの人間的「生」を常に上向的意慾に保ちつゞける心の習性、健康なる、深切なる生活意慾と文化感覺、これが東亞に一般化せられることによつて、東亞文化圏は新しき東亞に於ける人間生活の花として開花するであらう。かやうな根柢的條件は、もとより合理主義や、文化主義にとつては何ら魅力ではない。

しかし、最も高きものは、かやうな意慾と感覺、心情の習性の中に在る。若くはその中に生まれる。

それこそは、記紀の世界に通じる「道」であり、心の姿勢である。西歐に、東亞に喪はれてゐる太古の息吹きであり、統一である。

東亞文化圏は、かくしてその基本的性格に於いて、日本的生活・日本的文化感覺の原型を示現し得るに至るであらう。「悅樂」と「文化」との間に架けられた橋をとり外し、「文化」が自らの內奥に於ける熾烈なる鬪ひを隨伴してのみ在り得ることを確立すること、それが新東亞文化圏成立の基礎である。

儒・佛・道・回、また耶蘇・印度等、もろもろの宗敎的意識が、日本的感覺により再構成せられて何を形成するか。全地球上の人間言語のほとんど一切の性格が混在し共在するところ、これに筋金を通すといふことは、決して容易でない。

日本の文化感覺・生活精神をひろく東亞各地域に移植し、日本語による表現方法を各異民族に會得せしめることの必須であるのはもとよりであるが、それも亦公式主義や技術論の意識範圍でのみ考へらるべき問題ではないのである。

「文化」は、寄せ集めや模寫によつて形成せられるものではない。新しき東亞文化の形成、東亞文化圏の建設といふも、いふまでもなく、印度文化や支那文化やアラビヤ文化等の諸要素の單なる機械的な抱合の上に考へられる筈はない。日本の生活精神・文化感覺を中核とし、東亞の現實に攪伴・激動せしめられつゝ、次第に、人間的「生」の發展的樣式が東亞全域に一定化すること、それが東亞文化圏の建設といふ事象であらう。さうして、この大いなる仕事は、何事よりも先づ、大東亞戰爭遂行となつて現成してゐる日本の現實創造の意識、峻烈高邁なるこの文化精神を、東亞の各民族に體認せしめることから始めねばならない。移すべく、傳ふべく、身體にぶつゝけて感得せしむべき第一は、「文化」の形式、「文化財」

の様式ではなく、現實をあくまでも高めゆかんとする眞摯なる文化意識である。「文の道」の本質である。

三

大東亞文化の建設を思ふにつけ、それの方途を常識的な明確さで割りきつてみれば、日本精神の滲透と各異民族文化の育成といふことが問題となる。文化工作の實體は、それぞれの異民族に對して、常に日本精神の滲透と固有文化の育成といふ軸を中心として回轉しなければならない。しかも滲透は、單なる傳達ではなく、育成は文化的遺物の自然的繼承・延長ではないのである。日本の生活精神・文化感覺を、異民族自らがその内面的要求の深切さに於いて身につけ、日本的感性に裏づけられ、再構成せられた各個特有の文化狀態を現出しゆくことである。凡庸な文化宣傳の意識は、私達の最も戒むべきところ。日本精神と各異民族文

化との間を思ふについて、これを並立的に、若しくは對立的に考へる觀念論は、全く棄却しなければならないのである。

高朗・清颯たる日本精神の滲透こそ骨格逞しき固有文化成立の母胎なのである。滲透と育成とは二にして一。いや活きて働らく力源として日本精神を考へるとき、自らを滲透せしめることと他を育成することとは、本來一如の方向である。移し、傳へ、注ぐべき日本精神そのものにつけて、誤りなきを期するが肝要のこと。次いで、新しい土の上には、慈雨のごとく、豊かに優しく注ぎかけるやうに配意する謙虚さ、親切さが私達への戒めである。

東亞文化圏建設といふにつけて、創造的な營みの主體者たる位置と實踐から日本人自らが逸脱して、デパート的なる異質文化財の陳列・展覽をこれ事とするがごとき姿勢をとることがあつてはならない。また、汲めども盡きぬ日本精神の内包する深さを、傲慢に觀念化し、觀念的固定物としてたゞ現地に輸送配給するがご

とき機械主義はもちろん嚴戒すべきである。しかし、それらの迂愚は、すべて問題ではないであらう。文化工作の當事者に日本精神の高さ・深さを信ずる謙虚さがしつかりと立つてゐるかぎり、自ら日本精神に敎へられつゝ日本精神をひろめようと努めるかぎり、日本精神自體が正しくして的確な實踐的方途を示すであらう。

新しき大東亞文化とは、その綜合的性格に於いても、その發展的性格に於いても、必ず日本精神の徵表を現出してゐるであらう。その新しき文化を支へ、推し進めてゐる統一的な活力として、日本精神の高さを更に見出さずに居られない明日こそ、私達の眼前に在る。

四

歐米の植民地乃至は亞植民地としての東亞。悲劇的なる東亞は、既にしてわれらの追憶からさへも消え失せようとしてゐる。由緒正しき東亞の大地に、英米蘭

が踏み入れた泥靴の跡は、大詔を戴く皇國男子の血潮によつて、わづか一年の間に殆んど全く拭ひ去られた。

皇國文化の光が、今さんさんと東亞の各地域にそゝぎつゝある。皇國の文の道は、今遠く南海にまで達する。われらは、この光の一微粒子となり、この「道」に東亞の友人達を立たしめなければならない。

東亞の全地域に生を享くる者、凡そ十億。そこには、すくなからぬ文盲、未開の人間的「生」がある。一二の例をあげれば、かつて蘭領東印度の名により汚されゐたる地域には、約七千萬の總人口のうち學校敎育を經驗せるもの僅かに二百萬。ビルマに於いては、文盲なるもの、男子はその總數の約五割、女子はその總數の約九割。

これらの未開・未生を切りひらき、より高き人間的「生」へとひき上げること、これが私達にとりひとつの實踐主題となる。文盲絕つべし、雜草の粗奔は、生命

の喜悦を表現する狀態にまで至らしめなければならない。日本の文化的形成力は、必ず未開・未生の開拓に成功し、民度の向上といふ具體的事實と一聯の狀態として、「文化」への情意と營みとを彼等の間に實現するであらう。それも、廢頽と快樂への誘惑によつて僞裝のいはゆる「文化」を與へようとするアメリカ的なるものと全く異つた、清朗・健康な「文化」の實體を與へることゝなるであらう。

さうして次には、アメリカ的な輕躁さによつて歪められ、汚濁せられてゐる民衆の頹廢的感覺を逐次清掃するといふ主題、それが觀念論におちいることなく推進されねばならない。

かうした具體的な目安の下に、多岐な仕事が展開せらるゝとき、新東亞文化圏は現實化せられるであらう。しかも、そこには修正符を打たる時期はなく、無邊際の彼方に向かつて、刻々に形成的努力が續けられるであらう。新東亞文化の建設とは、無限に人間的「生」を高めゆかんとする「文化の道」日本の「文の道」

の精神の普遍化といふことであり、なんらの文化的固定相を、安易なる文化樣式の成立のみを意圖するものであつてはならない。

言葉をかへれば、東亞文化圏の建設とは、常に常に高まりゆかうとする人間の心の姿勢を、東亞各異民族の間に一般化することである。さうして、東亞文化圏とは、常に常に建設の過程に在るであらう。凝滯することなく、固定することなき、高朗・凛烈な「文の道」の意識を骨格とするかぎり。――

現在の私達にして言ひ得る一點は、この無限に高まらうとする文化意識を、東亞に徹底化することの必要である。

十七・十二

興亞言語政策の重點

大東亞共榮圏建設といふ絶對的な私達の仕事を、言語の領域で考へてみると、仕事の目安はぎりぎりのところ次の三つになると思ふ。

第一に――日本語の徹底的な普及によつて大東亞共通語を確立すること。

第二に――大東亞圏内に於いて現在政治的に一單位たり、或は近く一單位たるべき地域の各々が何れもそれ〴〵の現地語によつて言語統一を實現すること。つまり、各地域に於いてそれ〴〵原住民の母語による標準語を確立するといふこと。

第三に――英語勢力の殘滓を驅逐淸掃するといふこと。

もちろん右の三つは極めて大摑みないひ方であり、議論や主張は、これらの主題をいかにして完璧にしかも迅速に實現することができるかといふ點にかゝり、

その具體的な方策方法の如何によつて岐れるわけであるが、とにかく右の三つに思考の重點の存すべきは明らかであらう。そこで、以下にこれらについて熟思すべき心構への主なるものを擧げてみることにする。

第一の日本語の普及・大東亞共通語の確立といふ點については、現狀を屢說する要はないであらう。大東亞の今日及び明日を生きるために、現實生活の必要乃至文化的要求から日本語を學習しようとする意慾は、東亞の各民族社會に於いて一般的な事實である。もちろん、日本語が現實に大東亞共通語たる狀態を將來するためには、私達の非常なる努力と、相當の時日とを要するであらうが、東亞共榮圈建設を絕對目標とするわが國策を現實的に把握し、國策より遊離することなくして諸事百般措置のよろしきを期するかぎり、その事實は必ず將來する。

さて、第一の主題——日本語普及の具體的措置については、先づ次のごとき諸

點が心せらるべきであらう。

その一は、全地域を一貫して日本語に統一を保たしめること。言葉に於いても、言葉を表記する書方に於いても、醇正にして權威ある日本語を移植するといふ努力が、各地域を通じて行はるべきこと。いはゞ植民地日本語ともいふべき變態日本語の成立するおそれは、今より嚴密に戒めねばならない。

その二は、日本語の原住民の母語に對する關係を、各地域に於いてそれぞれの特殊性に適切なるごとく措定するといふ現實的な考慮をすること。日本語を、——ある地域に於いては國語として絕對的な位置づけをする、ある地域に於いては國語の一として位置づけ、母語と並んで二重乃至三重國語制の言語社會を構成する有力な國語とする。ある地域に於いては公用語として位置づける。ある地域では最も有力な第一外國語としての實を致す、——といつた相違は生ずるであらうし、また生ずべきである。

そして各地域それ〴〵に、日本語が迅速に且根深く普及するための最も適切な處置が講ぜられ、域內に日本語が實際に滲透するときこそ、事實に於いて、日本語が各地域を通じ共通語たる狀態も實現するわけである。

その三は、現在の段階に於ける東亜新秩序建設のための何れの問題ともひとしく、日本語普及といふ仕事に於いても、國內體制をいつそう整備するといふことである。國內に於ける日本語敎育に關する諸々の仕事は、國外に對して醇正なる日本語を迅速に普及するといふ目的、方針の本に打つて一丸とならなければならぬ。この新しい仕事のために、私達全部が今日までよりもいつそう團結し、建設的な立場に立つて協力しあはねばならぬ。日本語自體についても、日本語の敎育方法についても研究を相互に提供し、各種の場合に於ける敎授技術の切磋琢磨に努める等、日本語敎育界は實質的な仕事の上でいつそう協力、團結の强化に努めねばならぬ。

さうして次には、我が國語の海外普及といふ事實に當面して、日本國民全體の國語の統一、國語生活の整齊といふ課題が擧げられる。私達日本國民各自が自らの國語生活を深切に反省し、身を以て醇正なる國語の表現者、形成者であるやうに自らを訓練しなければならない。

日本語普及についての心構へは右の要約で滿足するとして、第二の主題――各地域に於ける原住民の母語に關する問題を若干考へる。

いつたい大東亜共榮圏建設のためには、その構成單位たる各地域の民族が新しき大東亜民族としての自覺に貫かれた組織體とならなければならない。さうして、この自覺と組織とは、もちろん日本の指導によつて鞏固となりつゝあるが、日本の指導は、各異民族がその自發的な意志に於いて日本の建設構想を摑み、日本的世界觀を把へ、かくて自己自らに責任をとり創意工夫の能力を躍動せしめつゝ能動

的に日本に協力するといふ態勢を致すことに眼目をおくべきであらう。日本の指導は、たゞ受動的な態度に立つ協力者を持つといふことに滿足するのではない。

かくして日本は、各異民族の生活圏が新しき理念を中核として統一せられ、米英的な分裂政策の犠牲たりし狀態から自主的に脱却するやうに指導しなければならない。さうしてそれがためには、日本語の徹底的な普及によつて各異民族の生活圏に精神的團結の楔を打ち込むことはもちろん第一義的な仕事であるが、同時に各異民族の母語を統一し、標準的母語の確立によつて各異民族社會が統一せられ組織化せられるやうに指導することも肝要である。

この仕事については南方の各異民族に對する指導が特に直接的な問題であり、フイリピン、ビルマ、マライ、スマトラ、ジャワ等における施策が特に重要であらう。

例へばビルマに於いては二十數種の言語があるが、指導的人士の間に共通語的

な勢力を持つてゐた英語に代つて、ビルマ語が生活語としても文化語としても標準語的實質を得るやうにする指導が重要である。フイリピンにおいては、既に公用語の一として明示せられたタガログ語が速やかに標準語としての實質を得るやうに指導することが肝要であり、マライ語の弘通するマライ、スマトラ、ジャワ等の域内において標準的マライ語を確立する指導も大切である。

さうして、もちろん標準的母語の確立及び弘通といふことは、なか〳〵容易ではないであらう。例へばフイリピンにタガログ語を弘通することは、地理的にはむしろ弘通範圍のより廣いといはれるビサヤ語の存することを考へても、決して容易ではない。またマライ語の弘通地域に於いて、マライ語の表記法を統一することも考へらるべきことであり、イギリス的な綴りとオランダ的な綴りを改廢し、新しき表記法を弘通することも考慮せらるべき問題にして、また決して容易でない問題である。これらは、何れも日本の適切な指導によつて近き將來に實現

せらるべき問題である。

この指導に於いて心すべき根本的な方針・目的は各異民族の母語における標準語運動が興亞精神の生きた把握を目標とする營みであるべきことだ。興亞精神の觀念的理解ではなく、母語によつて興亞精神を生活的現實として身につけさせようとする目標、自覺によつて標準母語の確立が推進せらるべきだといふことである。標準母語運動は標準語操作技術の徹底のみを目ざさず、標準母語による興亞精神のいはば肉體的なる體得であり、新しき世界觀に貫かれた精神教育であるやうに指導せらるべきである。

かやうに考へて來ると、心構への二として、標準母語運動を推進してゆく上に日本語との關聯、日本語の影響が當然問題となる。

新しき精神に支へられた標準母語を成立させるためには、すくなくとも新しき世界觀の內容を表現する語彙、また新秩序建設に邁進する生活を表現する語彙に

ついて、日本語を基準とする選擇や造語が必要であらう。學藝用語や、技術語を統一したり造語したりすることは、實に私達の國語傳統に對する責任であるばかりでなく、大東亞諸民族に對する指導者、大東亞文化の興隆を企てる指導者としての責任である。

第三の主題――英語勢力の驅逐淸掃の必要は、贅說するまでもないであらう。これについては、その實效を擧げ得るための要件にしてかつ手近な方法は、先づ、私達日本人各自がいついかなる場合に於いても國語に對する心構へをしつかりと保ち、國語に自信と素養とを持ち、異民族との交渉に於いて常に國語を第一義的言語として使用することである。

國語に育ち、國語によつて生きる日本人としての倫理、いはゞ國語倫理をしつかりと保持し發揚することである。さうして次に、日本語を學習し、使用するこ

とが英語を學習し、使用すること以上に、現實に於いてはるかに便宜であり有益であるやうに凡ゆる條件を整へることである。現實生活上の好條件を與へることはもちろん、日本語習得のための施設、教育者、教育資料、參考資料等の諸條件が、現實に於いて英語學習の場合よりもはるかに優位な條件を完備することである。

言語は何としても生活のさながらな表現である。また生活そのものを形成する强力な媒材である。大東亞共榮圏建設とは大東亞諸民族の新しき生活を確立することであり、從つてそれは切實に言語の問題である。さうして、言語の領域でこの建設を推進しようとするにあたつては、實は大東亞諸民族の今日及び明日における一切の現實と必要とを考慮の中におかなければならない。言語建設は、まことに綜合的視野と多角的なる實踐とを要する問題である。しかしながら、現在において考慮すべき要點は、ぎりぎりのところ以上の三つになると思ふ。

十八・五

日本語普及の目的と方法

一

異民族に對する日本語教育乃至は異民族社會に對する日本語の普及・滲透といふ事業が、我が國の對外文化活動いはゆる文化工作のうち甚だ重要な位置を占めることは敢ていふまでもない。たゞに重要な位置を占めるといふに止まらず、それは文化工作一般を推進する最も基底的な條件であり、その實質的な進捗度を測り得る最も具體的な基準であり、また文化工作に於いて根幹的な位置を與へらるべき事業である。

それは、東亞各外域に於いて現實に進行しつゝある事態の示すところによつて

さういひ得るのみならず、文化工作といふ國家的な事業、全國民的な對外活動の本質に照らして、確實にさう斷じ得るからである。

凡そ文化工作といふかぎり、その活動の本質は對象たる各異民族について、日本を的確に理解させること、日本との深くして切なる生活的な結合を實現すること、この二つにつきる筈である。或はこの二つの活動指標を一つに止揚する具體的な統一原理、卽ち異民族が日本民族の生活を全體的に理解することによつて、私達日本人の魂と深切に結びつく現實を生み出すための努力に外ならない。

これが文化工作の究竟の目標であり、且その本質である。もちろん、我國の執り行ふ文化工作の一般は、右の目標・本質を抽象的に且素朴に解するかぎり、その事務的範圍に於いて、その技術的側面に於いて、右の本質的圖式はあまりに安易な斷定であるといはざるを得ぬほどに、複雜であり多岐に亙るであらう。しかしながら、文化工作の複雜多岐な性格とは、對象たる異民族の民族社會的條件及

び日本を主體とする歷史的進展の各段階に於ける現實的制約の如何によつて、實踐的方圖の多角的なるべきことを意味するにすぎず、要するに方法的な思考に局することである。方法に於ていかに多角的なることが意圖せらるべきであるにせよ、目標・本質は常に一義的明確さに於て意識せられてゐなければならない。我國の營む文化工作の努力は、方法の凡ゆる複雜さにもかゝはらず、斷じて常に如上の目標・本質に統一せられてゐなければならないのである。

もちろん方法の多角性・多層性は、それ自身再思三省せらるべき問題を藏する。異民族に對する宣傳乃至啓蒙の事業が、異民族の生活に對するいはば肉體的共感に裏付けられた體驗と、透徹した政治的理論を以て基礎づけられねばならぬ所以もこゝに存するのである。抽象的・自慰的なイデオロギーの運用や、觀念的・感傷的な異民族への愛情のみによつて、的確な方法が生み出されることはない。如上の目標・本質に卽していへば、異民族に於ける日本の理解といふも、それは

客観的視角に於いて、正確と認められる日本の理解であると共に、あくまでも各異民族自身が、その生活的現實に於いて、自らの切實なる共感と慾求とを以て具體的に日本を把握してゐる狀態を實現することでなければならない。從つて、單純に日本的なるものを傳達するといふ方法を以て、そのやうな狀態が直ちに實現すると考へるごとき安易さは許されないのである。そこには、各異民族自身が、いはゞ自らの内面的な主働的な慾求から導き出されて日本を捉へるやうに、方法的に適切な考慮・工夫が拂はれねばならないのである。

また私達日本人と各異民族との深切な人間的交情の成立といふも、それはひたすらに感情的側面にかぎられた交渉であつたり、或は私達が日本精神の背擔者であるといふ主體的な自覺・立場を抛棄して徒らに異民族の生活・文化の中に耽溺しようとする姿勢から生じ易き、いはゞ、異國趣味的な交情であつてはならないのである。私達と異民族との間の魂の結びつきには、第一に、相互に自らの現實生

活の立場の一切を勇敢に吐露することに於てそれぞれを深切に認識し、しかもなほ且成立してゐる交情、卽ち全生活的背景に支へられてゐる逞しき・男性的な友情でなければならない。さうして又、かやうな交情の成立を志向する私達日本人は、その心情の傾きの根柢に、自らの主體的位置に對する嚴とし凛乎とした自覺がなければならないのである。男性的な交情に於いては、主體的意識を缺如した人間が、自らの人間的迫力乃至は人間的魅力を他に及ぼし得る筈はないのであり、從つて我と彼との友情を醸成し得る主働的なはたらきをなし得る筈はないからである。さてかやうに强靱な友情が、私達と各異民族との間に生れ出づるためには、もちろん方法的にさまざまの苦心・はたらきかけが必要であり、また私達日本人自らに於ける反省と錬成が必要であらう。

かくして、文化工作の目標・本質が現實に於いて具體化せられるためには、多角的・多層的な方法的設計が案出せられ實踐せられなければならないのである。

しかしながら方法の多岐・複雜を貫いて右の目標・本質は常に保持されてゐなければならない。方法への苦慮に於いて目的意識・本質的規定を忘却するがごときことは事業の根柢を揺がすことである。今日、異民族に對する文化的なはたらきかけを意圖する言説の間に、屢々それが現實的・具體的なる事業であることの條件を度外視してただ目標・本質を觀念的に云々することを以て滿足する傾向と、それとは逆に方法の效果を腐心することによつて目標・本質への透徹した意識を喪失する傾向とが散見するが、かやうな傾向は共にきびしく戒めなければならない。日本人の生活文化を、たゞ大量に迅速に外域に持ち出し、置いて來るといふだけの觀念論で、文化工作は實效を生ずる筈はない。といつて又、對象の狀況に集點を合はすことに苦慮するのみの技術論によつて、文化工作は確立する筈もないのである。

二

文化工作の本質をかやうに考へると、異民族に對する日本語普及の事業は、正に文化工作の根幹であることが明らかとなる。

日本語普及・日本語教育の當面の目標は、これを言語政策の視角に於いて考へるときは、いふまでもなく日本語が東亞諸民族間に於ける共通語たるの事實を招來することである。卽ち、これを各異民族の母語との關係に於いていへば、國語・公用語もしくは第一外國語としての位置に於いて日本語が一般に把握せられることであり、またこれを東亞に普及せる歐米語との關係に於いていへば、それらを漸次壓倒し、歐米語の普及とその言語意識による植民地人的・亞流的な文化感覺・生活意識を淸掃する役割を果たすことである。かくして日本と各異民族との間及び日本に媒介せられる各異民族相互の間に意志・感情を疏通する有力な言語手段が成立することである。

しかしながら、日本語普及・日本語教育の事業を主體的・行爲的な立場に於い

て規定すれば、それは本來異民族に對し日本を具體的に理解せしめようとする行爲であり、日本民族との深切にして强靱な友情を成立せしめようとする行爲であり、正に日本の行ふべき文化工作の本質をそれ自身に於いて明きらかにしてゐる事業といふべきである。

さて、異民族に對する日本語の普及並に教育が、日本精神の體得を目標とするものであり、たゞに日本語といふ言語の操作技術を身につけさせることを以て目的とするものではないといふ主張が有力に行はれてゐる。日本語の技術的習熟の先に、日本精神の把握といふ、より高次なる段階が獨立して存するとする態度である。しかるにまた一方、異民族に對しては、日本精神を把握せしめようとするがごときは、觀念的なる空想にすぎず、殊に南方共榮圈に於ける文化水準低き諸民族のごときを對象とする場合、かやうな意圖は全く無意味なる國粹的理想主義であり、むしろかやうな觀念的理想主義が迅速な實質的な日本語の普及を阻害する

おそれさへも存するといふごとき見解も間々存するのである。しかしながら、その何れもが未熟な思考であり、その何れにも日本精神と日本語が切り離されて考へらるゝ傾向、固定的・抽象的に日本精神の所在を考へる傾向が指摘せられる。さうして前者については方法・手段と目標とを相卽不離の關係に於いて捉へる用意を缺いた目的意識、後者に於いては目標に關する省察を缺いた方法意識の專制が指摘せらるべきであらう。

いふまでもなく、日本語は、それ自身日本の生活・文化全體の生ける自己表現である。しかも、凝固し固定化した文化財としての日本文化でなく、日本の過去を建設し來り、日本の未來を創造する、日本の全文化機能の生ける自己表現であり、日本の全生活體系を物心兩面に於いて支へてゐる民族精神の具體的な自己表現である。從つて、私達が異民族に對し日本語を語り・讀ませ・書き示すといふ行爲は、それ自身に於いて日本的生活秩序・日本文化を最も直接的に語り・讀ま

せ・書き示してゐることに外ならない。逆にいへば日本語を學習しつゝある行爲それ自身に於いて、異民族は刻々に日本的生活・文化の統一的表現を具體的に把握しつゝあるわけである。さうして、異民族が日本精神の性格・構造・創造力の實體を深切に理解・體認するためには、もとより幾多の段階と層序とを豫想せねばならぬであらうし、そのやうな理解を導き出だすためには、當然、方法的に適切な段階・層序を豫定し用意して與へる必要もあらう。しかも、日本精神の理解過程に於ける段階は、必ずしも日本語自身の言語的機構の複雜度從って語學學習の方法體系に於ける難易度によって區轄づけらるべきものではなく、むしろ一々の日本語として生起してゐる日本人の言語行爲の實體について、それを内面的に把握し得る程度の深さ・淺さによって規定せらるべきである。平易なる日常の言葉、いはゞ生活語的位層に於ける日本語にしても、論理的に情緒的に複雜微妙なる構造・機能を持つ言葉いいはゞ文化語的位層に於ける日本語にしても、日本

精神を具體的に全體的に理解するための方法的媒材としては、受納者に對して必ずしも難易の度を異にするとはいへぬのであり、また價値的な差等を持つとはいへないのである。ともあれ異民族に學習せしむべき日本語は、私達の言語生活の感覺に照して、それが醇乎たる日本語であり且生々發展する民族的生命の自己表現たることの認め得らるゝ委相のものであるかぎり、日本語それ自身の把握を、日本精神の具體的な理解にあたつて、もつとも有力な手がゝりとしなければならないのである。

凡ゆる文化工作の方法・技術は、もとより日本の理解と日本との交情を喚起するに寄與するわけであるが、日本語が日本的生活秩序・文化感覺の最も直接的な具體的な表現であるが故に、文化工作の方法的領域に於いても、最も中心的な位置を占め得る、また占めねばならない事情がここに存する。

三

異民族に對する日本語教育の活動が、我が國の對外的文化活動の目標と本質とに照らし、正しく中樞的位置を占むべき所以を右に述べた。私達日本人が眞に東亞共榮圏を建設し、やがて世界に人間生活一般の新秩序を生み出さうとする熱意と自信とを持つ以上、凡ゆる論議を超えて、世界新秩序建設の行爲的主體たるの位置と責任とを自ら取らねばならない。さうして、この行爲的主體たるの立場にしつかと立てば、私達の日本語を以て、異民族へのはたらきかけの本格的な通路とする態度が自づと私達の肚に据つて來るのである。

さうして、かやうな主體的自覺に立つた心構へからは、異民族への日本語移植といふ實踐的な問題に直接して、當然自らの國語に對する尊重の念、自らの國語生活を規整し、自らの國語感覺を磨き上げようとする熱意が生じて來る筈である。

すくなくとも、自らの國語に對する自信が生じて來る筈である。世上往々にして、海外への日本語普及といふ問題に當面して、我が國語に對する機械的・合理主義的整理を第一義的な要件なりとする考へ方が散見するが、これは誤りの最も甚しいものである。

もちろん現代の日本人に於ける國語生活の實際が、充分な統一と整齊とに達してゐるとは認められない。從つて、數多の日本人が異民族の社會に日本語を移植するに當つて、日本語の亂雜を憂ふべき事實も、屡〻大陸の現實に見出されるところである。

さうして、日本語普及・日本語教育を推進するについては、教育者としての實踐に於いて異民族と接する人々の營みを中心とはするが、實は海外に進出する全日本人の國語生活、しかも日常的行爲に於ける國語生活が、そのまゝ全體的に異民族への日本語教育たるの影響を與へる事實を擧げるのである。從つて、現代日本人

の國語生活に於ける統一・整齊の不充分なる狀態がそのまゝに廣く異民族の間に反映して、異域に於ける日本語の權威に疑惑を抱かしめ易いばかりでなく、實利的立場に於いても不便　非能率を結果し易いことも認められるのである。また、全東亞に移植せらるべき日本語は、著しき速度を以て普及し、異民族社會の各階層に深く普及せらるべき要請と現實とに在る。かつて歐米語が東亞の各地域に普及せられた過程とは、全く歷史的段階を異にしてゐるし、又はたらきかけの程度に强弱こそあるべきではあるが、同時的に凡ゆる地域の異民族が對象とせられ、凡ゆる階層が對象とせられると共に、また日本語移植の役割を現實に遂行する私達日本人の進出も、大規模であり各階層に亘るのである。從つて、日本語自體の狀態がそのまゝに異民族社會に擴充せられることも、甚だ著しいことに注目せねばならない。

かやうな意味に於いて、日本語普及といふ事業が私達日本人に於ける國語の統一と整齊を要求することは當然である。さうして、國語の統一・整齊といふも抽

象的な言語實體なるものを豫想してこれを整理するといふ機械的な觀念論、生活的現實から切り離された志向にとゞまることなく、現實に私達の國語生活に統一整齊を醸成しようとする實踐が要求されるのである。

右のごとく國外に於ける日本語の問題は實に國內に於いて解決の支點を見出すべき事實が多いのである。しかしながら、國外に於ける問題に直接して、自らを反省するといふ立場は、反省の深切さに於いて意味を有するのであり、それは我が國語に對する信念に動搖を與ふるごときことであつてはならない。異民族への日本語敎育に立ち向かふ實踐的氣魄の根柢には、我が國語に對する絕對の信念が確立して居らねばならないのである。反省・鍊磨は、自らの國語生活の貧困・怠慢に對する處置であり、我が國語自體の本質に對する輕躁な否定的・批判的心情を誘起することであつてはならない。さうして、反省と鍊磨とは我が國語の獨自な本質のうちに整理・整齊の理論的基礎を求める態度に立ち、言語形成の民族生

活的地盤を異にする歐米語の現實並びに法則から捨象せられた言語理論や文學理論を直譯的に我が國語の現實に適用しようとするがごとき迂愚は、當然これを避けるであらう。國語に對する反省錬磨自身が、我が國語の本質・いのち・價値を漸次把握し得る契機・方法となる筈である。

それはさて措き、異民族に對する日本語教育活動は、主體的自覺の確立を前提とし、その行爲的主體に於て日本語に關する確乎たる自信の所在することを、徹底的に必要とする。

四

異民族に對する日本語普及・日本語教育の活動に於いて次に肝要なる要件は、その實踐原理として、高き倫理性が把持せらるべきことであらう。

いふまでもなく日本語教育は、日本國民に對する國語教育と異なり、對象を日本語生活者の外に置く活動であり、しかも對象は多樣多層である。從つて國語教育と異る別個の構造を持ち、別個の技術的要件を持つ筈であり、それなくしては日本語教育がその方法體系を現實に定立せしめ得る筈がない。しかしながら異民族に對する日本語教育活動が、その本質的意義に於いて充足せられるためには、何よりもその實踐原理として倫理性が貫かれて居らねばならないのである。

もちろん、教育活動であるかぎり、日本國民に對する場合と異民族に對する場合とに論なく、その實踐的主體に於いて倫理性の確立が要求せられることは同斷である。しかし日本國民に對する場合には、教育活動の主體と客體との間に、日本語をめぐつてひとしく行爲的責任がある。國語教師も國語生徒もひとしく、國語生活を錬磨伸張すべき責任にある。そこには授くる者と導き出さるゝ者との立場の相違が存するのみであり、國語を錬磨すべき共通の責任と要請とにあるといへるであらう。しかるに異民族に對する場合にあつては、實踐的主體は被教育的

立場に在る客體と責任・要請を分つものではなく、その間には地盤的な結合は必ずしも存在しないのである。極端にいへば、たゞ實踐的主體に於いて、日本語普及・教育の必要と必然とが確立してゐるのみであり、被教育的立場にある異民族は、最初必ずしも日本語學習の要請と責任とを意識することはない。從つて、教育活動の主體がいとなむべき最初の方法的問題は、彼等に對して日本語學習の必要と必然とを意識づけるための努力である。また國語教育の客體の場合に於ける責任に代ふるに興味・慾求を、被教育者にその生活的事實として喚起せしめることであり、かくして主體的自覺に於ける日本語教育の必要と必然を客體自體が眞率に把捉し、認識するに至らしめることである。國語習得の責任を高唱することによつて、とにかく、國内に於ける被教育者の學習熱意は、叩き出すことが可能である。すくなくとも可能には近い。しかるに異民族の被教育者に於いては、日本語學習の興味・慾求を呼び出だし、その必要と必然とを自らの要求として明確

に意識させることが基礎的條件であり、しかもこれなくして教育活動は、實質的には推進せられることがないのである。

さうして、こゝにこそ國内の國語教育者の勞苦を遙かに絶した、異民族に對する日本語教育者の勞苦がある。もしくは、勞苦のうち根柢的なるものがある。

もとより、異民族の學習者に對し、學習意慾を促進し、學習興味を伸張するには、いはゞ日本語教育の外部からする刺戟・方策も必要であり、且時としてはそれが不可缺でもあらう。社會的・福利的・實利的な勸奬の方途が用意せられ、日本語の習得による日常生活の有利さが現前すれば、異民族の學習意慾が著しく刺戟せられることは、既に大陸の現實に於いて屢々目睹するところである。

しかしながら、日本語教育活動の本格的な、第一義的な場面に於いては、文化工作の目標・本質に照らし、あくまでも日本人の魂と異民族の魂との直接的な結びつきを意圖しなければならず、實利に媒介せられ功利に刺戟せられた學習意慾

以上の、本質的な內面的意志に衝迫せられた學習熱意が叩き出されなければならない。さうして、かやうな全人間的な慾求として學習の必要と必然、從つて學習熱意を成立せしめるには、日本語教育活動それ自身によつてこそ、眞にそれが可能であらう。更にいへば、日本語教育活動の實踐主體の人間的迫力、倫理的人格の影響としてそれが成立することこそ、最も有力な、最も根本的な方法である。

かくして、日本語の構造を把握し、教授技術の素養を身につけることの必要、方法的整備の必要以上に、日本語教育に於いて肝要なるべきは實踐主體に於ける倫理性の具有であることが明きらかとなる。

人間を、人間の魂を握るは人間であり人間の頭である。指導者とは、その名の如く正しく方向を指し、その方向へ導く勞苦を厭はざる人間である。しからば、指導者はその責任に於いて、誰よりも自己を深く內省すると共に、行爲の具體性・日常性に於いて、おのづから常に他を導いてゐる者でなければならない。日本語

教育は、大陸の諸所に默々として人間的影響を與へつゝある純粹無雜な、すぐれた幾人かの教育者の活動に見出される倫理性を、絕對に存立の要件とするのである。

異民族に對する日本語普及・日本語教育の事業は、斷じて洋車ひきの日本語、ホテルボーイの日本語の氾濫を以て能事終れりとするごとき、低調なる功利主義に陷入つてはならない。かくて、この事業が、その本來の意義を眞に實現するためには、實踐原理として倫理性が第一に定立してゐなければならないのである。

十七・五

思想戰と日本語教育

一

米英撃攘は、決してなま易しいことではない。大東亞戰爭は、まことに總力戰である。ひとり軍人と兵器が闘ふのみで、大東亞戰爭を勝ちぬくことはない。日本の國力一切が、米英と闘ひ、米英を押しきるのでなければならない。

總力戰體制の必須たることを自覺し、總力戰體制の强化に努力する營みから、思想戰に對する考慮と情熱とが一般化せられて來た。日本の思想は、皇軍の直接的な打摧力と共に、米英撃攘の戰ひに參入しなければならない。かやうな明快な意識と決意とが、一部の思想家のみならず一般の間に痛感せられ、活潑に論議せ

られるに至つた。これは、もとより理の正に然るべきところであり、戰爭遂行上よろこぶべきことでもあらう。

大東亞戰爭の思想的意義がより一層明確にせられようとし、米英思想に對する皇道精神の高邁が更に論證せられようとし、思想戰の對內的・對外的戰略が精緻に考案せられようとし、總じて思想戰の總力戰に於いて占むる意義が一層的確に解明せられつゝある。これは、もとよりよろこぶべき努力であらう。

私達の生活の一切は、大東亞戰爭と共に在り、大東亞戰爭のために在る以上、さうして私達の生活が自主的な生活態度の上に立つてゐる以上、思想戰に關する營みや反省の肝要であることは、既にいふまでもないことなのである。

まことに、思想戰的視野に於ける問題は、多岐に亙るべきであり、詳細な探究と、緻密な施策が必要でもあらう。さうして、私達の凡ゆる實踐が、思想戰との關聯に於いて計畫せられ、考案せらるべきはまたいふまでもないことである。そ

れ故にこゝでは思想戰の本質について考へ、思想戰と日本語教育との關聯について注目すべき點に少し觸れてみたいと思ふ。

二

いつたい、思想戰に於いて勝利を得るといふことは、どういふことであらうか。思想戰は、思想に對し思想を以てする戰爭であり、思想に對する思想の勝利が思想戰に於ける勝利であるといふことは、抽象的な把握としては一應筋の通つた解明である。しかし、かやうな把握の仕方そのものに思想戰の本義の喪はれる機因の潜むことを思はざるを得ない。もとより思想戰の勝利は、刄に衂ることなき思想に對する勝利でもあり得るであらうが、思想戰は、本質的に何ら武力戰そのものと別個のものではない筈である。

思想戰と武力戰とは、武力戰の足らざる點を思想を以て解決するといふやうな

關係に在るものではない。思想戰は卽ち武力戰でもあり、武力戰は卽ち思想戰でもあることを、はつきり認識すべきである。總力戰體制といへども、鐵火のさ中に白刄をかざして敵を擊たんとする苛烈な武力戰と並立して、それとは別個に、獨自な思想戰の領域が意識せられるといふのであつては、未だ思想戰の本質的把握から遠いといはざるを得ないのである。

思想は、私達を分裂と頽廢とから、人間に於ける生理と動物とへの顚落から支へ、常時、私達の生活を統一と創造へ推進し、皇神たちのみまへに近づけしめる。思想は、一切の運命の衝迫に當つて私達の生活をその主たらしめる。私達の中に生活主體を自覺的に確立せしめ、造次顚沛、私達の生活主體を凡べての愚昧と低劣とから救ひ、高邁と淸明に向はしめる意識の命令、これが思想である。從つて、思想の發現、思想の威力は、常に行爲・行動と共に在る。行爲・行動として在る。思想とは、常に私達の生活に於いて、その具體的な統一原理として働きつゝある

ものであり、私達の生活を支へ、進ましめるものであり、とまれ私達の生活全體をかく在らしめつゝある具體的なものであり、それ以外の何ものでもない。從つて、思想戰の勝利は、私達の生活そのものの姿として顯現してゐる筈なのである。

かやうにして、思想戰の勝利は、忠勇義烈なる皇軍將兵の奮鬪、かのアッツ島の將兵の行動のごときに於いて、最も調べ高くたけ高く顯現してゐることに心せられる。アッツ島に玉碎せられた勇士の精神を、心理を、そして何よりもその行動を心せちに忍ばう。いかに强靱な、いかに崇高な思想がそこに躍動してゐることであらう。そこにこそ、思想の切實なる戰ひを、思想の甚深な威力を明きらかに私達は觀るのである。

思想戰に於ける本質的な問題は、思想の論理的な整理や、體系の整然や、合理的な說破的な機能の育成に在らずして、勇敢・淸明・高邁なる日本的行動を隨時隨所に現出するごとき、純一なる意識自覺を確立するに在ることを、私達ははつ

きりと考へなければならない。言を簡にしていへば、前線に於いて玉碎する皇軍將兵の心、思ひ、志を、銃後の日常性に於いて具體化する營みこそ、思想戰の要諦なのである。

　武力戰としてのみならず、思想戰としても、前線に於ける皇軍將兵の中に、思想の眞義は最も著明に現はれ活きてゐる。思想戰に於ける勝利の典型も、論理や思辨を絕した皇軍將兵の勇戰奮鬪の中に見出されるのである。戰爭の形而上的根據を問ふ必要をも感ぜず、思辨的態度から既に遠く離れた無雜な純粹な生き方にこそ、思想戰の方向と主題とがあるであらう。

　とまれ、思想戰の營みと反省とに於いて、戒心すべきは、思想の獨立性を安易に肯定する態度に根ざす抽象主義、類型主義である。いはゆる戰時思想の抽象的な體系化、戰爭現實・戰爭理想の單に思辨的なる解釋、さうしてこれらの餘りに思想的な哲學的な産物を傳達し普遍化するといふことである。近代ヨーロッパ精

神の合理主義的限界を、正に日本人としての生活的現實にかけて打摧する苦鬪を忘れた、觀念的なる思想の把握であり、傳達である。近代の徹底的なる超克なくして、大東亞戰爭は完遂し得ないのであるし、また大東亞戰爭そのものが近代精神の克服をその究竟目標とし、生ける現實としての新しき生活秩序を確立しようとする戰ひなのである。

　思想は、私達をしてこの激烈苛棘な歷史の瞬間に於いて、世界史的斷層を見事に飛躍せしめる動力、生活の根柢的な動力として捉へられてゐなければならない。思想は、生活を根柢的に、全體的に革新する動力として植ゑつけられなければならない。

　總力戰體制に於いて思想の威力が認められ、武力と共に思想が動員されなければならないことは、もとより當然である。しかしながら、思想が動員せられるといふことは、思想がそれ自身の體系を整備して武力戰と並列した位置を占めると

いふことに、その本義があるべきではないのである。もとよりそのやうな位置に於いて思想の效用　機能が發揮せられ、特に敵國及び國外に對して戰略的に優位な思想戰が行はれる場合もあらうし、その必要もあるであらう。しかし、總力戰體制に於ける思想の意義は、武力戰・經濟戰・宣傳戰等々と並んで戰略的に行使せられる場合より以上に、むしろ總力戰體制そのものの鞏固なる地盤を形成すること、武力戰も經濟戰も宣傳戰も將又いはゆる思想謀略戰も、それらすべての戰ひをそれぞれについて有效適切に、それらの綜合卽ち總力戰としての實施に於いて絕對優位に在らしめるやうに、總力戰體制の根柢を鞏固にすること、そこにこそ思想戰の本義がある。

　總力戰體制といへど、それは單に安易なる機械的計數主義から計畫せられた、各職域に於ける事業能率の最大量の總和の上に畫かるべき設計ではなく、かやうな算術的總和の累積によつて總力戰が有效に進行するといふものではないであ

らう。さうした唯物的・合理主義的計量からは、戰爭遂行に當つて人間乃至は人間精神の偉力と可能性が度外視せられてゐるのである。總力戰を鬪ふに當つては、各部門の最高能率の總和といふことを、かやうに算術的目安によつて理解すべきではない。自らの人間が、精神が問題にされなければならない。總力戰に於ける戰力の整備・增强・總和とは、まことに物を制し無を有にし現實を理想にする精神力の發揮を前提とするのである。精神力は無限である。精神の偉大が現實を御するとき、可能性は無限である。かやうな精神の健在と優位とによる各戰力の增强・綜合こそ、總力戰體制の本義であらう。すくなくとも、總力戰の必須なることを痛感し、主體的にその方案を考へるものは、自づと總力戰體制の重點がこれに參ずる各個の「心」の問題に存することを意識するのである。

　かやうに考へるとき、思想動員の本義が、總力戰體制に於ける基底的な條件を充實するにあるといふことを一層明きらかに知るであらう。思想戰の本質的な問

題が、總力戰遂行に關する最も鞏固な地盤の形成に存することが明らかとなるであらう。

言を簡にし、要約の抽象化を怖れずにいへば、思想戰の本義は、國民思想の統一であり、精神力の昂揚にある。しかも、絕對に觀念的標語の注入ではなく、自らの現實生活を支配する動力としての思想の統一である。さうして、現實と遊離した空疎なる精神、道學者先生流のいはゆる精神に非ずして、現實と取り組み現實を常に料理しゆく、いはゞ肉體的精神の昂揚である。

かくして、思想戰は、總力戰體制に於いて基底的意義を持つと共に、現代日本人としての絕對の生き方を、あくまでも具體的に、全面的に、根柢的に、私達の生活に植ゑつけることを、その本質としなければならない。思想戰は、精神の統一と强化とを中心とする故に、私達の生活に於ける倫理的主體に深く切り込むであらう。切り込みつゝ倫理的主體そのものを一層清淨に高め、生活のより高き統

一に資するであらう。しかしながら、いはゆる理性・知性の躍動のみと交合することは、むしろこれを避けるであらう。理性・知性の躍動は、むしろ刻々にこれを擊ち、放下せしめ、現代日本人としての生活の具體性のうちにこれらを切り替へ統一してゆくであらう。

三

以上は私達現代日本人自らの問題として、思想戰の本質的意義をふりかへつてみたのであつた。

さて私達は、大東亞共榮圈の建設過程に於ける異民族に對する思想戰施策の必要に直面してゐる。大東亞戰爭を勝ちぬくことは、大東亞共榮圈の建設卽ち東亞諸民族の生活領域に於ける新しき秩序の確立を直接の目的としてゐるし、また大東亞共榮圈建設の理想を刻々に實現してゆくことが、遂に大東亞戰爭に勝利を優

ち得る刻々の過程でもあるといへる。さうして米英に對する戰爭と大東亞共榮圈建設の營みとは、かやうに相互に他を豫想する關聯に在るが、その何れの側面から考へてみても、その根柢に、思想の統一、世界觀の統一が必須であることを思はざるを得ない。

東亞の諸民族がその生活の根柢に於いて、米英擊攘・近代文明精神の超克・世界新秩序建設といふ目的觀と求道的精神によつて統一せられざるかぎり、世界史を拓開する大東亞の現實は生まれ得ない。さうして、かやうな思想統一を東亞諸民族の間に實現するやうに、日本の指導が徹底しないならば、いはゆる大東亞共榮圈の占有する空間は、たゞ地球上の地理的單位たるにとゞまり、世界史の新しき頁を現成する歷史的單位たることはできないであらう。

いはゆる大東亞共榮圈の建設は、日本を中核とする政治的團結、また軍事的團結の成立を豫想するけれども、かやうな團結の根柢に世界史の拓開を願ふ大東亞

民族としての生活意識の統一が確立しなければならないことは、疑ひを容れざるところである。

さうして、大東亞の現實に於いて、諸民族の間にこの深き世界史的意義が既に充分に把握されてゐるとは決していへないであらう。大東亞諸民族のうちには、未だに精神の覺醒に至らず、まして今日に於ける大東亞民族としての歷史的使命にはつきり目ざめるに至らない事實も屢々認められる。大東亞諸民族に對する皇道精神の世界的內容が、充分に把握されてゐるとは、必ずしも認められない現實がある。或は、すくなくも大東亞の米英化の現實から脫却しようとする意識が充分であるとはいひ得ない現實もある。こゝに大東亞各民族に對する思想戰を、强力に遂行しなければならない理由があるのである。

さうして、旣に諸民族に對する思想戰はさまざまの施策に於いて進められてゐる。中央に於ける官民各機關の對外文敎事業、各地域の出先當局の文敎行政によ

り、また日本ジャーナリズムの進出により、大東亞戰爭の意義と大東亞民族の歴史的使命とは、闡明せられ提示せられつゝある。各地域の異民族社會の指導者は、また大東亞戰爭の理想を體得し、そこに政治の原理、民族運動の原理を發見し、それぞれ喪はれたるアジアの復興へ、さし當りアジアに於ける米英的アジアの克服に努力しつゝある。私達は、新聞・雜誌・その他の出版物に於ける報道や紹介によつて、大東亞共榮圈建設の理想の廣く移植せられ、活潑に實現せられつゝある事實に日々接してゐるのである。

しからば、大東亞諸民族に對する思想戰は、既に本質的な問題に於いて充分に成功してゐるのであらうか。私達は、今後にこそむしろ思想戰の本質的な營みがかかつてゐることを思はざるを得ない。

アジア復興も、アジアに於ける米英的アジアの克服も、それは抽象的な標語の鵜呑みによつては現實たり得ない。觀念的に、この光輝ある理想を理解すること

は、或は容易であらう。しかしながら、殊に南方諸地域に於けるがごとく、長く米英的世界制覇の體制下に於ける典型的な被支配的秩序にあつた歴史的現實を、一擧にしてアジアの光榮ある狀態に致すといふためには、容易ならざる生活意識の革新が必要であらう。しかも、凡ゆる現實と取り組み、現實を押しまくり、過去を現在に組み替へてゆく强靱な生活意識が植ゑつけられ、再生アジア諸民族が世界史の拓開に現實に寄與するごとき實力を持つに至らなければならない。さうして、アジア復興の過程に於いて、現在及びかなりに長期に亙つてアジア諸民族に課せられる問題は、日本民族に於けると等しく、假借なき戰爭行爲の現實である。慘烈嚴肅な戰爭遂行の現實である。

アジア復興は、明きらかに大東亞民族としての偉大な營みであらう。しかしながら、それは決して單に甘美なる祝祭ではないのである。さうして、こゝにこそ大東亞諸地域に對する今日及び明日にわたる思想戰の重要問題がある。

思想戰の題目をたゞ標語として理解し、觀念的なる理解の上に行はるゝ日本への協力であつては、未だ思想戰の本義は達し得られない。またアジア復興の理想をたゞ夢想として抱かしめるのでは足りない。端的にいへば、むしろ戰爭遂行の强靱な意識を主體的に把握せしめることが、思想戰の本義であらう。

大東亞諸地域は、戰爭の遂行により、米英必死の反擊により、日に日に酷烈なる現實に至るかも知れない。舊世界秩序の破壞が大東亞諸地域を重要なる地域條件として强行せられる以上、日本に課せられると同樣に、大東亞各地域に、艱難の加重せらるべきは、むしろ當然の成行である。いはゆる物資は乏しくなるであらう。悅樂の代りに勤勉を、個の平安の代りに集團の勞苦を必要とするに至るであらう。日本による指導は、現實に於いてむしろ忍苦・努力・眞摯を課し、物質的條件の如何から完全に解放せられた生活主體を確立すべきを課するに至るであらう。日本と共に進むことは、決して怠惰と利己主義とお祭り氣分とを以て步み

得る道ではないのである。日本は大東亞共榮圈建設に當つて自ら最大の責任をとり、艱苦を處理する第一線をゆきつゝある。さうして、日本の大東亞の同胞に求むることは、眞に主體的なる自覺に於いて日本と共に步む努力の生活であり、自ら運命を切り拓く勤勞の生活である。

かやうに考へると、大東亞諸地域に對する思想戰の本質的な問題は、國內の場合とひとしく、人間に於ける精神の偉大、物を制し時を制し現實を支配する精神の偉大を、生活意識の中樞に於いて深く體得せしめることに在ると認めなければならない。さうして、精神の優位を確信するかやうな生活主體の確立は、いふまでもなく、觀念的な思想、抽象的な精神の理解とは全く異るものである。生活の活ける事實として、生活主體の把握する精神・思想は顯現する筈のものである。

かくして思想戰の本質は、抽象的なる大東亞共榮圈思想の傳達移植に在るのではない。むしろ、大東亞戰爭の遂行に於いて嚴肅なる近代の克服と皇道精神の體現

に努力しつゝある日本の、この眞摯なる生活意識を具體的に把握せしめることこそ、思想戰の本義であると考へられる。

さうして、私達は異民族に對する日本語教育の本質も、この思想戰の本義に相卽して認められるであらう。

一切を凌ぎ、皇道の無限に豐かなる可能性に立脚して、近代的生活秩序の分裂と矛盾と凡庸とを終結せしめ、新しき生活秩序を現成しようとする日本的生活意識の內實は、いふまでもなく日本語の中に、日本語として在り得るのである。日本語そのものとして具體的に在るのである。日本的生活意識の實體は、日本語そのものによつて、具體的に捉へられなければならない。日本語を話し、讀み、書く生活は、それが眞摯に行はるゝかぎり、次第に日本語としての言動活動に於ける言動主體を確立する體驗に高まり、かくして日本的生活意識の體驗に至る道である。日本語生活の體驗は、またかやうにして、日本語そのものとして顯現して

ゐる日本的生活主體の具體的なる把握に至るであらう。さうしてこゝに、思想戰の重要なる部分の確實に實現せられる道がある。

しかるに、大東亞諸地域に對する思想戰は、日本語教育によることを以て迂遠とする考へもあらう。もとより、大東亞共榮圈建設の理想を理解せしめ、大東亞諸民族の歷史的使命を知得せしめるためには、それぞれの民族語を以てその思想を說く方法もあるであらう。單純な便宜の立場よりすれば、東亞に弘通する敵性語を以てすることさへも便宜な方法である。

しかしながら前述のやうに、理想も使命も、たゞ標語的に、觀念的に注入するに止まるかぎり、それは特に今日及び明日に於ける思想戰の本義を達成する方法ではない。生きた日本的生活事實としての思想を、深く切實に移植するところに問題の中心がある以上、日本語そのものとして捉へしめることを本義としなければならないのである。

もとより、日本語教育は、思想戰略的意識を直接なる規定として進めらるべきものではない。また日本語教育の實踐に於いて、言語哲學的意識を混在せしめることも、無益な衒學沙汰である。さうしてまた、日本語教育の各段階を無視し、道學者的意識を以て日本精神の抽象的なる注入を焦慮することも誤りであらう。異民族の生活をして、皇道精神の具體的體得の上に確立せしめるためには、いかなる面に於いても抽象主義を警戒しなければならないのである。

しかしながら、日本語教育は、皇道精神の生ける實現たる言語の教育である故に、明らかに思想戰の本質を遂行すべき立場にある。大東亞戰爭は日に日に熾烈化しつゝある。一切に克つ大東亞人たるの心性を形成するために、皇道精神を具體的に體得せしめるために、日本語教育は寄與すべき責任にある。

近代の凡庸主義、平和主義から生活意識を解放し、高邁 峻嚴な精神主義、創造主義の基調に、大東亞諸民族を立たしめること、この責任を離れて、日本語教

育も、思想戰も考へられないのである。さうして、その解放と確立とを切實なる生活の事實として現成することは、日本語教育の刻々の進展によつて可能である。かくして日本語教育は、思想戰に於ける基底的な營みであると考へなければならない。

十八・七

文化工作と日本語普及

一

異民族に對する文化工作の重要さが盛に說かれてゐる。說かれてゐるばかりでなく、現在活潑に行はれつゝある。

大東亞戰爭の理想は高く、規模は大きい。大規模にして徹底的な破壞と、大規模にして雄大な建設。大東亞戰爭の目的に於て、日本のいとなむべき問題の大きさを思へば、まことに一切の領域・形態に於ける國家活動が異民族に關する建設事業に參入し、活潑に進まねばならないのである。伏はぬ者を新じて討つ武力のほかに、また政治工作・經濟工作のほかに、文化工作の必要が意識せられ、その

方法が研究企畫せられ、活潑に實踐せられつゝあるのは當然である。
しかも、大東亞戰下に於ける建設面の大きさ、複雜さによつてのみ、文化工作の意義が認めらるべきではない。一體、大東亞戰爭そのものゝ本質が、文化戰爭なのであり、日本精神卽ち日本的生活秩序と日本的文化感覺を異域に滲透することによつて、人間生活一般の建て直しを究竟の目的とする以上、武力による戰爭に文化工作が緊密に共働せねばならぬことは必須の要件である。のみならず、かやうな時務論的見地からのみ文化工作の重要さが意識せらるべきではなく、日本に於ける本來の戰爭理念から、當然文化工作の必要がはつきりと意識せられるのである。何故ならば日本に於けるたたかひは、常に生命を「生む」ために在り、生命なきものを「滅す」ために在る。さうして、本來文化とは、新しき生命の創造を企てるいとなみであり、新しき生命の躍動を感得せしめる生活的契機となるものを實現することをその活動の本質とするし、しかもそのほかの何ものでもな

い。生命の桎梏となる一切を破摧し、生命の高貴を守護し、生命を純化し創造するための斷乎たる行動、休む時なきいとなみ、これが日本に於ける戰爭乃至は文化の根本理念である。武士道の示すところに觀られる日本人の戰鬪行爲に於ける高邁な倫理性の傳統も、この根本理念に源由してゐるのであり、また戰爭道德のうちにいはゞ藝術性ともいふべき美的性格が豐かに躍動してゐるのも、この戰爭卽ち文化活動たるの本質に由來するものといへるのである。古くより生活の實踐的な眼目として、文武兼備が要求せられて來た理由もこゝに在るのである。從つて日本が武力戰爭と共に、文化工作を推進することは、時務論的要求に基いて然るのみならず、ましてやいはゆる國際情勢に規定せられて然るがごときものではない。文化工作の必要は、正に日本本來の戰爭理念に根ざすところであり、日本の對外活動に於ける根本的必要である。さて文化工作の領域に於ていとなまるべき主題は數多い。凡ゆる對象と段階とを包含する教育　學術建設の一般、凡ゆる形

態に於ける藝術の移植と育成、及び宗教工作などはもとよりのことである。また厚生事業に關する一切も、文化工作の一部門として現に行はれてゐるし、また行はるべきであらう。すくなくとも文化工作と緊密に關聯して行はるべきである。そして異民族に對して日本の意志・實質を的確に迅速に理解せしめ、日本の企圖に協力せしめるためのさま〴〵の宣傳工作も、本來文化工作の一環たるべきものである。

かやうに文化工作は數多き主題とさま〴〵の活動面を持つてゐる。しかもその對象たる異民族は、いふまでもなく實にさま〴〵の地域に亙り、さま〴〵の階層を藏してゐる。

文化工作が、廣汎なる働きかけ、適切なるいとなみを期するためには、まことにその方法は多樣多層に亙らねばならない。さうして、文化工作に於て、方法の適切を期するためには、實に周到なる用意と容易ならざる努力を要するのである。

すくなくとも對象たる異民族の生活習性・文化樣式の實際とその歴史についての精密なる理解がなければならず、現地の實情に卽應する現實的な企畫が確立してをらねばならない。また大東亞戰下に於ける文化工作の當面の問題として、異民族社會に移植せられてゐる米英的文化感覺・生活態勢を淸掃するための强力な方法が現實的に考究せられ、實踐せられねばならない。さうして、このことたる觀念的談議としてはともかくとして、具體的には必ずしも容易ならざる事業であり、いはゆる文化工作の領域に於て實現せられるのみでは解決し得ないほどの問題であらう。ともれ、文化工作に於てその效果を決するものは、具體的には異民族に對する働きかけの方法如何であるといへるのである。

けれども、文化工作に於ける方法的考慮に腐心することと自體に、實は最も警戒すべき點が潜んでゐる。方法の適切を得なければ、もちろん文化工作のいとなみは空の空なる觀念的な自己滿足に終り易いであらう。しかしながら、方法はあく

まで方法であり、文化工作の存立する根柢とその存立の大目的を規制するものではない。また對象たる異民族社會の狀況如何は、方法を規制する部面を持つが、決して文化工作の本質を規制するものではないのである。日本精神即ち日本的生活秩序・日本的文化感覺の移植滲透によつて、異民族社會に新しき人間生活の秩序と文化感覺を育成しようとする、大東亞戰爭いな日本本來の戰爭の本質と目的が、凡ゆる方法に於ける文化工作の實踐をいとなみ貫いてゐなければならないのである。いかに精緻なる方法が案出せられ、いかに異民族に適切な實踐が行はれるにせよ、この本質と目的とを遊離しては、文化工作の意義もなく價値も生じ得ないのである。

　文化工作は、武力による戰爭と同じく、一種の戰鬪である。それは對象を無條件に肯定し、對象の如何に關して纖細な考慮をめぐらすことによつてのみ存立するものではない。異民族の文化感覺・生活精神を無條件に肯定し、彼等の愛好す

る精神的・心理的傾向にのみひたすら焦點を合はさうとするがごとき商業主義的態度からは、世界文化史に新しき一頁を開かうとする高邁な日本的文化工作は成立し得ないのである。日本自ら日本人の各個自らが、血潮のみそぎによつて本來の文化感覺の蘇生に努めつゝある現在であるが、異民族に對する文化工作も、健全にして高貴なる生活意慾、高邁にして生命力あふるる文化感覺を叩き出し、引上げることに主點を置かねばならない。もし低調な、淺薄な文化財を愛好する傾向が支配的である場合には、さうした傾向を壓倒することこそかへつてより文化的な仕事としての實質を持つのである。具體的な例でいへば、おそらくアメリカ的ジャズ文化の意識が大東亞共榮圈内に於て、かなりに民心を促へてゐるのが事實である。均齊と統一とを全く缺如し、人間の生命を、奇形的な、頽廢的な、動物的な方向に奔騰せしめるジャズ文化の感覺が、商業主義の推進によつて、大東亞に存在してゐるのが事實である。また、異民族のうちには原始性からの距離遠

からざる生活習性を持續してゐるが故に、たやすくジャズ的な文化感覺に捉へられ易き現在に在るものも事實存するであらう。かやうな場合、日本のいとなむ文化工作が、一體何を爲すべきかは明瞭である。文化工作に於ける方法の適切を意圖して、眞の意味に於ける異民族社會の文化向上に背反するがごとき傾向に至るならば、全く日本の文化工作は自己矛盾に陷るものといはざるを得ない。

もちろん、末梢的な現象に拘泥する形式主義は論議の外である。洋服を着、洋食を食べ、洋書を讀むことが非日本的であるとするごとき傾向は、全く論議の外である。また、いはゆる日本的な文化財であるならば、すべて無條件に持ち出し異民族に提示するといふごとき、安易な事務的意識も亦論議の外である。文化工作は、たゞ文化財の搬出を意味するものではない。また、日本の文化財すべてが、日本に於ける文化感覺・生活秩序を代表するものではない。更にひとつの文化財として結晶したものゝみによつて、日本精神の何たるかがすべて捉へられる筈は

ないのである。日本精神・日本的生命力を具體的に、深切に捉へらるゝごとき統一と整序によつて、日本文化が與へられねばならないからである。しかしながら、要するに日本の文化工作は、アメリカ的乃至はヨーロッパ的精神の基調を清掃し、新しく生命あふるる日本的な生活精神の基調を異民族の間に植ゑつけ、彼等の間に新しき生活・新文化胎生の地盤を形成することを中心としなければならない。

國内に對する文化政策に關して目的論乃至は本質論が活潑に行はれて、日本に於ける文化の正しき在り方、性格がはつきりと規定せられようとしてゐる。それにもかゝはらず、しばしば異域に對する文化政策について、方法と目的とを混淆し易き傾向或は目的論・本質論の堀り下げ方が足りぬうらみはないであらうか。文化については國内に於ける場合よりもむしろ國外に對する場合、一層の用意と探究とを要するのである。

とまれ、私達は先づ、日本に於ける本來の戰爭理念にしつかりと立ち、大東亞

戰爭下の現實が要求するところをふまへて、異民族に於ける文化感覺の改新のために、文化工作を推進しなければならない。

二

日本の文化工作のうち、最も迅速に、徹底的に行はれねばならぬ主題として、日本語の普及がある。

日本語普及の必要については屢說の要がないであらう。

この問題についても、重要なことは、先づこの事業の目的乃至本質と方法とをはつきりと區別して意識することである。

日本語普及の目的は、要するに異民族に對して日本精神を具體的に把握理解せしめることと、各異民族に日本語を把握せしめることによつて、日本と各異民族及び各異民族相互の間に言語紐帶を形成する事に歸着する。即ち日本精神の傳達、

滲透のための日本語普及であり、東亞共通語を確立するための日本語普及である。さうして日本語普及事業は、その關聯するところ殆んど對外國家活動の全部に亙るのであるが、畢竟、異民族に對する言語敎育たるところに本質がある。日本語普及は、これを意識的にとりあげる以上、敎育事業たる性格を本質としなければならないのである。

日本語普及の目的については、いふまでもなくより實利的な部面、即ち異域に於て各般の建設を進行する際に、現住民の日本語習得によつて事業能率を上げ得ることを期するごとき部面も存するが、後述するごとくこれは絕對的な問題ではない。つきつめて言へば、日本語普及の必要なり目的なりは、結局上述の點につきるのである。

さて、日本語を異民族の間に移植することは、決して容易なことではない。もちろん、國威の及ぶところ、日本國民の至るところ日本語は自づと廣く普及しつ

ゝあるが、如上の目的に卽して日本語普及を推進するとすれば、それは決して容易な事業ではないのである。

算術的な大體論でいへば、日淸戰爭後、日本語を母語とせざる臺灣の本島同胞に對して日本語普及の事業が着手せられた時には、日本人十二名に對して本島同胞一名の割合であつた。然るに大東亞戰下の今日、大東亞共榮圈の異民族と日本人との割合は、日本人一名に對しほゞ異民族九名半である。かつて十二名の日本人の力によつて一名の日本語を解せざる者を敎育すれば可であつた狀態から、半世紀後の今日、一名の日本人によつて十名近くの異民族を敎育すべき狀態に至つたのである。しかも、臺灣に於ては今日も尙、日本語普及のためには學校敎育面に於ても社會敎育面に於ても實に營々たる努力が拂はれてゐるのである。中華民國、滿洲國に於ける日本語普及事業の關係者、敎育者が、今日非常なる苦心を拂ひつゝあることはいふまでもない。關東洲、朝鮮等に於てすら、誠實なる關係者

は、日本語普及の現況に對し、一層努力の必要を痛感してゐるのである。日本語普及の容易ならざることは、次第にこの事業に關する國家的な體制がとゝのひ來つた今日と雖も、決して變らぬであらう。全世界に於ける殆んど凡ゆる言語系統が共在し、また多くの歐米語が存在してゐる大東亞共榮圈に、日本語を廣く深く强く移植することはまことに容易ならぬ事業である。

さうして、容易でないところに、さまざまの企圖が必要とされ、事業の强化・統一がはかられる。研究・調査が行はれる。それらは何れも、日本語普及の困難を克服し、日本語敎育の效率を促進するための方法について、各般の努力が拂はれつゝあることに外ならない。

まことに、異民族に對する日本語の敎育・普及については、多角的な方途を講じなければならない。方法に關する精細な研究を進めなければならない。日本語普及は言語敎育たるの本質に於いて、もとより日本國民に對する國語敎育と一如

の關聯に立つものではあるが、方法的には遙に多角的な考慮工夫が必要なのである。

しかしながら、先に文化工作一般について述べたごとく、日本語普及に於ても、方法の綿密、適正を圖る努力が目的・本質を逆に規制するがごとき自己撞着に陥つてはならないのである。その甚しい事例は、日本語普及の困難なる理由を日本語そのものの性格・構造に歸し、日本語普及の效率をあげるために日本語そのものの變革、日本語の傳統性と自然性を歪曲してまで簡易化し、單純化しよとするがごとき主張である。口を開けば日本語の複雜をいひ、難解をいひ、普及方策上日本語の特殊なる單純化を必要とするといふごとき態度である。

一體日本語普及上の困難は何處に在るのか。いふまでもなく、異民族各個にとつて日本語が外國語乃至は母語ならざる言語たるの事實によるのである。外國人たる以上、また日本語を母語としてゐない以上何人にとつても、習得上困難の伴

ふことは當然のことである。もちろん、言語によつて多少の困難度の相違は在り得るであらう。しかしながら、日本語のみが異域に普及するに當つて、本來の言語性格を變革することを絶對の必要とするがごとき理由は、決して見出し得る筈がない。私達の敵たるイギリスの國語すら、習得上甚だ困難を伴ふにもかゝはらず、その性格・構造を變形して海外に普及するがごとき狀況をとつてはゐないのである。日本語に關する安易なる敗北主義の言説はとにかくとして、大陸の現實に於て、教育者の熱意と努力と技術とにより、異民族學生にとつて日本語はさして困難なる言語でないことの實證が屢々擧げられつゝある。

要するに、異民族に對する日本語普及の方法は、各般に亙つて研究され、確立されねばならないが、また日本語普及の目的によつて、一切のいとなみが貫かれてゐなければならないのである。今日に於ては既に研究・調査の進歩度よりも、考慮すべく憂ふべきは、日本語普及に關する目的觀・本質論の動搖であるといへる

のである。また更に、日本語普及に關する目的論と方法論とに跨つて警戒せねばならない考へ方がある。日本語普及の目的を、實利的なる範圍に限り、日本人との單純なる交渉上の用務に支障なき程度の日本語を現住民に把握せしめることを以て、日本語教育の具體的な目標とする態度である。そこに、ひたすら單純な、日本語としての特質も品位も缺如した海外向日本語こそ必要であり、日本語としての純正さを唱へることの迂愚なる所以が提唱せられて來る。かやうな考へ方に對しては、先づ第一に何が故に純粹にして美しき日本語が、直ちに複雜であり困難であるとせられるのか、その理由の薄弱さを指摘せねばならない。更にまた、異民族に於ける日本語普及は必ずしも日本人に於ける異民族語習得の必要を輕減するものでない事を指摘しなければならない。

日本語による日本精神の移植・滲透といふ目的を離れて、ただ、日本人が現住民と折衝する場合の區々たる日常の便宜のために日本語を普及するといふことで

あるならば、日本語普及の本來の意義は存立しないであらう。のみならず、日常の片々たる用事を便ずるといつた效用のためならば、異民族に日本語を習得せしめるよりは、私達が現住民の言語を少々記憶して置いて事に當る方がむしろ捷徑であり、日常茶飯の用事はそれで萬事すむのである。さうして、すくなくもその程度の異民族語は、海外進出に當つて必ず習得すべきものである。またその程度の日本語ならば、異民族とても日本人との接觸により、短時間におのづと習得するのであり、普及事業上なんら特殊の考慮を必要としないであらう。

とまれ、日本語の普及は、日本の文化工作の目的・本質を端的に表現するものでなければならない。いふまでもなく、日本語を離れて日本精神なく、日本的生活秩序・日本的文化感覺は日本語そのものとして最も具體的に自己を表現してゐるのである。從つて、日本語の習得とは、それ自身日本精神の理解・體得を意味してゐるのであり、日本語普及は、異民族に對する文化工作の目的・本質を時々

刻々に實現してゐるともいへるのである。

常に根本がしつかりと立つてゐること、そして方法は隨所隨時に講ぜられること、これが何事に於ても肝要である。文化工作の一環としての日本語普及の問題にしても、この明らかな必要を切に思はざるを得ない。

十七・十

宣傳戰と日本語普及

一

對外宣傳の重要さが盛に說かれ、種々の事業が行はれてゐる。伏はぬ者、日本を理解せざる者を武力によつて歸依せしむる直接的な方法と併行して、或はそれに先行して、充分日本の實力を認識し日本の眞意を理解せしめるために、宣傳が活潑にいとなまれねばならぬことが指摘せられる。殊に大東亞戰を完遂せねばならぬ今日、敵として充分の力を持つ米英を粉碎しなければならぬ今日、私達の戰爭遂行方法は多角的でなければならず、宣傳戰略の重要不可缺なことは、いふまでもない。英國のごとき、第一次歐洲大戰の例に徴しても、宣傳戰にかけては決

して侮るべからざる敵國であることは明瞭であり、宣傳戰の必要については、今日特に痛切である。私達は、絶對に勝たねばならぬ。國力發展の凡ゆる形態・方法に於て、常に勝たねばならぬ。宣傳戰の重要を意識するのみでは足りない。宣傳戰に於ても絶對に勝たねばならないのである。

もちろん、宣傳は宣傳のためにあるのではない。宣傳が、武力戰爭と遊離して行はれるのでは意味がない。デマ宣傳の效は、必ずしも大きくはないのである。或はまた、宣傳意慾が直接に見透されるやうな宣傳は下の下なるものである。宣傳が明確な戰爭意志、必勝意志に貫かれてをらねばならず、確乎たる政治的必要を踏まへて行はれねばならぬことはいふまでもないが、宣傳に於て基礎たるべき內容は、畢竟必勝態勢にある國家的現實そのものである。戰時日本の國家的現實そのものである。國內が絶對不敗の體制に整備せられてゐること、國家體制の事實そのもの、これが對外宣傳戰の基礎的條件であらう。

さて、宣傳戰略に於て、これを決定する具體的な要素は、第一に時と對象とであらう。特定の對象に卽し、適切なる時を逸せず、宣傳戰略が講ぜられ、實行されねばならない。その時に應じ、その對象に卽し、宣傳方法は複雜且多角的であり、正に端睨すべからざる形態をとつて實行されねばならない。對外宣傳は常に時を逸せずして行はれる必要のみならず、むしろ能動的に適切な時を把捉して展開されねばならず、又、對象の狀況を明確・詳細に知悉し、對象に眞に深刻な影響を能へ得る適切な方法に於て展開されねばならない。今日對外宣傳の對象についていへば、すくなくとも、

イ、米英及びこれに準ずる敵國乃至敵性國

ロ、敵性を持つおそれの確實に存する中立國乃至民族社會

ハ、完全なる中立國乃至民族社會

ニ、獨伊の盟邦及びこれに準ずる友好諸國

ホ、東亞共榮圈に包括せられると考へらるゝ諸民族等の對象が考へられる。これらの對象の民度・政治的狀況・文化水準等はもちろん多種多樣である。しかも世界情勢は刻々に進展變化する。宣傳方法が複雜且多角的なるべきはいふまでもないのである。

しかしながら、前述したやうに、對外宣傳の基礎的な條件は、必勝不敗の態勢にある國家的現實そのものである。言ひ足りぬこと、說き足りぬことは、宣傳戰に於て最も警戒すべき怠慢であらうが、宣傳戰に於ても、事實が何よりも雄辯であるといふこと、事實こそ物を言ひ得るといふことを考へねばならない。

宣傳戰の拙劣といふことが、私達の反省としてしばしば言はれて來たが、支那事變以來軍官民關係者の非常な努力によつて、急速に宣傳戰體制の整ひつゝあることは、率直に認むべきである。殊に大東亞戰爭以來の日本の宣傳活動については、目ざましい進展が認められるやうである。宣傳戰施策が敵國に對し壓倒的に

優位にあり、或は異民族に對し絕對的な滲透力を持つてゐるか否かは、未だ速斷し得る時機ではないが、日本が宣傳戰に於てひたすら無能であるとはいへぬのである。誇大・虛妄の宣傳を拒否するのは私達日本人の國民性として、殆んど絕對的であり、その意味から宣傳戰の拙劣が云爲せられて來たのであるが、寧ろその故に宣傳の效を認めらるゝ事實も見らるゝに至つた。ラジオ放送については、東京、ベルリン、ロンドンの放送は最大の影響力を持つものとせられてゐるが、東京放送の影響力は最近特に壓倒的といはれる。また、ルーターや、エーピーの外電によつて蹂躙せられたのは既往のこと、同盟の報道は中立國筋にも最も信賴せらるゝ度を增しつゝあるといはれる。更に、何よりもわが「大本營發表」の名に於て發表せられる戰況の報道が、敵アメリカの民衆に、的確な情報として受けとられてゐるがごときは、著しい事實である。日本の宣傳力增大を示す今日の狀態は、もちろん宣傳技術の研究・進步に負ふところが多いのであらうが、要は皇軍

無敵の實力とその赫々たる戰果、及び國內體制の整備促進によつて基礎づけられてゐるのである。事實をして語らしめることを本旨とする、堂々たる日本的宣傳の性格は、かくして確立しゆくであらう。

筆者が今春中支に在つた折、某氏の言に甚だ啓發せられるところがあつた。それは、大東亞戰爭勃發して戰況の報道未だ全般に徹底せざる折、中國人が日本の實力を認識し、日本の勝利を確信せしめるのに最も效果のあつた事實として、日華連絡船の規則的な運行があげられるといふ見解なのである。かゝる大戰爭下に日華連絡船が米英との交戰以前と少しもかはらず、規則的に頻繁に運行せらるゝのを見て、いかなる中國人も今更のごとく日本の實力の强大を確信せざるを得なくなつた。從つて千萬の言說以上に日華連絡船の運行そのものが偉大なる宣傳事業である、といふ意味のことであつた。半信半疑にして一知半解な或種の中國人にとつては、日本としては日常的なこの事實が却つて偉大な宣傳效果をもたらし

たといふわけである。まことに對外宣傳は、宣傳技術のみによつて解決せられるものではない。國家的現實としての力そのものが根柢的な條件であることを思ふべきである。

このやうに考へると、日本の對外宣傳をより以上に强力にしてゆくためには、何よりも基礎的條件の一層の充實を必要とすることが明きらかである。皇軍の武威については、もちろん、絕對に晏如として可であるが、國內の戰爭完遂體制の充實、殊に文化界・言論界の國家目的への一層の結集が望まれるであらう。要するに國民思想の統一が一層徹底することこそ肝要であらう。文化界・言論界の現象として、國民思想の統一が、判然として强靱な現實であることが何より必要である。戰時に於ける對內的要求として、國民思想の統一が要請せられるのみならず、寧ろ對外的な宣傳戰の基礎的要件として、國民思想の統一が不可缺となるのである。

かくして對外宣傳の必要を意識するとき、國民思想の統一が明確な國家的事實として存在することを要件の第一とせざるを得ない。

二

對外宣傳の效果をあげる基礎的條件が、事實そのもの、日本の國家的現實そのものに在ることを右に述べた。從つて、皇軍の戰果と共に、畢竟、國民思想の確乎たる統一によつて物心兩面に於ける戰時體制が整備・充實することこそ、宣傳戰遂行の地盤でなければならぬ。かくして、對外宣傳の效果を期する以上、當然國民思想の徹底的なる統一を意圖して、國内に對する宣傳・啓發のいとなみ、殊に明確な國家目的に貫かれた文化政策が强力に行はれなければならない。對外宣傳の施策は、對内宣傳のいとなみと、經濟輔車の關聯に在るべきは明らかである。今日の日本に於て、外へ向かつての一切の問題は、實は内への問題に還るのであり、内へ還ることによつて根本的な解決點を見出し得る事實が多いのであるが、宣傳戰の場合にも同斷であらう。この點は、大東亞戰下の今日、新聞・雜誌等に現出する言論・文化の諸現象が、國家目的の深切なる理解と表現を示す狀態に至りつゝあるのを見ても、數年前に比し著しく整備せられたといひ得るであらう。しかしながら、國家目的を主體的に把握し、誠實と熱情とを以てこれに歸一することによつて、新しくして强靱な國民思想・國民文化の興隆することこそ、更に望まるべき目標である。對外宣傳の地盤たるべき國民思想・國民文化の狀態は同時に思想戰文化戰を決する直接の條件であり、從つて抽象的なイデオロギーの受働的把握が一般化するのみでは足りないからである。生々發展する皇道無限の内實に參入することによつて、具體的に新文化が一歩一歩建設せられてゆかねばならない。

地盤が成熟し、基礎的條件が整備せられつゝゆけば、この餘は對象と時とに關

する問題である。多岐、多角なる宣傳方法を案出・創造する企畫と、活潑なる宣傳機能を發揮するごとき機構の充實如何の問題であらう。對象たる異國民・異民族大衆の聽覺を通し、視覺に觸れ、感性に訴へ、知性を動かし、興味を與へ、意慾を促がして、多角的なる宣傳が急速に、多量に奔出すれば足るのである。また、直接に生活的現實に迫りゆく場合も、間接に日本理解の心情を誘起するを目的とする場合もあらう。宣傳方法に關する企畫は、正に創意工夫の躍動を必須とするが、その背景に、對象たる異民族の生活と心理に對する切實なる測定と洞察が伴ふてゐるならば、日本人のごとく柔軟なる理性・感性を有する民族にとつて對外宣傳の拙劣なるべき筈はない。

また、宣傳手段について考へれば、ラジオ、映畫等の直接に感覺に訴へる手段を多角的に活用するはもとよりのこと、諸種の出版物の製作とその效果的なる頒布、その他、敎育・學術・文化・宗敎・醫療等に關するいはゆる文化施設の設立・利用、敎育家・學者・藝術家・宗敎家等の文化人乃至は學生の派遣・誘致等のいはゆる文化交換の遂行等さまざまの施策があげられよう。さうして要するに、かやうな諸種の事業をいとなむ諸機關が、企畫についても機能・活動についても、調整統一せられゝ國家としての對外宣傳の全體に於て、有機的なる關聯に立ち、また迅速なる遂行を果し得てをればよいのである。對外宣傳機關の統一は、必ずしも機械的な一元化であることを要せず、むしろ各機關によつて多種多層の機能の發揮せられることが望ましいが、根本企畫が全宣傳機構へ滲透することと宣傳機能の迅速に結集せられること、廣汎な範圍にわたる連絡が可能であるやうに統一せられることの必要はいふまでもない。この點についても、軍官民一體の努力によつて、今日宣傳機能の進展せられつゝあるを見ることができ、あへて日本の宣傳技術の拙劣のみを憂ふる必要はないのであるが、對外宣傳が常に敵手乃至對象を目標とする事業である以上、層一層の努力が拂はれなければならない。

三

さて、當面の敵たる米英乃至重慶に對する宣傳方法・技術は別問題として、大東亞共榮圏建設上の要務たる東亞の諸民族に對する宣傳と日本語普及の問題につきいさゝか考へてみよう。

いふまでもなく、大東亞共榮圏建設のためには、日本の國家的意志・目的を東亞十億の諸民族に普及・徹底し、その强力なる一致團結を實現することを必要とする。大東亞共榮圏が域外の米英的舊秩序の世界に對して、さしあたり完全な戰爭體制を確立してをらねばならぬ點よりするも、これはいふまでもない要件である。しかるに、大東亞の諸民族の狀態は、特に南方に關しては、人種的にも、文化的、宗教的にも周知のごとく極めて複雜多岐である。そして、本來多種多様の諸民族が共存してゐるのみならず、歐米勢力の浸潤・隆替の甚だしかつた事實は、

諸民族をして一致團結せしめるための日本の對外施策が決して容易ならざるべきことを示してゐるのである。宣傳の必要、宣傳方法の多角的であり、多層的であるべき所以は、明らかであらう。日本の國家意志・目的の宣傳は、單に一方的な自己表現であるべきでなく、その實質的なる普及・徹底に眼目がある以上、まことにその方法・技術は多岐にわたらねばならない。その第一段階は日本への敬愛・理解の意識を植ゑつけることであり、一方米英的生活秩序乃至文化感覺から脫却して日本のそれを敬重せしめることであるが、そこには宣傳效果の急速なる增進を意圖すると共に、效をあせらず、抽象的な觀念の强制に陷らざるやう特に留意すべき事情も存するのである。さうして、明確に宣傳方法の領域に於て考へられる施策の外に、いはゆる文化工作として考へられる一切の施策が現實に果たす役割を考慮せねばならぬであらう。

ラジオを通じ、映畫により、目にも耳にも日本の實體をつかませること、また

音樂を聽かせ、紙芝居をみせ、繪本畫報その他の出版物を與へ、更には現住民に對する新聞を發行する等、諸種百般の宣傳手段が現在南方に關して急速に實現せられつゝある。また、學校の開設その他の文化施設の開設も着々として實行に移されつゝある。さうして、直接的間接的の差こそあれ、宣傳工作の各事項と、文化工作の凡ゆる事業は、もちろん、日本の對外宣傳のいとなみとして一如の關聯に在り、有機的な宣傳機能の全面的發揮といふ役割を果すごとく配意せらるべきである。

今日、對外宣傳と、外地に於ける文化工作との間に明白な役割の差異を意識すべきではないといへるであらう。宣傳戰と遊離せる立場に於て文化工作が進展するといふことは現實に在り得ぬであらうし、またいはゆる宣傳が、豐富にして多層的なる內容を必要とする以上、直接的な宣傳意識のみを以て施策することの迂愚は警めねばならず、文化工作の全面的な展開と相互依存の態勢に於て施策せら

れねばならないのである。しからば、いはゆる宣傳事業と文化工作乃至教育工作との性格的差異は何處にあるべきであらうか。

もちろん、對外宣傳と文教工作といふも、その差異は施策に當つての重點に歸すべきである。具體的には重點の所在が異るのみであり、實質的內容の相混ふべきはいふまでもないのである。さうして、その差異の第一は、目標そのものに段階の差があるといふことであらう。ひとしく日本及日本文化を理解せしめるといふも、宣傳といふかぎり、日本の全体的な本質的な理解・把握といふよりは、概括的紹介に中心があり、把握度の深さ・確さよりは、日本への積極的憧憬・興味を誘起する心情をひき出だすことを要務とせねばならない。理解の的確さよりも理解せんとする心情の培養に中心があるべきである。日本及び日本文化について、深さよりも廣さを、體得への能力を目ざすといふよりは興味の湧出をねらふべきであらう。從つて、宣傳の影響力が及んで、始めて文化工作の進捗も容易であり

得るわけではあるが、日本を基軸として考へるとき、日本の本質的な的確な理解といふ點につけては、文教工作の目標に比し、そこに意圖すべき段階の差を認め得べきである。第二に、前述のごとく宣傳については、時間的・對象的狀況の如何が具體的宣傳の形成を決定する直接的素因であるが、文教工作はあくまでも日本及び日本文化の實質が決定條件であることであらう。時に應じ、相手に卽して日本を理解せしめるいはゞ說き方の如何に、宣傳技術の重點がかゝるのに對し、文教工作は日本として絕對的なるものゝ滲透こそ重點であり、本質的な滲透の仕方を期することに重點がある。第三に、宣傳企圖にあつては、對象たる異民族が容易に日本を理解し得るごとく、過程の安易であることを選ぶべきであるのに對し、文教工作にあつては、日本理解の目標こそが專心事であり、日本的なるものの歪曲せられたる傳達を結果せざるごとき配意が肝要であること等であらう。要するに、段階的差異、決定素因の所在の差異、過程と實質とに關する重點の所在の差異ともいへるであらう。ともあれ、一はより傳達の方法に關し、一はより傳達の內容に關するといへるであらう。

大東亞共榮圈に日本語を普及すべき問題に當つても、右の反省が考へあはせられるべきであらう。

日本語を普及することが、日本の國家意志、目的乃至は日本精神・日本文化を理解せしめると共に、東亞諸民族に大東亞の共通語を現實に與へ、かくて東亞民族一致團結の根柢を形成する必要に出づることはいふまでもないことであらう。從つて、日本語普及の事業は、一面に於て有力なる宣傳戰略の一環であると共に、また有力なる文教工作の一部門である。さうして、異民族に對する日本語普及並に敎育の方法については、もちろんそれ自身の範圍內に於てさまざまの問題があるが、その主要なる視點の決め方は、要するにこの事業がより宣傳的側面に於て考へられるか、より文教工作的側面に於て考へられるかによつて左右せられ

ると思はれる。結論を急ぎ私見を述べれば、日本語普及事業の主軸は、斷じてそれが文敎工作たるの本質に存すると思ふ。すくなくとも日本語普及事業を意識的に採りあげ・推進するかぎり、それは最も具體的にして本質的な文敎工作たるの性格を持つと思ふ。

日本語普及事業を大なる對外宣傳事業の一環として考へ得ることも事實であるし、その機能を果たすべき要請を缺くべきでないことも確かである。しかし、その目的と本質は、日本語といふ日本人の生活の直接的表現に卽して日本精神（卽ち日本的生活秩序・日本的文化感覺）を充分に把握せしめることに在るのである。これは、決して抽象的な觀念論ではない。この絶對的な・第一義的な立場を抛棄して、たゞ異民族に於ける日本語學習の難易のごときに着目するがごときは、全く本末顚倒といはざるを得ないのである。國語の進出こそは國威伸張の端的なる表現ではないか。從つて國語の進出を意識的に遂行することは、國語の純美・高

貴なる性格また國語表現そのものとして現成してゐる日本的生活の統一相を、そのまゝに外域に移植しようとする意識的な態度を離れては、全く意味を失ふのである。

もちろん、異民族が日本語を學習し、把握することは決して容易なことではない。そこには當然傳へ方・授け方について、國内の國民に對する場合と相違した顧慮が考へらるべきである。さうして、この點については少數の有能　誠實なる敎育實際家によつて着々研究が積まれつゝある。が、屢々日本語の所謂困難さ、複雜さに、異民族ならば先づ一應は赦すべしとするも、日本人自身が脅へて、日本語の簡易化を唱ふるがごときは、まことに論外の沙汰である。

それはさて措き、日本語の大規模な普及が、日本の理解、日本の建設作業を圓滑にする要因たるは論がない。從つて前に述べた日本語簡易化説とはやゝ異るが異民族に對し最初に與ふべき日本語は、たゞ容易なるべきを目標とし、日本語理

解者養成の諸事業に對する便益を云爲するひたすら功利的なる主張も存する。前述のごとき日本語普及の目的・本質を否定するのではないが、當座の功利的必要にのみ、日本語普及の事業を限定しようとする主張である。

これに對しては、もとより今日の現實に於て正當と認むべき點も在る。異民族に對しても容易な、いはゆる基礎的な日本語の提示・普及（その撰擇方法については種々問題があるが）を第一前提とすることは、普及策上決して當を得ざるものではない。

さうして宣傳施策として日本語普及を圖る意識の多くは、この見解に結集するやうである。

日本語の本質を毀損せざるかぎりに於て、一種の標準を示し、その標準的・基礎的な日本語の一應の普及を圖ることは、宣傳戰上有意義であるのみならず、むしろ異民族に對する日本語教育の要件でもある。しかしながら、それはあくまで

も日本語普及の一段階として考へらるべきであり、そこに日本語教育が中心の存すると考ふるやうな迷妄を生じてはならない。

いつたい、異民族に對する宣傳に於いて、日本を理解せしめる言語的施策としては、それぞれの異民族に對しその母語を以てする方法と、日本語を以てする方法とが、併せ考慮せられるのである。

さうして、もし日本及び日本文化を一應形式的に觀念的に理解せしめる捷徑を選ぶならば、異民族に對しその母語を以て說くことの便益に如くはないのである。また、現地に於て諸般の建設作業に當つて現住民を協助せしめるための事務的必要よりするも、指導者たる日本人が先づ幾何かの現住民の母語を了得しこれを使用するの便益に如くはない。しかも、多くの人々の指摘する實用的日本語の必要は、實は日本人との接觸により、現住民が極めて短時間におのづと了得するものである。それはともかくとして、ひたすらに功利的、實用的なる便益を第一義と

するかぎり、安易なる日本語の普及による宣傳的效果よりは、むしろ異民族の母語による安易なる理解をこそ、より得策ともすべきである。要するに日本語普及の事業は、いくつかの段階・層序を豫定すべきであるにせよ、常に日本精神を把握せしめる絶對目的から逸脱する方向に在つてはならない。

かくして、日本語普及政策を決する第一義的要件は、純美・高貴なる日本語の滲透による日本精神の移植であることに存する。この根本目的の確信の上に、諸般の具體的施策、殊に宣傳工作との聯關が考慮せらるべきなのである。

四

時勢を深く認識し、時務を適切に處理すべきは私達日本人の要務である。時勢は最も現實的なるものであり、時務は最も具體的なるものであると考へられるからである。しかしながら、時勢と時務とは常に現實的なるもの・具體的なるもの

の一切を提示するとはいへない。時勢と時務とに卽應しつゝ、しかもそこを貫ぬいて永遠不動なる日本の國體に聽き、日本の國體の自己開顯に奉仕することこそ、凡ゆる部門に於ける事業を推進する根源的な力である。

宣傳戰の必要、もとよりである。日本語普及の必要、もとよりである。さうして兩者の關聯すべき狀態は前述のごとくである。しかしながら、宣傳戰にも日本的性格の確立こそ、最も有力なる戰略たることが明白となる。況や、日本語普及について、安價なる功利主義を以て律すべからざる所以の存するも、當然であるといへよう。國語を海外に普及するに當つても、日本の精神・日本のいのちをそのうちに籠める用意こそ、日本の行ふべき言語政策の根幹でなければならないのである。

十七・九

日本語普及史の諸問題

一

日本語を母語とせざる東亞各地域の異民族の間に日本語を普及するといふ營みが、大東亞共榮圏を建設するための基礎的要件たることは申すまでもないことゝ思ひます。さうして、現在日に日に日本語は普及しつゝあるのであります。皇軍將士の異民族との接觸により、或はまた一般國民の進出により、日本語の普及範圍は日々に廣められつゝあるのであります。まことに我が國力の進展に伴ひ、日本語はいはゞ自然に普及するのでありまして、國力の充實するところ日本語の普及は期してまつべきものがあることは申すまでもないことであります。從つて我

が國及び我が國民の對外發展の凡ゆる方法・形態が日本語普及事業たり得てゐると申すことができるでありませう。しかしながら、日本語普及に關する私達の目的觀、また共榮圈建設を能ふかぎり急がねばならぬ現實の必要が、日本語をして、かやうな自然的なる普及に任すること、國力の進展に日本語普及の問題一切を委託することに、私達を晏如たらしめないのであります。日本語は、これを普及することの究竟の目的を目ざして、意識的に積極的に、普及しなければなりません。大東亞共榮圈建設の基底要件は、一日も早く、より深く充足されなければなりません。卽ち、日本語を東亞共通語として普及せしめることにより、日本語と表裏不可分の關係に於て形成せられてゐる日本精神を、東亞の異民族全般に體驗せしめ、日本精神の具體的把握によつて新しき大東亞人たるの心性を東亞の異民族一般の間に形成しようとする目的、この究竟目的は、私達の日本語普及の營みに對して意識的、積極的なる推進を課するのであります。

また、大東亞共榮圈の確立のためには、その根柢として東亞各民族のかたき精神的結合が必要であり、または日本精神により陶冶せられ、新に形成せられた大東亞的心性によつて、始めて東亞異民族全體のかたき精神的結合が現實に生じ得ることを思ひ、またその速かなる實現の必要を思へば、日本の現代が私達に課するところは、日本語普及の意識的・積極的なる遂行であります。

私達は、充實せる國力の背景に感謝しつゝ、これに棹すことに於て怠慢であつてはならないと思ふのであります。

さて、日本語普及といふ營みが私達にとつて意識的・積極的なる事實であるかぎり、この營みは教育事業たる性格を本質とするのであります。日本語普及事業は、本質的に教育事業でなければならないのであります。

日本語普及の營みは、それぞれの母語を有する異民族をして、日本語の構造體系を知得せしめ、日本語の運用能力を把握せしめ、かくして日本語による言語社

會に加入せしめようとする點に於て、既に明確なる教育事業であります。しかも日本語による日本精神の具體的體驗、日本精神による陶冶及び大東亞的心性の形成といふ目的に於いて、更に更に明瞭なる教育事業であります。

いふまでもなく、日本語普及事業の本質・根幹が教育にあるといふことは、この事業がいはゆる教育的な領域によつて、或はまたいはゆる教育家的技術意識によつて限局せらるべきことを意味するのではありません。日本語普及事業は、日本語教育たるの目的を堅持しその方法體系を整へると共に、わが國の文化工作またわが國の對外的活動一般との有機的關聯に於て推進せられることにより、眞に的確にして稔り多き實踐の方途を見出すのであります。

しかしながら、日本語普及事業の本質が教育に在ること、日本語教育にあることは、常に反省せねばならぬところであります。かやうにして、私達が異民族に對する日本語普及の事業を考へ、日本語普及の營みに從ふかぎり、私達日本人は

眞の意味に於ける教育的責任を確く身に持さなければならないのであります。さうして、日本語普及を最も强力に推進する根據は、私達日本國民全體の國語生活を洗鍊し革新することにあるのでありまして、國内に於ける國語教育の充實、徹底なくして、日本語普及の本質的なる遂行は望まれないと思はれるのであります。また、總力戰的意味に於いて、日本語普及事業は言語戰的意義を有するはもとより、當然思想戰的意義を有することに着目しなければなりませんけれども、日本語普及は決して單なる宣傳戰的意義に於いて考へてはならない事業だと思はれるのであります。日本語普及の營みは、教育事業たることに本質的意義を持つのであり、その遂行については、何よりも先づ、私達の言語生活並に生活精神が日本的性格によつて整齊統一せられてゐることを根據とするのであります。

二

以上の反省は、粗雜ながら私達のこの問題に對する手がゝりとして考へたのでありますが、次に大東亞の各地域に於ける明治以降の日本語普及のあとについて簡單に一瞥し、私達の參考としたいと思ひます。

明治以降今日までの日本語普及のあと、從つて日本語教育の展開をふりかへりますとき、各地域を通じて共通な著しい事實として、私たちは先づ次の點が注目せられると思はれます。

第一に、皇軍の武威乃至は、わが國の統治力が異域に及ぶや、その悤卒多事の際、直ちに日本語教育が着手せられてゐるといふことであります。銃聲の餘韻未だ消えやらぬ時機とでもいひませうか、建設過程よりいへばいはゞ治安工作第一主義とでもいふべき時機に、異民族への日本語教育といふことが多くの困難を冒

して直ちに着手せられるのが一般であります。

近くは大東亞戰爭の進展に於て南方諸地域に於ける日本語教育の事例に、私達がそれを見出すことは申すまでもありません。占領直後より各地に於て、皇軍將士及び報道部員によつて、かなりに組織的な日本語教育の企畫が立てられ、遂行せられて來たのであります。また、支那大陸に於ても、皇軍一度びその地を占領するや、皇軍將士または宣撫班員によつて日語學校が開設せられ、小學校が開校せられて、速に日本語教育の行はるゝことは、私達が各地に於てこれを見るところであります。しかも、これは決して最近にのみ見る事例ではないのであります。

一體、異民族に對する日本語教育が國家的意志に於いて遂行せられたのは、明治廿八年六月臺北に於いて、臺灣總督府施政式が擧行せられてまもなく、時の臺灣總督府學務部長伊澤修二氏の決斷により、「新領土人民ヲシテ速カニ日本語ヲ習

ハシムペシ」といふ伊澤氏の意見が實行に移されたのを以て嚆矢とするのであります。臺北郊外の芝山巖といふ丘の上、荒廢した廟に於て、伊澤部長始め數名の學務部員が六名の生徒に日本語を教授したのが最初であります。當時臺北は戰火のため未だ市街の半ばは燃えつゝあり、所々に死屍の横はるを見るといふ有様であり、その後半歳にして學務部員揖取道明氏外五名は臺北周邊に蜂起した土匪のために殉職し、芝山巖の學堂も亦襲擊掠奪を受けたのでありました。かやうな草創多忙の際に旣に教育事業の根本的必要を認識し、しかも日本語を以てする教育の達成を肝要事として日本語普及に着手せられた伊澤部長の信念と見識とに對しては、深き尊敬と感激とを禁じ得ぬところでありますが、この伊澤部長の高邁なる教育的處置は、爾後、わが國の民族政策に於ていはゞ傳統的なる事實として隨所に認められるやうにも思ふのであります。卽ち、朝鮮に於ては、旣に日韓倂合以前に於いて日露戰爭の最中、卽ち幣原垣氏三士忠造氏等によつてかやうな忽

忙の際に朝鮮に於ける教育一般、並に日本語教育の基礎をかためられてをりますが、日韓倂合の翌年明治四十四年にははやくも朝鮮教育令が發布せられ、日本語普及を教育の主眼におく方針が確立せられ、强力に推進せられたのであります。關東州に於いては、同じく日露戰役たけなはなる明治三十七年十二月、金州軍政署に於て、卽ち陸軍部隊の手によつて小學校が開校せられ直ちに滿人に對する日本語教育が强力に行はれたのでありました。また、南洋群島に於きましても、大正三年わが海軍が之を占領するや、各島の守備隊員は直ちに島民兒童を集めて熱心に日本語教育に從事し、後一年餘にして防備司令部により小學校規則制定せらるゝ以前に於て、旣に大いに日本語教育の效が擧げられたのでありました。滿洲國が建國後直ちに日本語教育に努力せられたことは申すまでもないことでありますが、之には明治四十二年七月以來の滿鐵による日本語教育の歷史が大いに預つて力があるのであります。

とまれ、私達は、臺灣が皇土に入りてより以來今日まで、わが日本の國威皇軍の武威異域に一たび及ぶや、百般の建設事務錯綜し、諸事未だ緒につくともいへぬ際に於て、異民族に對する教育事業が日本語普及を中心として直ちに開始せられた事例を觀て、こゝにわが國の把持する男性的にして慈愛ある興亞教育の根本的性格を示されるやうに思はれるのであります。

第二に、認むべき事實としては、日本語普及の目的觀の問題であります。もとより各地域に於ける日本語教育の方針については夫々特殊性がありますけれども、日本語を通じて日本精神の傳達を圖るといふこと、日本語教育が言語教育でありつゝ、しかも言語教育を超えた精神教育であることを根本方針としてゐる點に於ては共通であります。詳說を避けますが、これは各地域を通じて認められる根本方針であります。

第三には、日本語教育の徹底が、異民族の母語の彈壓の上に意圖せられるやう

なことのなかつた點であります。臺灣に於ても朝鮮に於ても、日本語の徹底的普及、國語の常用化を推進して來たことは申すまでもないのでありますが、決して母語の彈壓をまつてこれを可能にしようと考へられたことはないのであります。たとへば朝鮮教育令の屢次の改正を見ますとき、學校教育に於ける朝鮮語の時間を、日本語の普及度の進展によつて次第に減少してゐる處置を見るのでありますが、我が國の日本語普及方策は、あくまで日本語による言語體驗の指導 育成を主とし、强制や彈壓を事としなかつた事例をこゝに見るのであります。さうしてこの點は、歐洲に於て屢々見らるゝごとき言語の强壓による悲劇を全く惹起しなかつたことに照應する事實でありませう。

その他、明治以降の日本語普及史に於ける一般的事實について、なほ私達の參考となる點も多いのでありますが、今は之を避けて次に日本語教育の展開について考へてみたいと思ひます。

三

さて明治以降今日に至るまでの日本語教育の展開のあとを、日本語教育を推進して來た統一原理によつて簡單に跡づけてみると、次のごとく言ひ得ると思ひます。卽ち、

1　臺灣が皇土となつてより滿洲事變生起に至るまでの期間——皇國民としての化育のための日本語教育。

2　滿洲帝國の成立より支那事變を經て大東亞戰爭勃發に至る期間——興亞精神滲透のための日本語教育。

3　大東亞戰爭遂行中の今日及び明日——大東亞民族團結のための日本語教育。

もちろんこれらの展開區分は、必ずしも日本語普及事業關係者がすべて意識的・理論的に思考し、明言してゐたところに從つたのではありませんし、詳論を避く

るを以て獨斷の譏りも免がれぬでありませうが、とにかく日本語教育の展開を考察する便宜にはなると思ひます。また、それ〳〵の時期に於ける統一原理は、根柢に於いて日本の大陸發展に關する政治狀勢によつて、規定せられてゐるのでありますが、また日本語教育の對象たる異民族のよつて以て生活する民族社會の地理的・歷史的條件によつて、規定せられてもゐるのであります。從つて、1の期間に於ける統一原理は、2の期間に於いて新しき統一原理が生起してもその機能を消失したのでなく、また2から3への場合に於いても同斷であります。それ〳〵の期間に於いて働いてゐる統一原理は、つぎの段階に於いて新しい統一原理が成立しても尚且活潑に生きてゐます。日本語教育の現狀を橫斷的に見れば、現在、特定の地域毎にそれぞれの統一原理がすべて働いてゐるのであり、從斷的に日本語教育の展開のあとを見るとき、時間的系列に於いて右の三つが統一原理として認められると思ふのであります。

さうして、三つの統一原理が成立する全過程、日本語教育の流れに於いて、日本語を母語としない異民族に對する日本語教育の方法體系が次第に整備せらるる大勢を示して來たのであります。卽ち方法的には、教材についても教授法についても異民族に對する言語教育たるの認識によつて、次第に國語教育からの獨立的な領域を發見し、確立するに至らうとしてゐるのであります。日本語の主體的把握を根柢としそれの客體的認識による整理を經て、國語感覺・國語生活の醇化・統一に至らうとする國語教育の方向と、先づ日本語の客體的把握を充分ならしめやがてそれの主體的把握にまで導き、以て日本語による言語生活の體驗にまで至らしめようとする日本語教育の方向とには、方法的に明白な差異がなければなりません。日本語教育を行ふ仕事の本質的意義と價値とについては、內外に於て逕庭の存する筈はなく、日本語による日本的生活秩序・文化感覺を體驗せしめようとする事業の理想とするところは、また內外にわたつて相違する筈はないのであ

りますが、方法に於いて明白な差異の存することは疑はれないのであります。

實に、明治以來伸張し來つた日本語教育史に於いて、今日感謝を以て回顧すべき重要な事實は、それ〴〵の期間に於ける各々の統一原理に棹し、これと體當りをしつつ仕事を進め、その熱烈なる實踐を通じて、次第に日本語教育の方法的獨自性を發見し、整備し來つた人々の存在したことであります。中央の學界　教育界　文化界がほとんど無關心であつたにもかゝはらず、周知のやうに、主として異域に在る少數の國語教育家及び國語教育關係者によつて、日本語教育の方法體系の基礎は準備せられつつあつたのであります。殊に上述の第一期に於いては、その間、大陸發展のための國論、國策必ずしも一定せず、從つて日本語教育にとつて甚だ困難な期間も存したのでありますが、その間に處し、體驗と研究の累積によつて日本語教育の方法を確立し來つた人々の努力に對しては、正に今日の文化工作關係者殊に國語教育界は深き感謝を捧げねばならぬと思ひます。とまれ、

方法的特質の自覺、その探究といふ段階を經て、やがて方法體系を確立するに至らうとするのが、前述の三期間を通じ日本語教育史上に見られる發展的潮流でありますが、以下に各時期の徴表を一瞥しようと思ひます。

第一に、皇國民としての化育のための日本語教育について。前述のやうに明治二十七八年の戰役後、臺灣が皇土となるや、日本語を以て本島人を教育せんとする方針が總督府の堅持するところになりました。以來學校教育に於いてのみならず、社會教育の領域に於いても日本語の普及滲透を圖り、さまざまの施策・施設がすゝめられて今日に及んでをります。さらに、日露戰役後數年にして朝鮮半島が皇土となるに及んで、臺灣に於けるとほぼ同一な統一原理によつて日本語教育が進展しました。また、南洋群島に於ても、日本語教育は同一な統一原理の上にたつてゐるのであります。關東州に於ける日本語教育史の事實については、勿論この統一原理をもつて蔽ひきれぬ現實も存したでありませうし、教育事業自體が

政治狀勢上甚だしき困難に遭遇した時期も認められるのでありますが、次の段階に於ける統一原理の發動は未ださだかに之を見られず、いはば過渡的現象が存したのであります。

さうしてこの時期・段階・地域に於ては日本語教育は日本語の教育であるのみではなく、むしろ日本語による皇民化教育、日本語を以てする皇民化教育全般の實現と云ふ事がその顯著な性格であります。內臺一體・內鮮一體と云ふ根本原則は教育活動の全面に於て固く維持せられ、臺灣朝鮮の同胞を化育して皇國民としての生活を享受するに遺憾なからしめようとする統一原理が日本語教育の中心に働いてゐるのであります。日本語學習の初期の階程に於ては特に注意深く方法的考慮が拂はれて居り、臺灣朝鮮に於ける日本語教授の研究實績は今日の日本語教育に寄與する所甚だ多いのではありますが、稍ゝ進んだ階梯に於ては國內の國語教育との全く一體的な實踐が行はれるのであります。現在臺灣・朝鮮の國民學

校に於いて、初歩の段階をのぞいては國內の國民學校國語教科書が使用せられてゐるがごときは、その例證であります。南洋諸島に於ては日本語を使用する事によって島民達は種々雑多な方言が存在するための障碍から解放されたわけでありますが、日本語教育を推進する統一原理に於ては、臺灣・朝鮮と同斷であります。

これらの期間・地域に於ては、一般に純粋に語學的なる問題・言語教育の領域に於ける問題が日本語教育にとって直接的なる努力でありました。もちろん日本語生活圏の社會的擴大といふやうな努力も拂はれてをりますが、方法の研究が中心でありまして、內地に於ける國語教育の方法との明白な相違が意識せられ、日本語教育の效率を増進するために、教授法についても、教材についても、研究・調査が進められて居ります。さうしてこゝに日本語教育實際家のうちたてた功績があるのであります。即ち、日本語異民族に對する日本語教育の方法的特質が、

明瞭にせられ、いはば言語第一主義の教育態度及びいはゆる直接法を以て指導せんとする教授法の根本原則が確立せられ、爾後の日本語教育に對して、重大な寄與をなしたのであります。しかしながらかやうな日本語教育の方法的特質はいはば國語教育の底邊に於ける特殊的位相として考案せられてゐたのであり、正統的な國語教育としての段階にまで、なるべく速かに成長し、脱皮し行く事が、この期間、地域に於ける日本語教育の具體的目標でありました。從って日本語教育を他の國力發展狀態に意識的に結び付けるといふやうな仕事は、直接的な問題としてあまり意識せられる要がなかったと思はれるのであります。また、日本語が國語として絶對的なる位置を保つ以上、日本語とその地域にある同胞の母語たる生活語との關係のごときも、たゞ教育技術上の問題として研究せられるのであり、その關係を律する政治的規定を考慮するが如きは既に問題ではないのでありました。

然るに第二の期間、即ち興亞精神の滲透のための日本語教育たる段階に於ては

問題は複雜となります。滿洲事變を契機として、日本の荷ふべき世界史的使命卽ち東亞諸民族の傳統と性格に立脚した新しい東亞共榮生活圈を確立し、依つて以て世界に新秩序を齎らす基礎たらしめようとする强靱な自覺が日本に躍動したのであります。その自覺は日本に於て、主體的な態度に於ける自己反省の努力となると共に、當然實踐的行爲となり、東亞の異民族に對して日本と等しき自覺を喚起しまた反省を促す行動となつたのであります。自覺や反省を促すにあたつて、日本は溫情に滿ちて新しき芽ばえを育成すると共に、破壞すべきものは、徹底的に破壞せねばなりません。かくて東亞の異域に於て日本が國運を賭して建設と戰爭とを兼ね行ふ時期が滿洲事變以後繼續するのであります。さうしてこの苛烈な時期を通じて日本は東亞建設の理念・興亞精神を國家的意志として益〻明確にして來たのであります。日本の抱く興亞精神は、東亞の政治的現實を革新するといふ課題に直接する事により、その實現方途に關する構想を次第に精緻にし、

次第に多面的となしつつあり、その構想はまた次第に理論的抽象性を脫却して具體的實踐的計畫をその內容となしつつあります。が、日本の對外的國家活動の明確な根本原理は少くとも滿洲事變以來一貫して興亞精神の振起と具體化であることは論を俟たぬところでありませう。

かくして先づ日本の抱持する興亞精神を東亞の異民族の間に滲透せしめる事が日本の期する新東亞建設の根柢とせられるに至りました。さうして周知のごとく建國以來滿洲國に於て、また支那大陸の各地に於て日本語の普及・日本語教育の事業が活潑に急速に大規模に行はれつつありますが、普及の能率、教育の形態に差こそあれ、それを貫き支へる統一原理は、興亞精神の滲透と云ふ目的であると言へませう。

もちろん日本精神を中軸とする民族共榮の雛型ともいふべき、滿洲帝國に於ける場合と支那各地域に於ける狀態とでは、日本語の位置はかなりに相異してゐま

す。滿洲帝國に於ては日本語がこの新國家に於ける最も重要なる國語の一つとして位置づけられ、旣にして外國語ではありません。支那各地域に於ては略〻全般に第一外國語としての位置と實勢力を持つてゐますが、蒙疆・北支・中支・南支と地域の差により多少の普及狀態・敎育程度の差異もあります。然し滿洲帝國に於ても支那各地域に於ても日本語によつて日本精神を理解せしめ、それに媒介せられてそれ〴〵の民族社會・國家構成の獨自性を開顯し、新東亞建設事業の一端を荷ふに足る生活及び文化の成立に至らしめようとする基調に於ては相通ふものがあるのであります。東亞の異民族は、日本語の普及により日本との結合を緊密にする事はもとよりでありますが、日本を眞に深く知る事によつて東亞民族としての意義と使命を明確に把握しそれ〴〵の獨自な發展を結果するに至るべきが日本語敎育の統一原理であります。日本語は日本精神を體得する通路として移植せられると共に、異民族に對して眞正の東亞人としての精神を振起する原動力とし

て廣く深く移植せられようとするのであります。

かくしてこの期間に於ては日本語そのものがそのまゝに日本精神の具體的な顯現であると云ふ意味に於て、移殖すべき日本語の醇正なるべき事、いはゆる國語の內外一如がしば〳〵主張せられたのであります。その主張が自己反省の方向を取り國內に於て國語の純化・整理統一の必要を指示する契機ともなると共に、また國語敎育の刷新を促す契機ともなり、標準語の生活的把握・國民の國語生活をその日常性に於て練磨する事の必要も唱へられたのであります。

さて、この期間に於て日本語敎育の當面する重要な問題は、意識するとせざるとにかゝはらず、日本語と異民族の生活語・母語との關係及び日本語と他の外國語との關係について考へる事でありました。もとより歐米諸國がその植民地に於て意識的にまた無意識的に遂行した言語政策がこの場合若干の參考となる事は事實であります。しかしながら日本の興亞政策は歐米の資本主義的侵略主義・植民

政策とはその世界觀的基礎に於ても、歴史的段階に於ても、實踐の方式・速度にしても全く撰を異にしてゐるのであります。西歐に於ける二重國語制・三重國語制の言語社會と、たとへば滿洲帝國に於けるそれとの間には、歴史的に構成原理的に甚だしき相異のある事を思はねばなりません。この問題は多くの人達の努力によつて思索されつゝありますが、やがて國家發展の先端に立つ挺身的實踐の唯中から、新しく逞しい理論構成を以て築き出される事でありませう。さうして、今日明きらかにせられてゐる直接的な方向としては、日本語が各地域に徹底的に普及せらるべき事、日本語教育が異民族の母語の無視壓迫の上に推進せられるのではない事、興亞精神の敵たる國家の言語は掃滅せらるべき事、外國語として位置づけられる場合と雖も日本語は常に第一外國語の位置にあるべきであり、たとへば日本に於ける外國語の場合などに比して遙かに高き位置を占むべき事等々であります。

　それはとにかく此の時期に於て日本語教育の方法論的思考は一層活潑になりました。その思考は教授法・教材に獨自にして緻密な體系を生み出さうとする眞摯な努力となつて現はれてゐるのみならず、日本語そのものの獨自な構造について外國語としての視野からも之を精密に研究せんとする努力をみるに至つたのであります。さうしてこれらの事象を通じて國語教育が國家發展の第一線的役割を加擔する使命が自覺せられ、國語學又日本語教育への寄與をなす態勢が馴致せられるに至りました。卽ち日本語の獨自な構造　機能を主體的把握の態勢に於て理論的に究明する傾向も著しく活潑になつてまゐりました。

　とまれ東亞の異民族に日本語を移植する事の意義及使命が日本の國家的意志の中樞に位するものとして意識せられると共に、日本語教育がよつて以つて效果的に遂行せらるべき樣々の處置が備へられようとし、日本語教育の內容が全面的に檢討せられるに至つたのであります。日本語教育はその外包的關聯についてもそ

の內容的特異性についても、實踐的立場に於て多岐なる檢討が加へられ、異民族に對する日本語教育としての體系が急速に整備せられようとするに至りました。さうして今や第三の期間、大東亞諸民族團結のための日本語教育の時期に入つたのであります。

もとより第二期と大東亞戰爭遂行中の今日及び明日とを比べて統一原理に明確なる差異があるべき筈はありません。然し興亞精神の滲透を目指す統一原理は今日一層具體的な位相をとつたと思はれるのであります。卽ち米英との激鬪の最中に大東亞共榮圈建設の事業を併行する今日、米英擊攘が新東亞建設の根柢的條件であると共に、また新東亞建設の進行こそ米英の徹底的擊攘を結果し得るものであること、この戰爭と建設との相互規定的關聯を凝視するとき、大東亞諸民族を一つに結合する言語紐帶の實現こそ誠に必須不可缺である事を思はねばなりません。卽ち諸民族の各〻に興亞精神の滲透を期するのみならず、日本を中軸とし媒

介としてこれら等相互が結合するための共通語として、日本語は强力に普及されねばならないのであります。

もちろん日本語教育の實際的方途としては、大東亞の各地域に於てそれ〴〵の特殊性によつて異なるべきものがありませう。また第一の統一原理による成果も第二の統一原理の實現も未だ必ずしも滿足すべき狀態に達してゐるとはいへないでありませう。それらの統一原理はそれ〴〵の地域に於ける日本語教育の充實のために益〻活潑に躍動しなければなりませんが、とにもかくにも現在の段階は各地域に於ける普及速度を進捗させて一日も早く大東亞共通語としての日本語が弘通することを期さねばならないのであります。

いふまでもなくそれがためには、いはゆる南方にのみ焦點をあはすことはむしろ警戒しなければなりません。目指すべきは大東亞諸民族の團結であります。日本語が大東亞共通語たるの現實を招來する事であります。各地域の民族社會にそ

れ〳〵日本語が廣く深く移植せられて始めて各民族相互間の共通語たる事實もあり得るのであります。或る地域のみに重點を置きその普及效率を高め教育內容の充實を期さうとするのではありません。今日求められ進めらるべきことは第一に各地域に於ける日本語普及事業の强化であり、各地域の日本語普及事業を統一するための日本語普及政策の確立であります。

さて日本語教育の現段階に於て當面の問題として考へられることは、教育對象の著しき擴大であります。さうして異民族に對する日本語教育史を回顧して今日及明日を諦視すれば、

1　教育對象の量的擴大

2　教育對象の質的擴大

といふ事實に瞠目せざるを得ないのであります。

先づ教育對象の量的擴大についてみますと、統計の示す概數に從へば、日清戰

役後臺灣が皇土となつたときには、日本民族と教育對象たる本島人との人口的比率は內地人十二——本島人一の割合でありましたが、滿洲帝國成立後は日本人一對異民族一・四と云ふ割合に至りました。大東亞戰爭進展後は、實に日本人一對異民族九强となりました。

皇威の及ぶ地域の急速なる擴大に私達は驚歎せざるを得ませんが、その廣範なる全域に日本の生活精神・文化感覺を移植する事によつて新しき生活秩序・文化樣式を生みだす必要を思へば、いはゆる文化工作の對象の擴大に對して覺悟を新にせざるを得ないのであります。日本語普及を强力に行はんがためには、この對象の量的擴大と云ふ事實をはつきりと見据えねばなりません。從つて、今や大規模な企畫と實踐とを必要とするのでありますが、殊に事業組織の統一・系統の確立を肝要とするのであります。次に教育對象の質的擴大と云ふ點を意識しなければなりません。

いつたい、支那事變の勃發以前に於て、日本語の學習者は必ずしも乏しかつたのではありません。支那に於てはもとよりのこと、歐米各國・濠洲・南米等に於て日本語の研究及學習はかなりに行はれ、最近は特に活潑に行はれてゐたのでありますが、それらに於ては一般にいはゞ學問的興味乃至は文化的興味にもとづく學習が支配的であつたとみることができるでありませう。日本人及日本文化に對する異國趣味或ひはまた西歐人のいはゆる東洋趣味に根ざす點が多く、現實生活に密着した欲求に出發する學習であることはむしろ乏しかつたともいへるのであります。さうした段階に於ては、日本の文化事業といふ對外的國家活動の性格もいはゞ、日本文化の知的理解者を增加せしむることをその基調としてゐたやうであります。從つて、日本語普及の問題として之をみれば、主としていはゞ文化語的位相に於ける日本語學習が行はれてゐたといへませう。

然るに滿洲帝國の成立・支那事變の生起といふ段階に至つて、日本語教育は異民族各個の生活上の現實的要件として求められることとなつたのであります。特に大東亞戰爭勃發以後は日本の立場よりみるも異民族の立場よりみるも、日本語普及は現實生活の基盤を形成する必須不可缺の事實として求められてゐるのであります。東亞共榮圈の成立は東亞文化圈の確立を根柢とすると同時に目的とするものではありますが、それはまた東亞生活圈の確立を意味してゐるからであります。從つて、今や異民族の日本語學習はむしろ生活語的位相に於て日本語を體得する事を第一要件とするのであります。

日本語によつて高き日本文化財を味得せしめること、殊に日本の古典文化財を観賞せしめる事は今日に於ても重要なる課題であります。また現にその要求も必要も、存するのであります。しかし今日敎へられ學ばれる日本語は、何よりも先づ現實生活の基盤に喰入るものでなければなりません。日本語そのものに絕對的基準による生活語と文化語との區別はありえないにしても、とにかく生活語的位

相に於ける日本語の把握が教育對象たる異民族大衆に肝要とされるのであります。

今や日本語教育は、日本文化財の理解を意欲する知識人の他に現實生活の要求として學習せんとする數多の大衆を對象とするに至つたのであります。日本語教育は、對象の斯樣な量的質的擴大に即應する樣に萬般の整備を急がねばならないのであります。

四

次に、日本語普及の此の段階に於て百般の措置よろしきを得る政策を確立するためには思考の目案となる點を二三擧げてこの粗雜なる考察の結びとしようと思ひます。

第一に軍事的政治的經濟的工作と一體的關聯に立つて施策することの必要であります。いふまでもなく私達は日本語普及といふ課題に當面して、我が國力のよ

り直接的な對外的發展形態、即ち軍事的・政治的・經濟的工作と遊離して、思考の範圍・研究資料の選擇をいはゆる學問的領域・技術的領域に、企畫の方案をいはゞ書齋人的空論にとどめることとなき樣に注意しなければなりません。日本語普及といふが如き事業は、決定的に現實的・實踐的な仕事であり實踐的視角・綜合的具體案こそ要求せらるべき第一であるのであります。從つて、軍事的政治的經濟的工作と併行し、これと一體的關聯に立つといふ企畫性と熱情とを以て思考されねばなりません。さうしてこの事たるや、もとより容易なる机上案ではなく、體系的思考と共に活潑々地の現實的感覺を必要とし、且將に戰爭そのものに挺身する熱意と實踐的叡智とを必要とします。要は日本の現在行ひつつある國家的努力は戰爭即ち文化工作であり、文化工作即ち戰爭であるとの現實をはつきりと認識することから思考の向ふべきところも明きらかになる筈であります。

第二に指導者としての人材を養成する施策であります。先に考へましたやうに

日本語普及事業は本質的に教育事業であります。然も、日本語以外に大いなる母語の環境を持つ異民族の學習者に對して、日本語の知識を與へ運用能力を授け更に日本的陶冶を加へて、精神の日本的形成を圖ると云ふ努力を、わづかな日本語學習の時間に於て果さなければならないのであります。指導者は自らの日本語、自らの人格によつてのみ、日本語の言語環境・日本的生活態度を異民族の學習者に與へなければならないのであります。甚しく限局せられた條件に於て、言語教育と生活指導との兩面を一體的に果さねばならない立場にあります。それ故によく斯かる責任を遂行し得る人材を養成することは、いふまでもなく日本語普及事業の眼目でありませう。

第三に國內に於ける國語教育の充實・我が國民一般の國語生活の統一と云ふ問題であります。今日及明日に於て日本語普及日本語教育をして眞に效率を增進するためには、畢竟、私達國民一般が國語のいのちを體得し、國語生活の統一を圖ることこそ遅きに似て實は速かな、迂遠の如くにして然も適切な根本の策たるを思はざるを得ないのであります。

さうして國語生命の體得・國語生活の統一を可能にするためには先づ私達の國語感覺を洗練するやうに相互に努めねばなりません。日本語を以て生きるこの凡ゆる國語生活の場面に於て國語感覺を磨き、失はれ勝な正しき感覺を呼び覺し、新鮮な感覺を身につけるやうに自らを訓練しなければなりません。日本人にして國語感覺なく、國語への歸依なくして何の普及でありませう。今後日本語普及の事業は異域に進出する日本人總べての、國語による日常生活の狀態を以て、直接的な最も有力な支柱と致します。思うて此處に至るとき、日本語教育をして充全の實を擧げしむるには、國內の國語教育の充實を前提要件とすることを認めねばなりません。さうして國語教育は、一切の方法的課題の焦點に於て、國語生命の具體的、生活的把握、少くとも國語感覺の洗練を常に意圖しなければならないと

思ふのであります。

（昭和十八年五月五日文部省日本語學振興委員會國語國文學會發表）

大東亞戰爭第三年と日本語普及

外地及び現地に於て、日本のため、國家的理想をしつかりと實現するため、大東亞共榮圏を實際の事實として現はすため、日夜奮闘していらつしやる皆樣、お元氣のことと思ひます。私ども日本國民は、內に在る者も外に在る者も、力を協はせて、みなこの大建設をなし遂げるための一微粒子として、一微粒子――小さなひとつぶとして、みな精かぎり根かぎりの仕事を致したいと思ひます。みんなが縁の下の力持ちとなつて協けあひがんばつてまゐるべき時と思ひますが、特に外地及び現地で、直接に共榮圏建設のための樣々のお仕事に日夜沒頭していらつしやる皆樣の御健闘をお祈りせずにはをられません。

さうして、南太平洋に於て中部太平洋に於て敵米國の反攻愈々熾烈にして、大稜威の下わが皇軍の武威が愈々その本領を發揮し、いはゆる肉を斬る痛烈な打撃を與へつゝある今日、私どもは、益々戰力の充實を圖ると共に、大東亞共榮圏を各方面の仕事に於て實質的に根深くうち立てることに努力いたしたいと思ひます。申すまでもなく大東亞戰爭を勝ち拔かなければ、大東亞共榮圏はしつかりと出來上るわけにはゆかず、大東亞共榮圏が建設せられなければ、米英を完全に擊ち倒す大東亞戰爭の目的は達せられませぬ。大東亞戰爭に完全に勝利を占めることと、大東亞共榮圏を立派に建設することゝは、正に二にして一、楯の兩面と申すことができます。さうして、私ども現在銃を執つてをりませぬものは、このさまざまな部面に於て建設の仕事に打ちこみつゝ、大東亞戰爭の遂行に何らかの寄與をしなければなりませぬ。從つて政治・經濟・文化の各部門に於ける建設の仕事は、とりも直さず大東亞戰爭を勝ち拔くためのたゝかひであります。どんな地

味な、縁の下の仕事であれ、大東亞諸民族共榮の世界を作り出さうとする仕事であるかぎり、これは戰ひそのものでございませう。

さて、私どもが全力を出して建設のたゝかひをすゝめてゆかうとするに當りまして、よろこばしく思ひますことは大東亞共同宣言の明きらかにせられましたことであります。皆さんの御承知のごとく、十一月五日六日の兩日に亙る大東亞會議に於きまして、はつきりとした具體的な目標目安が明きらかにせられましたことであります。この大東亞共同宣言によりまして私ども日本人ばかりでなく、大東亞に生を享け、大東亞に生きる東亞人全體が力を協せて、新しい世界史的現實をうみ出さうとする理想と筋道がはつきりと示されました。卽ち、皆さん御承知のごとく、

一　共存共榮の原則

一　獨立親和の原則

一　文化昂揚の原則
一　經濟繁榮の原則
一　世界進運貢獻の原則

五つであります。

道義に貫かれ親愛に裏付けられたこの大東亞諸民族共通の理想の高邁にして雄大な精神、手もきれるばかりの清らかな内容については、今事更めて申しのべる必要もないと思ひます。私どもは、大東亞各國代表（日本帝國代表東條内閣總理大臣、中華民國代表國民政府行政院院長汪精衛閣下、タイ國代表内閣總理大臣代理ワンワイタヤコン殿下、滿洲國代表國務總理大臣張景惠閣下、フイリピン國代表大統領ホセ・ペ・ラウレル閣下、ビルマ國代表内閣總理大臣ウー・バー・モウ閣下）が眞摯なる協議の後意見一致して發表せられました大東亞共同宣言の趣旨に基き、その理想の實現に微力のすべてをあげてゆきたいと思ひます。私どもはと

つて問題は、この宣言、この理想を、一日も早く、より根強く、がつしりと實現して行く方法にあるわけでありまして、私どもはさまざまの仕事に於て、それぞれこの理想の實現を圖つてゆかなければなりません。

さうして、この理想の實現について、私どもは言葉についての問題、大東亞を一つに結ぶ言葉の問題を少し考へてみようと思ひます。

×

一體、大東亞共同宣言は、大東亞諸民族のかたき團結を雄辯に示すものであり、その團結の象徴であります。その團結があつて生れ出でた共同宣言ではありますが、また一方、この共同宣言は、大東亞十億の民衆の團結の强化、よりかたき團結を强く要求してゐると思ひます。大東亞共同宣言の趣旨、理想を實現する一番手近かな道は、大東亞諸民族の團結を强化するために努力するといふことでありませう。ところで、その團結を精神的内面的な結合として、眞に心と心とがぴた

りとふれあつた結合とするためには、何としても、大東亞に共通の言葉が廣く行はれるやうになることが根本要件であると存じます。さうして、現在及び將來に於ける大東亞共通語としては、申すまでもないことでありますが、すくなくとも、つぎの三條件を備へた言葉でなければならぬと思ひます。

第一には、現在政治的に文化的に、偉大な背景を持ち、眞に大東亞共榮圈建設の中心となりまた世界を指導してゆける實力を持つた國家・民族の言葉といふことであります。

第二には、醇乎たる東洋文化・東洋精神の眞髓をひろく、深く内容にたゝへた言葉、全東亞の文化的・精神的傳統を綜合し豊かにたゝへてゐる言葉であるといふことであります。

第三には、その言葉が、言葉としてすぐれた特質を持ち明確な法則を持つた言葉であるといふことであります。

さうして、右の三つの點の何れからしても、申すまでもなく、私どもの國語、日本語こそ、私ども日本人にとつてのみならず、大東亞諸民族のすべてにとつて、大東亞共通語たるにふさはしき言葉であるといはねばなりません。

第一の政治的に文化的に大東亞共榮圈建設の責任者としての偉大な背景を持つ國家・民族の言葉といふ點については、申すまでもないと存じます。さうした生命力をもつた國家・民族の言葉としては、日本語が當然、大東亞共通語たる責任を採るべきであります。

第二の東洋文化・東洋精神の傳統を純粹にしかも綜合的にたくはへ持つ言葉としては、これまた申すまでもなく日本語であります。日本語は、日本民族の生活、日本精神をうみ出し磨き上げる私達の精神的血液でありますが、また、日本的生活、日本精神のそのまゝに表はれたかたち、日本精神の表現であります。さうして、日本的生活・日本精神は、申すまでもなく、萬古不易な日本的

傳統・日本的特質によつて一貫せられてをりますが、また、凡ゆる東洋文化・東洋精神をひろく深く包攝してゐるのであります。くだ／＼しくは申しませんが印度の宗教も、支那の思想も、南方の生活風習も、日本的生活の中にひろくとり入れられ、しかもそれらが、立派に統一せられ、現代に於ても生き／＼と生かされてゐるのであります。誠に、東洋人の凡ゆる精神生活の傳統・文化樣式の特質が日本に攝取せられてをり、しかもそれ／＼がたゞ古き歴史的事實として止まらず、現代の私どもの生活の中に生かされてゐるのであります。從つて、日本の中に全東洋がある、日本語の中に全東亞の精神、感覺がたくはへられてゐると申せませう。日本語は、その有する東洋的性格傳統の綜合といふ點に於て大東亞の共通語たり得べき第一の言葉であります。

　第三の言語としてのすぐれた特質、明確な法則を持つといふ點に於いても、日本語は大東亞共通語たるべきものでありますが、この點についても、私ども

もしつかりと反省せねばならぬことがあらうかと存じます。

　日本語のすぐれた特質についてはくだ／＼しく申すまでもありませんが、率直にいつて、日本語に自信を持ちきれないといふ人もかなりあるのであります。即ち、日本語にはたゞ複雜・難解な言葉であるとか、しかとした法則のない言葉であるとかといつたことのみを強く意識する人もないわけではありませぬ。

　一體、現代の大東亞共通語として日本語をひろめるといふからには、さしあたり現代の日本語、それも現代日本の國語、口で話し耳できく話し言葉が第一に問題とされるわけでありますが、現代日本の話し言葉は、決して、さやうに複雜難解な言葉ではなく、不規則な言葉ではないのであります。日本語は、音韻、發音の上からいつても、簡素な組織を持ち、ヨーロッパ語にくらべて學習の困難な言葉ではありません。語法、法則性の上からいひますならば、これまた、平明であり、ヨーロッパ語にくらべて一層規則的でもあります。たとへば、現代語の動

詞の活用のごときを考へても、現代語では、カ行變格活用（來る）、サ行變格活用（する）といふ二つの外は（四段、上一、下一の三種）のみな規則的な變化をするものばかりでありまして、ヨーロッパ語に於ける動詞の活用語尾の變化を學ぶことよりいへば、遙かに簡單でありませう。

一體、複雜だ難解だとのみ思ふ考へ方は、多く、ヨーロッパ語の特質にのみ目を向けてゐて、その型に外れてゐる、ヨーロッパ語の持つ法則に外れてゐるといふことから日本語が複雜であり不規則であるといふ意識に陷ち入るかたむきが多いのであります。日本語は獨自な特質と法則とを持つ言葉であり、逆に日本語の特質法則に立脚してヨーロッパ語を見れば、向かふの言葉こそ、複雜であり、不規則であるともいへるわけであります。ヨーロッパ語の名詞や代名詞に認められる「性」のごとき、まことに理窟通りにはゆかない、不規則なものゝ例でありませう。

詳しいことはとにかくとしまして、現代日本の話し言葉は、決して複雜難解な言葉ではありません。もちろん、異民族の人が學習する場合には、種々な點を感ずることはありませうが、これは何れの言語でも、外國語ならば學習に困難なことでありまして、日本語にのみ關することではないのであります。私どもは、日本語の特質をしつかりと見定め、その法則をしつかりと握り、筋道を立てゝ呑みこませる方法を考へればよいのでありませう。

さうして、日本語には、種々なるすぐれた特質がありますが、正確にその一つをあげれば、日本語の描寫力、事細やかに物事をいひ表はし得る力が考へられます。いはゆるテニヲハ、助詞を使ふことが日本語の特質でありますが、このテニヲハによつて、心持の纖細な動き、物事の細やかな趣まで、生き〳〵と正確に詳しく描き出すことができます。

第二に含蓄ある第三に美しい表現ができるといふこと。

ともかくにも、現代の日本語は、言葉そのものとしては、簡素な音韻組織（發音のきまり）を持ち、明確にして規則的な語法を持ち、すぐれた言葉であります。さうして、日本語を書き表はす方法、文字の使ひ方については、他の言葉にくらべて多様でありますが、これも、一般の日常會話の必要と適合することを目安として、適當な授け方をすれば、さほどに困難至極なものではないのであります。

しかも、現代の日本語の學習から一歩進んで古代の日本語、古代の日本文化を學ばうといたしますならば、日本語はまた好條件にあります。日本語ほどに歴史的に變動をうけることの少い言葉は、あまりないでありませう。語彙の上から申しますならば、千年以上も昔の萬葉時代の歌人の使つた言葉や、また源氏物語のできた古い時代の言葉が、ほとんどその當時のまゝの意味をも持つて今日に生きてゐることなども、他の言葉には例の多いことではありません。

私どもは、日本語のすぐれてゐることを確信し、これを大東亞共通語たらしめるよう一層の努力を拂ひたいと思ふのであります。

一體、大東亞共榮圈を見渡してみますと、實に樣々の言葉があり、ほとんど全世界のあらゆる系統の言葉が散在してゐるとも申せませう。さま〴〵の系統の言葉が行はれてをりますだけに、大東亞共通語の必要なことは一入であります。大陸の北から南へ、また、太平洋上に散在する無數の島々を東から西に、一すじの強い防衛線で結んでゐる皇軍の武威に併行して、凡ゆる系統の言葉を話してゐる多くの異民族を一つに結ぶ共通語を、私どもは一日も早く弘めなければならないのであります。日本語の普及は、かうして、皇軍將士が軍靴を以てふみ開き、尊い血潮によつて強く引かれた大東亞共榮の境界を、しつかりと支へる仕事であります。皇軍將士の築かれた大東亞共榮圈建設の基礎をしつかりと固める仕事であり、大東亞十億の人々が深く結合するための基礎的條件であります。

十八・十一

日本語學校論

（文部省圖書監修官本會理事）

一

北は滿洲國から南はわが陸海軍々政施行地域に至るまで、大東亞圏に共通して存在する獨得な教育機關として日本語學校がある。

大東亞圏には、現在の獨立國あり、乃至は獨立國的性格を有する地域あり、まだわが陸海軍々政施行地域あり、各地域は、その歴史的・風土的・民族社會的條件に基づき、また大東亞戰爭遂行の各段階に即應して、それぞれ特殊なる政治的構造を持つてゐる。從つて、現在各地域は、それぞれ固有の教育制度を持ち、特殊なる教育内容を持つてゐるのである。學校は、人材養成の基本形態であり、最

も眞摯にして深切な意味に於ける政治理想を體得せしむべき場所であるが、またいふまでもなく政治的現實に規定せられずして在り得る筈はない。それ故に、現在大東亞各地域にはそれぞれ特有の學校が存在する。詳細を説く煩は今避けることにするが、北は滿洲國から南はわが陸海軍々政施行地域に亘り、學校の種別に於いて、各程度の學校の修業年限に於いて、教科目その他教育內容の實際に於いて、大東亞の各地域はそれぞれ固有・特殊の學校を持つてゐる。

然るに、獨立國たると獨立國的性格たるとわが軍政施行地域たると、かやうな政治的構造の相違を超えて、各地域を一貫して共通に存在する學校がある。日本語學校が、卽ち之である。日本語學校は、先づその存在の仕方に於いて注目せらるべき獨特の學校である。さうして、その性格・その使命・その發展すべき方向については、充分の檢討と研究とが加へらるべき學校であり、大東亞圈建設の綜合的にして具體的な企畫は、この教育機關の存在する事實を看過すべきでないと

思ふ。

二

日本語學校は、滿洲事變・支那事變及び大東亞戰爭の生んだ獨特の學校である。いふまでもなく、支那事變の勃發する以前から、日本語教育を行ふ一種の社會教育機關としての學校形態は、若干は大陸の各地に散在してゐたのであるし、また、學校教育の補助形態としての日本語普及を目的とする、いはゆる講習會的活動は、夙に臺灣、朝鮮に於いても行はれてゐたのである。日本語學校の原初的形態は支那事變以前に溯り得る施設である。

しかしながら、明確な國策的意義に於いて一般にその存在が根據づけられ、全國家的背景に於いてその教育活動が推進せられ、また異民族社會に於ける緊急必須の教育機關として確立せられたのは、滿洲事變勃發以降のことであり、支那事變に於いて大陸の一般的事實となり、大東亞戰爭に於いて更に廣範圍に亘る事實

となつたのである。すくなくとも、わが對外的文化工作の當事者及び之に關心を抱く者にとつて日本語學校が一種の明確な學校通念となり得たのは、滿洲事變以後、特に支那事變以降であると言つて差し支へはないであらう。

大陸及び南方諸島嶼に設けられたいはゆる日本語學校の活動を目ざして、中央に於いて敎科書が作られる。敎育資料が送られる。嚴密な國家的銓衡・錬成を經て、敎育者が派遣せられる。かやうな事實は、日本語普及を目睹するわが、國家的意志の具體的な現れであるが、實に近年のことに屬する。

日本語學校は、西方の侵略を排除して、大東亞圏建設のために苛烈なる激鬪を敢へて爲さんとするわが國家的 民族的生命の躍動と共に現出した獨特の敎育機關である。それは、單に國際的 アングロサクソン支配體制下の近代世界に於ける强力なる一異分子たる地位から、日本的世界建設の主體たる自覺と活動に突入した日本の現代が生んだ獨特の學校であり、日本の現代にとつて記念碑的な意義

を帶びる學校ともいへるであらう。

三

日本語學校は、獨得なる學校である。ところで日本語學校の獨得なる性格は、たゞその存在の仕方に於いて、その歷史的意義に於いて獨得であるのみではない。日本語學校の名に於いて把握せられる敎育機關の性格は、甚だ多面的・流動的であり、固定的限界を持たない點に於いて、誠に獨得の學校である。

先づ、日本語學校の名に於いて行はれてゐる著しき敎育施設の種類を若干擧げてみよう。

（イ）夜間學校
（ロ）職業學校
（ハ）專門學校
（ニ）敎員養成施設

（ホ）通譯養成施設
（ヘ）官吏養成施設
等がある。さうして、（イ）夜間學校、（ロ）職業學校といふ形態に於いては、主として社會教育的な活動の部門に位づけられてゐるが、（ハ）專門學校、（ニ）教員養成施設、（ホ）通譯養成施設、（ヘ）官吏養成施設といふ性格に於いては、多く本格的な學校教育の形態をとつてゐる。

詳述の要はないであらうが、夜間學校としての日本語學校は大陸及び南方を通じて、最も著しい例であり、青少年層及び壯年層に亘り各階各域の勤勞者を主たる教育對象としてゐる。この形態の日本語學校が、發生的には最も原本的な姿であり、また數的には最も多く存在する點からして、日本語學校の基本的形態をなすものとも言へるであらう。日本語學校は、夜間の社會教育機關であることに、先づ基本的な性格を持つ。現在、印度支那聯邦（佛領）、泰國等のごときに於いては、この夜間・社會教育的形態としてのみ、日本語學校が發足してゐるのであり、この基本的形態は、日本語學校の性格を把握するにつけて、甚だ重要である。

職業學校としての日本語學校も、また各地に存在する。たとへば、蒙疆・北支・中支に於ける各鐵道會社はそれぞれ組織的なる學校教育を行つてをり、また南方に於いても軍及び商社等が、職場に卽して學校教育的組織を形成して原住民の日本語教育を行つてをるが、これらの事實は、社會教育乃至職能教育としての形態である。名稱については、たゞ日本語學校とのみ呼ぶ場合は寧ろすくないが、鐵道、郵便、海運、その他各産業部門に從事する異民族の資質向上を目ざして、整然たる學校教育の形態をとつて日本語教育が强力に進められてゐる事實は、大陸及び南方に甚だ多い。日本語學校としては、之もまた重要なる形態である。

專門學校といふ性格に於いて存在する例も大陸及び南方に屢々見出される。北

京・上海・昭南・マニラ等に存する日本語專門學校はその著しい數例である。これらは、高度の語學專門學校的性格を持ち、多くそれ〴〵の地域の中等學校卒業者を收容する本格的な專門學校である。

教員養成施設　通譯養成施設・官吏養成施設としての日本語學校は、現在明瞭な形態に於いて存在する例は、主として南方の場合、マライ、スマトラ、ジャワ、セレベス等に見出されるが、日本語を專修することが教員たり、通譯たり、官吏たるの第一條件である實質を持つ現實に基く學校教育である。これも、名稱に明瞭な日本語學校の看板を持つか否かを論外にすれば、現在滿洲國・蒙疆・北支等にも見出される學校教育の形態である。

とまれ、日本語學校、若くは日本語學校の通念の中に包含せられる日本語教育施設の種類は、甚だ多樣である。さうして、それ〴〵の形態・性格に於ける日本語學校は、屢々その教育活動の實際に於いて、他の形態・性格に跨る部門を併有

することも稀ではない。日本語學校の性格が、多面的・流動的である事實は、その種類を瞥見しても旣に明かである。

さうして、この種類の多樣性は、また教育內容の多樣性を物語る。

日本語學校である以上、異民族に對して、日本語を語學教育的計畫性若くは語學教育的意圖を以て授けようとする方針が、教育內容を一貫してゐることはもとよりであるが、言葉の教育は單に形式訓練に終り得ないことも事實である。從つて、日本語による樣々の教育實踐が、そこに進行してゐる。

或る場合には、論理的意義に於ける日本的生活の特異性が第一義的に授けられようとし、日本語教育は、倫理的心情の昂揚を結果せしめられようとして推進せられる。日本語教育は、內地の修身教育に近き狀態にまで持ち來らせられる。

或る場合には、行動的意義に於ける日本的生活の特異性が、强く體得させられようとし、日本語教育は、體育、身體訓練と强力に結びつく。

また、倫理的意義行動的意義の兩面を統一的に意織して、日本語教育が、日本的躾・日本禮法の體得を絶對目標・並立條件として推進せられる。

或る場合には、日本語教育は、完全に職能教育の基本的形式となり、各職能の育成に肝要な言語訓練に沒頭する。

とにかく、日本語教育は、言語と生活との體觀を基盤とし、また各職域に於ける專門的人材養成の要求に卽應し、且いかなる場合に於いても大東亞建設に必要な原住民の要員の育成 は日本語を習得せしめることを絶對に 必要とする自覺から、樣々の教育内容と共に、樣々の教育内容として具體化せられ、展開してゐる。

かくして、日本語學校の教育内容を、一義的 固定的に捉へることはできない、日本語學校からは、樣々の大東亞人材が輩出すべきであるし、また輩出すべき筈なのである。

日本語學校は、その教育内容の多面性 流動性乃至はその茫漠性の故に、甚だ

獨特な學校であると言へるであらう。

四

教育内容の實際に於いて顧るとき、日本語學校は、甚だ多面的 流動的であり或はまた茫漠たる性格を持つと言へる。

さうして、この流動的にして一種茫漠たるこの性格は、いふまでもなく日本語學校が發生的に新しい學校であり、また大東亞建設の政治的現實が刻刻に進行する過程の生み出す學校で、ある意味に於いて、常に歷史的に新しい學校である事情に基くであらう。しかしまた、かやうな成立根據に基く點からのみではなく、大東亞建設を推進する營みの一として、日本語教育が果すべき役割及びその教育本質からして、當然その實踐範圍及び内容は廣汎にして多層的ならざるを得ないのである。日本語教育は、大東亞圈確立のための基底的地盤を異民族の生活に與へる役割に在る。卽ち、先づ日本語が大東亞共通語たるの現實を、異民族社會の

間に成立せしめ、大東亞アウタルキーの組織を堅確にする機能を持たなければならない。これは、日本語教育を形式的社會的に捉へてみた場合の見易い役割であるが、より内面的に個別的に考へてみれば、いふまでもなく、日本語教育は、大東亞圏建設の基本原理たる「萬邦ヲシテ各〻ソノ所ヲ得シメン」とするわが肇國精神を、その活ける具體性のまゝに内藏し、形成してゐる日本語を授けることであり、從つて異民族の精神生活の中に新しき大東亞建設の意義と必然性を眞に自覺的に能動的に體得せしめる通路たるべき責任にある。抽象的觀念としてでなく生活の活きた現實として、具體的に八紘一宇の精神を身につけしめることをその教育的本質とする。

かやうに考へると、日本語教育が、單純に語學教育としての技術的體系を整へることのみで終る筈はなく、さまざまの生活的具體性と結びついて行はれること限りなき日本的生活、日本精神の内容を會得せしめるやうに導くことの必要は、

敢へて指すまでもない。かくして、日本語學校は、固定的なる教育内容に終止することなく、流動的なる性格を持つことは當然である。

しかしながら、日本語學校の流動的性格・茫漠たる性格は、別の側面から觀れば、特定の教育目的によつて强力に組織されたそれ〴〵の學校に分化する以前の、暫定的・未分化的學校と考へることもできる。本格的な職業學校・語學專門學校・師範學校・通譯養成學校・官吏專門學校・等々として、明確な一元的目標によつて統一せられた教育體系を確立する以前の、臨時的・恣意的な教育機關として考へることもできる。

さうして、こゝに日本語學校の展開しゆくべき一つの方向があり、かやうに必然的なる自己脱皮によつて、より明確にして、專門的な大東亞人材の養成機關に成長しゆくべき教育基盤たるの實を致すことに、日本語學校の現實的使命もあるわけである。さうして、かやうに日本語學校が發展し成長しゆく事實も、屢々

見られるのである。

それならば、日本語學校は、すべてかやうな職能的乃至は學術的目標の明確化によつて、他のより明瞭な學校形態に成長しゆくべきであらうか。暫定的・臨時的位層に於いてのみ、日本語學校の特色なり使命が認めらるべきであらうか、或は、夜間學校としての補助的社會教育機關たる比較的脆弱な形態に於いて存する以外に、日本語學校は恒久的位層を持ち得ぬのであらうか。とにかく、日本語學校の發展しゆく方向は、社會生活上の機能及び能力の賦與を第一義とし、日本語敎授を從とする學校への成長にのみあるのであらうか。日本語學校の强化・育成は、かやうに日本語學校の解消に向かふことになるのであらうか。

五

もとより、日本語の普及は、日本語のために圖らるべきことではなく、大東亞圈建設の根柢を鞏固にせてがための敎育的營なみである。從つて、いはゆる日本語學校が、日本語學校以外の、或は以上の學校に成長しゆくことは、文敎工作の進展を示す例でもある。それは日本語學校にとつて喜ぶべき事例でもあらう。

しかしながら、日本語學校はかやうに自らを解消しゆく方向にのみ發展の道を見出すべきではないと思ふ。日本語學校は、自らの日本語學校たる獨特の性格を深切に認識することによつてその獨得の性格の維持と、いはゞ自らの內部への方向に於いて、發展・擴大の道をも見出すべきであらうと思ふ。

先づ、第一に、日本語學校は、政治的條件を異にする大東亞各地域に一貫して共通に存在する獨特の敎育形態であることを體認し、その存在理由を自ら重しとしなければならない。

詳論を避けるが、大東亞諸民族共存團結の新東亞は、いふまでもなく、日本的東亞であらねばならぬ。大東亞圈は、日本が歷史的主體たるの自覺と責任と生命

力によつて確立せられるのであり、アングロサクソン社會の原理に代ふるに、皇道精神に貫通せられた日本的東亞たることを骨格とする。日本的東亞とは、もとより各異民族の傳統と民族生命とを生々躍動せしめる礎地の形成を指すことであるが、かやうな大東亞圏の基礎構造を現實的に堅確にするためには、各地域に共通な文教施設が必要である。しかも、眞に異民族の日常生活に近接し、異民族の魂を眞に直接的に把握し得る施設並にその協同が必要である。

各地域を通じて日本語學校が存在することの重要なる意義がこゝに在る。さうして、各地域の日本語學校は今後次第に全域的なを連鎖・協力と、それを可能にする組織化とに發展の方向を見出すべきであらう。各域地の歴史的・風土的・民族社會的特殊性を重視することの必要はいふまでもないが、新しき東亞圏を確立するための活動には、また北もなく南もなく、醇乎たる皇道精神の光被による統一が肝要である。共通の日本語學校の嚴存はその基地をなすであらう日本の發展

がいみじき連絡の上に更に望まれるのである。

第二に、前述の點にも關することであるが、その收容する教育對象の故に日本語學校はその重要性を特に意識しなければならない。

日本語學校に學ぶ學習者の多くは、勤勞青壯年層である。勤勞大衆である。さて大東亞圏は、これまた大陸たると南方たるとを問はず、勤勞大衆若くは勤勞精神に徹したる人士の不撓不屈の勤勞によつて、砲煙と土煙の群立の中に次第に建設せられゆくのである。安易な傍觀や、贅澤な諦觀や、現實に遠い博識は、われらの建設努力の盟友ではない。さうして、勤勞の後の疲勞を日本語學校の學習に代へ、頑張りつゝ勉強する青壯年層こそ、われらの親しき友であり得る。彼等の學習の目的が、たとへ屢〻未だに生活的便宜を得ることに限局せられてゐる場合が多いにせよ、彼等勤勞大衆・勤勞人士こそは、われらの盟友たり得る。彼等に日本語教授を通じて、功利的學習意慾から大東亞的心性の獲得へ向はせしめるこ

とは、寧ろわれらの責任、日本語學校の偉大なる教育場面ではないか。

とにかく、勤勞靑壯年層を主たる對象としてゐる點に於いて、日本語學校は、正に今日的及び明日的意義を持つ有力な學校である。

第三に、日本語學校は、日本語を授けること、日本の言語生活・言語文化を授けることを、第一義唯一の目標とするが故に、最も本格的な日本的生活・日本精神を日常性に於いて傳達する機關であることを、更に更に深く自覺すべきであるさうして日本語學校の發展する方向は、この日本語教授を通じて日本的なるものを生活的・具體的にに把握せしめる創意と工夫を活潑ならしめることに於いて、無限に高く遠い道を望見させる筈である。

獨得なる性格の日本語學校は、その全東亞的なる存在に於いて、その教育對象に於いて、その教育目標に於いてそれ自身發展しゆくべき立場に在る。さうして、その發展方向を、試みに具體的に言へば、日本語學校卽ち日本生活學校或ば

日本語學校卽ち日本學校といふ性格を具現することとなるであらう。

第二　國語生活の刷新

大東亞戰爭と國語生活

一

私達の愛ぐし美しき大和の國が、大和の國ぶりを原理として、近代世界史の絕望的事實を克服し世界史に於ける可能的未來を生み創りなす主體となつた。私達のこの國土に國初このかた語り繼ぎ言ひ繼がれて來た皇道精神――精神といつても、徒らに煩瑣で分析的な、活きた人生のさながらに示す大らかな道筋を喪失するやうな精神ではなく、現實の內藏する秩序、論理を超えた活ける秩序を、その活潑々地の働きのまにまに促へようとする精神――抽象に墜することなく、神秘主義的虛無に陷ることなく、あらゆる「事」を、一切の現實を、太古さながらの

豊けき統一を指標として、無限に理想的景狀に昂めゆく生々溌剌たる精神、皇道精神を中軸として、私達日本臣民がみな日々のいとなみに世界史革新の激しい努力を續けることゝなつた。

さうして、かうした私達の努力は、日々の生活の上に、今はつきりと現はれつゝある。またかうした私達の決意は、日々の生活事象を見つめつゝ、まだまだ革むべきことはないか、革むべきことは皇道精神の傳統に立つてもつと根本的に革めようといふ志に向ふ。

その一例として現在の國語生活に現れてゐる事象の若干を採りあげてみ、國語生活に於いて私達の志すべき根本を少々考へてみよう。

私達が今お互ひに話しあひ、書きつたへてゐる國語の有樣、また國語について言はれてゐる問題をぢつと見つめると、誰しも十年ほど前、いな六七年ほど前にくらべて、新しく著るしい事實に氣がつく。

先づ卑近な事實からはじめるとすると、誰しも、新しい言葉がふえたことに目が向ふであらう。「大政翼贊」といふ言葉が盛んに用ひられる。「總力戰體制」といふ言葉が、新聞や雜誌を賑やかにする。

もつと手近かなところでは「隣組」といふ言葉、「常會」といふ言葉がある。「配給」といふ言葉、「生產力擴充」といふ言葉がある。「轉業」といふ言葉、「產業戰士」といふ言葉も、ずゐぶん多く目に耳に觸れる。また「空襲警報」、「準備管制」などといふ言葉、「陸の荒鷲」、「轟沈」などといふ言葉も私達の日常に間斷なく言はれ、書かれるやうになつた。

これらはほんの數例であるが、誰もこれらの言葉なしに現代生活をいとなむことはできないし、これらの新しい言葉によつて凡ゆる部門に於ける生活を戰爭遂行のために力強く進めてゐるのである。

世界に新しい人間生活の秩序を生み出さうとする私達の努力が、おのづとこれ

らの言葉を創り出だし、これらの新しい言葉によつて私達はお互ひに結びあひ、戰時生活を頑張り通す決意を愈々鞏固にしてゐるのである。これらの言葉は、雄大、高邁なる戰爭を闘ひぬく日本國民が國民生活のさまざまの部門に於いて必要とし且使用してゐる言葉である。

さうして、大摑みに分けてみれば、「大政翼賛」や「總力戰體制」また「隣組」や「常會」などは、新しき日本政治について私達が持つ原理と要求との現はれであらう。「配給」とか「生産力擴充」とか、「轉業」とか「産業戰士」とかは、新しき日本經濟の私達の間に生み出だした言葉、私達が新しき經濟生活をいとなむにつけて現はれた言葉であらう。「空襲警報」とか「準備管制」とかいふ言葉、「陸の荒鷲」とか「轟沈」とかといふ言葉については言ふまでもない。

私達の銃後の生活が直ちに武力戰の延長であり、私達はこれらの言葉によつて武力戰の進行に對する覺悟と責任とをはつきりと理解すると共に、武力戰の最前

線に挺身する皇軍のいさをしを讃へ、その勞苦を偲ぶのである。かやうにさまざまの新しい言葉は、現代の國民生活一般の中に、政治的・經濟的・軍事的等々の各部門に於ける日本の世界新秩序建設戰爭の必要と進行とから生み出されてゐるのである。新しい、現代の日本がかやうな新しい言葉を生み出してゐる。

私達は、かやうな新しい言葉の増加に着目するにつけて、主體的立場にしつかと立つて世界新秩序戰爭を完遂しようとする國民精神が、私達の間に湧動してゐることを明らかに促へるのである。

二

更に、私達の目に觸れ、心に響く著るしい言葉を二三採りあげてみよう。畏れおほいことであるが「御稜威」といふ言葉、また「八紘爲宇」といふ言葉、これらはむしろ常住口にし粗末に筆にすることを愼むべき言葉であり、心中に嚙みし

めてゐなければならぬ言葉であるが、とまれ私達の心にいつも切々と響いてゐる言葉である。「天業恢弘」「承詔必謹」といふ言葉「至誠奉公」「盡忠報國」、「忠君愛國」といふ言葉なども、いま常に私達の耳に響き心に感ずる言葉である。そもそも「皇道」といふ言葉が常に私達の心と共に在るのである。

また、これらの漢語による表現のみではなく、いつさう蒼古たる皇國ぶりの言葉、「かむながらの道」「うちてしやまむ」「ことむけやはす」「醜の御楯」「荒魂和魂」なども、私達の生活に切實な言葉となつてゐる。

これらの言葉は、今ははげしい長期戰を闘ひぬきつゝある私達の毎日に活き、國民生活を動かし推し進めてゐる言葉である。これらが、私達の國語生活に深く廣く現れてゐることは、誰しも論の無い今日の著るしい事實であらう。

これらの言葉の現れ方は著るしい。しかし、言ふまでもなくこれらは、決して新らしい言葉ではない。いな古き日本の言葉である。

國史と共に國史の內實として承け繼がれて來た古き日本の言葉である。

今日の國語生活に於ける身近かな事實として、十數年前いな數年前にくらべて、新しい言葉の盛んに行はれることが著るしい。また古き日本の言葉の活きて働くことが著るしい。しかしながら、靜かに考へるとき、この新しい言葉と古き言葉との間には、深き聯關のあることを思はざるを得ない。

といふよりも、日本精神の本質を表現してゐる古くして尊い言葉が、根柢に活きて働いてゐるがために、戰時生活の各部門各階層に於いて、新しい言葉が生まれてゐると傳へられるのである。

戰爭をしてゐる、國民生活の狀態が著るしく變動した。その事實のみが、新しい語彙を增加した、古き語彙を登場せしめたとは考へられない。戰時生活の必要が各部門に新しい語彙を增加し古き語彙を復活する契機になつてゐることは否み得ないが、さうした平面的な解釋だけで納得のゆくことではない。かやうな戰爭

を完遂しようとしてゐる日本の精神、皇道精神の活きた力が、戰時生活の必要を契機として、新しく著るしい言語事象を生み出してゐるのである。國家生命を永遠に護持し、肇國以來の國家理想を世界に宣布しようとする國民精神の躍動が、かやうな言語事象を生み出だしてゐるのである。

日本的世界觀をまたあらためて國民生活の統一原理とし、日本的世界觀にはつきりと裏づけられて實踐に立ち向ふ意志が、國民生活の現實的問題に直接して打ち出してゐる言語事象である。

いふまでもなく、さま〲の言葉、言語的發想が、すべて、大らかな皇道精神に立つ日本人の生活實踐を實現するにふさはしい平明さ、豐かさ、雅びやかさを備へてゐるとはいへない。佶屈な、生硬な、晦澁なかたちも見える。しかし、とにかく新しい語彙の增加、古く尊い言葉の盛行といふ眼前の事象の底に、私達の國語生活が皇道精神によつて統一せられつゝあることを見るのである。

傳統の生命を身につけつゝ、あらゆる現實と取り組んで行かうとする言語意識を見るのである。

三

新しい現實を實現するための言葉については、私達はその發想形式・造語の仕方についてお互に責任を持ちあはなければならないが、決して凡庸なる事務的能率主義・便宜主義になつてはならない。しかも事實に於て、世界史創建のための新しき現實、新しき「事」は國史と共に古い精神・古き「心」を基軸として推進せられつゝある。さうして現代を現實に推し進めてゐる古き言葉のいのちは、私達の何人にも明らかである。

國語についての考案において、新しき現實・新しき「事」を表現するに遺算なからんことを期するためには、當然新しき「事」を推し進めてゐる動力としての

「心」に目を開かなければならない。「事」と「心」との一致は「心」のおのづからなる發展として「事」を表現する「言」となるといふ認識にとゞまるべきではなく「事」を表現する「言」の創造についてその基礎を深く「心」に求めるといふ態度を必要とする。

さうして、このことは古く尊い言葉が私達に今切實に働きかけてゐる一班の事情によつても明らかである。

さてまた次に、いま言葉の身近かな問題として、いはゆる標準語の一般化といふ眞摯な努力が見える。「言」は「心」に發する「行ひ」である以上、この偉大にして嶮峻な今日に於て、國民思想の具體的な統一のためにも、國民教育の根本的なる刷新のためにも國語の統一は强く要求せられる筈である。さうしてこゝに、いはゆる標準語教育の徹底が要求せられる理由がある。

また國語の普及により大東亞の異民族に對し、日本と共に戰爭を遂行する堅確

な生活意識を植ゑつけること、私達とひとしく戰爭遂行のための新しき生活態勢をしつかりと立たせることが必要であるが、それがためにも日本臣民がすべて標準語を身につけてゐることが必要である。

標準語教育は、まことに現代に於て單なる言語教授の方法的な問題である以上に、重要な問題である。然しながら、標準語の概念なり實質なりについての論議は別として、この問題についても先づ第一に肝要なことは、國語の純一を願ひ、純粹なる「雅び言葉」を身につけようとする私達の傳統的な國語意識をいま確立することであらう。「言」を發する以上、「晴れの場」に於ては、「晴れの言葉」を發すべく自ら修めることが言葉のいのちを畏れ愼む私達の祖先にとつて、長く傳統であつた。

「晴れの言葉」は、そのアクセントやイントネーションの習俗的一般性に於ける正確さ、語彙、語法等の形式的な普遍性によつてのみ、求められ努められたの

ではない。

また「晴れの言葉」は生活的な親近性を持つ「俗語」乃至「方言」を全面的に否定しようとする意欲から、求められ努められたのではない。精神の緊張、統一を絶對に必要とする時、處、場に於ては、「心」を常にたけ高き「雅び」の狀態に置く事ができねばならず、またかやうな「雅びの心」を實現し交流しあふためには「雅言」を身につけておかねばならないと考へられてゐたのである。

從つて、古き日本人の言語意識に於ては、標準語とは「雅言」であり、それを身につけることは「雅び心」の體得であつた。さうして「雅び心」は「宮廷ぶり」を憧れる心情であり、本質的に皇道精神であつた。

かやうにして「言」の「雅び」を願ひ求める努力は、言葉の修錬に於て、言語技術より以上に高き「心」の錬成を必至としてゐたのである。それ故に「雅言」による言語生活の統一は、たゞ物理的文法的視野に於ける標準國語の一般化を指

してゐるものではなく、調べ高くたけ高き古典的均齊に於ける「心」の一般化を意味することであつた。

四

かくして、標準語を身につけるといふこと、標準語教育の必要は日常の生活語乃至方言の否定の上に成立し、その故に活きた言語生活から離れた、機械的・劃一的な言語活動の雛型を强制するといふことではなく、國語生活に於て高貴・純潔を願ひ「宮廷ぶり」を慕ふ憧憬を本質とし、わが精神を「雅び」の狀態に昂め保たうとする欣求を中心としてゐたと考へられる。

「雅言」への修練は、活きた生活から遊離した標準語的な言語習慣の形式を把へるいふことと「晴れの言葉」を裝飾的に身につけるといふ努力ではなく、言葉の修練に於て、日本人としての生活をより高く保たうとする志であつた。標準語修錬

といふ「言」の問題は、即ち「心」の問題であつたのである。

いま私達が標準語教育の必要を認めるにつけても、それが「心」の問題であり、日本人として精神の錬成、生活の向上にその本質的なる意義の存することを思はなければならない。「言」の錬磨を通じて「心」の錬成を致すこと、そこに標準語教育の展開しゆく指標がある。

さてまた、この問題とも關聯があるが、最近特に言葉の躾といふことが、多くの識者に採りあげられてゐる。

國語の使ひざまに保たるべき秩序は、日本人の生活に於ける秩序の表現に外ならない。たとへば長上に對する言語の使ひざまが亂雜であり、女性が男性めいた言葉遣ひをして平然たる有様だとすれば、日本人としての生活秩序を離脱した「行」に至るべきは、事の自然であらう。私達の「行」は皇道精神を根柢とする生活秩序に即し、支へられ、その發揮でなければならないのである。

それがためには私達の「行」を、その都度私達の行爲に即して矯め直くしてゆくことも考へられるが、また「言」が「心」に根ざし「行」に表はれる關係を凝視して、言葉の使ひざまに於てその歪曲・亂雜・未熟を矯め直してゆくことも必要である。言葉の躾をしつかりと續けることによつて、より若きものより未熟なるものの言葉遣ひを正しくし、心構へを正常に保ち、かくして起居振舞を整齊・高雅に至らしめようとしたことは、これまた古くより日本の家庭教育に於る重要な課程であつた。ひとり家庭のみならず、社會生活に於いて「物のいひやう」言葉の使ひざまを訓練する環境が存したのである。

今日、言葉の躾を徹底することによつて、私達の國語生活に秩序を保つことが、いかに重要であるかはいふまでもない。言葉の躾は「行」の躾であり、「心」の躾である。秩序の感覺を失ふとき、皇道精神の中樞は體得せられず、日本人としての生活は根柢を失ふ。言葉の躾によつて「言」と「行」と「心」とを貫いて

秩序の感覺を育成することは、國語生活に於ける基本的な問題である。
今日の國語生活に於て、身近かに認められる事實・必要・問題の二三を右に擧げてみた。私達は新しき言葉の激增、古き言葉の復活を見た。標準語教育の必要を見た。言葉の躾の提唱を見た。
さうして私達は、そこに偉大なる世界史革新のための戰爭生活を强力に推し進めてゐる皇道精神の湧動を見た。またそこに言葉の問題が「心」の問題であり、日本人としての精神錬成を指標とする所以をも見た。言語生活に於ける秩序の維持によつて日本人としての行爲の秩序を保持しようとする志向を見た。
私達はこゝに國語生活を革新し醇化する仕事の基調が見出されるやうに思ふ。私達の生活を最も根柢的に支へつゝ推し進めてゐる精神の道統にはつきりと立つて、革新も醇化も考へなければならない。一切の問題は、日本に於ける言語修錬の傳統を中軸にして解決しなければならない。

何よりも先づ「言」は「心」の問題として、捉へられ考へらるべきである。日本人の「心」の問題として捉へられ考へらるべきである。

十八・十

國語學への期待

一

國語の統一が意圖せられ實現せられようとしてゐる。國語の異域への進出が要求せられ、努力せられてゐる。今日、國語に關する私達の努力は、大摑みに分けると右の二つの主題を中心として活潑にいとなまれつゝある。そして、これらの主題が或は國語政策上の課題として、或は國語教育上の問題として、考察せられ解決せられようとしてゐる。まことに國語政策の確立とその組織的なる滲透、國語教育における目的觀の明徹及び方法の刷新は、現代において最も切實な課題の一つである。現代に於ける文化的な仕事のうち、最も切實なる課題の一つであり、更にいへば、たゞに文化問題である以上に、國民生活における最も基本的なる課題の一つであらう。

今日、國語の問題を、政策的視野に於いて捉へる探究と營爲、教育的領域に於いて捉へる反省と建設との、益々聰明に强烈に推進せらるべきは、いふまでもないのである。しかしながら、政策的視野に於いても教育的領域に於いても、私達の言葉、國語現象を、私達の生活事實から遊離して國語といふ形式觀念を對象として捉へることとではならないのである。私達日本人の發想形式に於ける抽象的な一般性、觀念的な整理を經た上での言語的なる形式を對象として捉へてゐるといふことではならないのである。

「言葉」の問題は、いふまでもなく直ちに「心」の問題であり、「言葉」の問題の成立する根據は「事」と「心」との結合・交錯に在る。從つて、言葉の問題を採り上げる根柢は「心」の問題として透視する叡智と、「事」の問題として把握する感覺とを必須としなければならない。國語の問題は言葉の問題でありつゝ、また言語形式以前の乃至は言語形式以上の問題なのである。

性急の言方を怖れずに割り切つてみれば、國語の統一とは、國民思想の統一を根柢とし、また目標とする仕事であらう。私達の生活は、具體的に、全體的に、國語生活であり、國語の統一、國語生活の統一とは、私達の生活主體たる思想、日本人の「心」の統一を根柢的な意味とする。國語の統一とは、私達の生活主體が日本的心性によつて遺憾なく統一せられることを意味する。また、國語の進出といふも、根本的には日本人の「心」・「心の働き」が日本的心性の發現してゐる「働き」と「姿」とが異域に移植せられることを意味してゐる。

もちろん、國民思想の統一といひ、日本的心性の移植といふも、活ける生活主體に切り込んだいはば肉體的な事實としての統一であり移植であることを目ざす點に於いて、始めて言葉の問題となるわけであり、觀念的な國民思想の統一、日本精神の進出を志向する形式主義は、決して言葉の問題に於ける對象把握の基本的な用意を示すことではない。

かやうにして、國語政策や國語教育に於ける探求や建設を意圖するにつけても、國語そのものの把握の仕方が問題であり、私達日本人の心の働きとしての國語の把握が問題である。國語が、日本人の國語としての具體性のまゝに、その本質の把握せられることが根柢でなければならぬ。もちろん、かやうな國語の本質の解明や把握が直ちに可能なわけではなく、むしろかやうな用意に立ち、それぞれの國語の問題に關する現實的要請にぶつつかりつゝ探究するところに、國語の本質は、より深く解明せられ、より的確に把握せられゆくことにもならう。

そして、こゝにこそ、今日、國語學への期待の切實なる事情がある。國語の本質を、日本人の具體的な國語生活の實質を緻密に確實に解明し、國語問題の聰明なる解決に根柢を供與する動力として、私達は國語學への期待を切にするのである。

國語觀の確立、國語史の解明、現代語の分析等々について國語學の業績は着々

として進みつつある。山田孝雄博士や時枝誠記教授、橋本進吉博士や湯澤幸吉郎氏、遠藤嘉基氏岩淵悦太郎氏また佐久間鼎博士のごとき方々の仕事を想起するだけでも、この時代の國語學が、國語の的確な把握について寄與するところの大きさはいふまでもない。しかしながら、いはゞ國語學の局外者たる私達の國語學への期待は益々大きくして切である。國語學は、いはゞ國語學内部の問題として、學的、方法的體系の組織統一の要求を解決し、國語の學より日本の言語學の成立に至り、或はまた歴史的事實のより詳細な探求整理により國語史の搖ぎなき完成に至らうとすること等々、自らの課題の重くして多き數々を有するであらう。

さうして、同時に國語學は、いはゞ國語學外部の問題として、國語生活の統一從つて國民思想の醇化統一を志向する實踐について、最も堅確な一つの基盤を提示するに至るべき課題を有するであらう。國語學が、深く日本的政治に結びつき、その基礎に寄與するに至ることこそ、私達の最大の期待である。

十八・八

國語問題への用意

一

言葉は、あへて詩人の魔術的思惟を俟つまでもなく、空氣や水や、凡百の植物や動物のごとき存在ではない。言葉は、觀念論者をして凱歌を奏せしめようといふわけではないが、私達の內なる生命に存在の根據を置くものと規定すべきである。言葉は、行爲である。そして、言語行爲の主體を離れて言葉を分析しようとするとき、言葉は既に雲散霧消して、觀察者の前には、僅に言葉の屍が橫はつてゐるにすぎぬであらう。自然科學者が、もし一念發起して言語學者にならうと志すならば、彼は先づ、所謂自然科學の方法を捨離して、徹底的に親愛する者と徹底的

に親愛の言葉を交し、徹底的に憎惡する者と徹底的に憎惡の言葉を交し、さて靜かに凡そ科學的といはるゝ思考の構造を徹底的に反省することを以て捷徑とする。

次に、哲學者が言語學者たらんとする悲願を抱くならば、彼は先づ、凡そ言葉といふ具體的な存在の背後には、抽象的一般者なるものは絶對に存在しないことについて、明確な諦念を持つ必要がある。言葉・言葉・言葉。把捉したり、認識したり、分析したり、ましてや整理しようなどと思へば、誠に厄介な、そして嚴肅な實在である。途は、一つ。――言葉について考へようとする自らの内に、言語主體をはつきりと意識することだ。それが、一切の始發だ。それが、一切の、言葉に關する本質的思考の起點である。

人間は、一般に自らの内部に存在の根據を置くものを容體的存在として觀察し得る不思議な能力を持つ。言葉の如きに關しても、然り。正に人間に於ける認識能力の健在を謳歌すべき事例である。

しかしながら、自らの内なる生命とのつながりに多くの顧慮を拂はず、若くは全く無關係に内的生命の外的自己投出の委相を取扱ひ處理しようとするとき、そこにはむしろ人間の悲劇が生じ得ることを思はなければならない。人間の發明した藥品が人間を殺し得るやうに、人間の認識能力が人間を自殺せしめるおそれの存することを思はなければならない。

二

自らの言葉について反省することは、自らの生活について反省することである。國語の統一といふことは、國民生活の統一といふことである。言葉の問題は、即ち生活の問題であり、思想の問題であり、倫理の問題である。

自他ともに現代の日本人としての生活を正し、自他ともに生活を最も深い意味に於て豊かにしようとする意慾、身構へがしつかり立たなければ、自らの言葉が

立派になるといふことは在り得ない。國語の統一などといふことは、まして在り得る筈がない。

話をする、話を聽く、——そこには、先づ話方の倫理、聽方の倫理が確立してゐなければならない。自分の世界を紙に書きつける。他の世界を本で讀みとる、——そこには、綴方の倫理、讀方の倫理が確立してゐなければならない。國語は、日本人の相互が自らの世界を開きあひ、交はしあふ行爲として成立してゐる以上、國語生活の倫理が確立してゐなければ、國語が眞の意味に於て國語で在り得るわけにはゆかぬのである。

親が子に話す、子が親に話を聽く、——その場合には、親子としての具體的な言語行爲があるばかりである。抽象的な人間一般が話し、聽いてゐるわけではない。親としての話方、子としての聽方があるばかりであらう。その言語行爲を正しい姿で實現する最も根柢的な條件は、國語の社會的な約束と共に、いなそれ以

上に、生活的な倫理である。

女は、動物的自然性に於ける女の言葉を話すことによつて、女の言葉を持ち得るのではない。女の生活に於ける倫理を確立することによつて、はじめて具體的な女の言葉が實現するのである。

國語について反省することは、先づ國語生活に於ける倫理に目を開くことでなければならない。さうしてこの倫理性の成育するに從ひ、國家としても個人としても、國語の將來は、現實に於てより豐かになるであらう。統一を示すに至るであらう。

三

批判のないところ、もとより創造はない。私達の國語生活についても、批判や反省の行はれないときには、正しき國語の狀態は生まれる筈がない。すくなくと

も、今日及び明日に於ける、愛ぐし美はしき國語の狀態は創造せられないのである。

さてしかし、批判とは愛に根ざし、價値の發見と確立に向かふ精神である。國語についても、批判や反省は、正に深切なる國語への愛より發し、高邁なる國語の發見を志すことでなければならない。愛することより發見することへ、この切實なる心情なくして國語を論じ國語を考へることは無意味であり、僭越である。

いかばかり、國語の語法の亂雜晦澁のみがとなへられたことか。

いかばかり、國語の表記の錯雜・困難のみがとなへられたことか。

豈圖らんや、國語について反省し批判する資格の充分ならざる心情に於て、多くはそれが放談せられてゐたのである。わが父に、わが母に、或はわが子に對して、欠陷のみを指摘する心の動きがあるとしたら、それは健康な精神であらうか。よき家、よき國をつくり出さんとして發する反省や批判は、根柢に於て肯

定の愛に溢れ、發見と確立への敬虔なる努力が貫通してゐる筈であらう。國語は單に國語の知識を以て、批判し得るものではない。國語體驗の眞摯なる把握があつて、國語知識もはじめて成立し、從つて國語への批判をもなし得るのである。

たとへば、國語に於ける敬讓語は、たゞに國語の本質の亂雜晦澁を示す徴表であるのか。文字の多種性、表記法の繼承性は、たゞに國語表記の錯雜困難なる性格を語る事實であるのか。

單純が便利であり從つて進歩であるとする機械論は話の外である。合理的性格が高邁であると考へる近代的凡庸主義なら、言語がそもそも本質的に非合理的實在であることを反省してもらへばよからう。

批判と發見、私達が國語について思ひ努めるときに、自らを正して凝縮すべきはこの點である。

四

何事によれ、私達の生活に現れるくさぐさの問題については、これを研究調査する場合にも處斷する場合にも、綜合的視野が必要である。綜合的視野の裏付けがなければ、研究や調査は、抽象的・分立的となり又骨董癖・自己陶醉に陷る。國語の整理統一といふ仕事に決斷は、一面的お坊ちやん的となり趣味論に陷る。國語の整理統一といふ仕事についても、正に綜合的視野が肝要である。例へば、——

送假名の統一の問題である。

國語の書方の最大公約數的現實は、漢字と假名とを、交へて表記することである。そこに、視覺に訴へて直接に意味表象を喚起する機能と、主として聽覺に訴へて意味表象を心理的事實に再現させる機能との複雜にして多層的な、表現效果がある。そこで送假名統一のための研究調査は、この效果的にして多産的な現實を、その構造の精緻なる故に却つて混亂・不統一に墮せしめ易き怖れを排除して、あくまでも效果的・多産的にするといふ態度を根柢として考察されなければ

ならない。その肝要な點を忘却すれば、送假名の統一は、機械論か趣味論に陷る。元來、送假名の問題といふも、漢字の使用度に一定の計數を劃することはできず、また假名のみを以て表現する道（國民學校初學年の兒童の假名による綴方を以て國語表記の誤れる形式とは言へぬであらう）が選ばれたならば、既に問題そのものが消滅するのである。送假名の統一といふごとき部門的なる問題に對しても、視覺的影像と聽覺的心像との綜合的效果を完全にし統一するごとき統一的一方案を考慮し綜合的視野に立たなければならぬ。しかも、一層綜合的な考へ方をすれば、既に問題そのものが、本來一定の限界に於てのみ存在し得るにすぎないのである。

漢字の音訓の統一は、やがて假名遣ひに關聯し、分別書の問題は、その根本に於て漢字の使用度に關聯し、句讀法の劃定は、やがて文體の性格に關聯する。さうして、それぞれについての的確な解決には、問題そのものについての沈思研究

と共に、その關聯する範圍や問題の愼重なる測定・斷案を用意しなければ到達できる筈がない。綜合的視野の必要なるは國語問題の個々の主題について、正に深切である。しかし國語問題のごときは、本來、國民生活の全體を背景とすることであり、國語の統一は卽ち國民の精神生活の統一である筈なのであるから、綜合的視野の肝要なるは、もとより當然のことなのである。

ともあれ、私達は、國語について考へるときに、綜合的であるやうに努めよう。綜合的視野の缺如による便宜論や、趣味論は、既に過去の國語運動史に讓るべきである。

十八・四

生活秩序と話し言葉

私達の言葉――國語を大事にしよう、國語についてつつましい心構へを持ち、國語の使ひ方を立派にしようといふ考へや氣持が盛になつて來た。それも、文章として結晶した言葉――つまり書き言葉についてのみでなく、私達が毎日學校や職場や家庭で話しあふ生のまゝの言葉――この日常の話し言葉について、國語を正しく美しくしようとする意識が著しくなつて來た。

日本人である以上、遠い私達の祖先から語り繼ぎ言ひ繼がれて來たこの國語を書き言葉・話し言葉いづれの面に於ても立派に保ち、育てようとすることは、當然のことである。また、言葉を切に尊ぶことは、日本人の生活に於て古くからの著しい傳統でもあるから、毎日の話し言葉を立派にしようとする心組みは、何も

事新しい考へではない。

しかし、明治以降の私達の國語生活をふりかへつてみると、得てして國語――殊に話し言葉について、私達の持つべき心構へを忘れがちであつたといへる。西歐の異質の文化なり生活様式なりが私達の日常生活の中に攝り入れられることになつてから、私達の國語生活の上にも著しい影響――影響といふよりも、むしろ混亂が現はれた。もちろん、國語の上に目新しい言葉や言ひ廻しや、新奇な文體が生まれたのは當然の成り行きであり、西歐語の影響の現はれは必ずしも、こせこせとした文法先生氣質で排斥するには當らないが、何としても私達の承け傳へて來た國語を畏敬する傳統的心情を置き忘れたこと、殊に毎日の話し言葉を立派にしようとする傳統を等閑にしたことは、明治大正の世代の缺陷であつた。遠い古はともかくとしても、明治のすぐ以前、江戸時代に於て、私達の祖先は、話し言葉に立派な秩序を保ち、日日の生のまゝの言葉づかひについて、常に自分を

訓練することを、社會生活上の重要な條件としてゐたのであつた。

「物のいひやうを知らない」ことを恥としてゐたのは、强ち武士にかぎつたことではなかつた。國民一般が話し言葉について正しい感覺を持ち、能力を磨くことを努めてゐたのである。さうして明治以降、舶載文明の洪水によつて國語が亂雜になり混亂したことは著しいが、惜しむべきことは、亂雜や混亂の現象そのものといふより國語を畏敬する心構へ、とくに毎日の生活の上で話し言葉を大事にする態度を、私達が置き去りにしたことである。

自分の言葉特に毎日の話し言葉について自分を訓練しようと努めなければ、言葉についての正しい感覺が眠つてしまふ。感覺が眠れば粗雜な言葉を荒れ廻らせるのは當然のことである。

今日、話し言葉を正しく美しくしようと努めることは、遅蒔きながらまことに悦ばしい傾きである。

×

私達は、毎日、いろいろと話をしたり、話を聴いたりして過してゐる。話すことと聴くことなしに、私達の生活を考へることはできない。私達の生活は、大部分が話すことと聴くこととで成り立つてゐるともいへよう。

そこで、話すこと、聴くことを立派にするといふこと、私達お互の話し言葉を正しく美しくするといふことが、私達の生活を立派にするのに、直接な強い力のあることが思はれる。逆にいへば、私達の毎日の生活を正しく、豊かにする一番手近かな、しかも最も有力な方法の一つは、私達が、お互ひに立派な話しやう、聴きやうをするといふことであらう。よく私達は、「話せばわかる」とか、「物もいひやうだ」とか、「話せる人だ」とかいふ。かうした言葉には、いろいろ複雑な意味もあるが、とにかく、私達の話しやう、聴きやうが、お互ひの心を通はせあふ上に、どんなに重い役割を持つてゐるかを意識してゐる言葉である。話し

言葉を正しく美しく保たうとすることは、今日のやうに、私達が深く理解しあひしつかりと團結しなければならない戰時下の生活に於て、殊に大事なことであらう。

また、私達お互ひが、毎日の接觸交情の上で話し言葉を立派に保つことに責任があるといふばかりではない。話し言葉に正しい秩序と美しい樣式が生まれて始めて、高く美しい國語文化、文學や演劇やそのほかの國語藝術が立派に磨き出されても來るのである。いや、たゞ國語文化ばかりではなく、日本の文化全般が立派になつても來るのである。

話し言葉を正しく保ち、育てるといふことは、毎日の手近かな生活に、秩序と統一とを生み出すことになる。正しく物を言ふといふことは、自分の考へをいつもよく錬り、整々してゐなければできない。また、正しく事を聽きとるといふことは、自分の心からつまらぬ我意やこだはりをとつてゐなければできない。自分

の考へがきちんと立ち、謙虚にして大らかな心を持たうと努め、さうしてまた、その時その所、その相手に對してふさはしいふるまひが備つてゐて、始めてできるわけであらう。つまり、毎日の手近かな生活を大事に、叮嚀に運んでゆく心構へがあつて始めてできることである。かうした心構へと努力があれば、日常生活のすみずみにまで、いつも秩序が立ち、統一が保たれるといふことになる。さうして話すことによつて自分を表現する能力、聽くことによつて他のものを理解する能力が、いつも鍛へられるいふことになる。

生活に秩序が立ち、統一が保たれてゐるといふこと、さうして表現と理解の兩方でいつも生き〳〵と生が進められてゆくといふこと、こゝには、いつも正しく新しい生活が生まれる。それは、いつも新しい心持や、生き〳〵とした考へを生み出す生活であり、物事の正しい姿や深い意味を見出す生活である。つまり、新しい高い文化を創り出す生活である。

毎日の話し言葉を正しく美しく保ち、育てることは、言葉だけの正しさ、美しさに終らない。それは、私達の生活を、ごく手近かなところから、しつかりとした體制に組み替へてゆくといふことになる。身の廻りの生活を、そのまゝで美しくしてゆくといふことになる。

研究室で試驗管を相手に實驗ばかりしてゐても、偉大な科學的發見は生まれない。繪筆片手に畫布に顔つき合はせてばかりゐても、傑れた繪は生まれない。本を讀んでゐるばかりでは、學問にはならない。日常の、ありのまゝの生活が、秩序正しくとゝのひ、凡ゆる物事にふれて、正しい表現と深い理解のできる生活態度が立つてゐなければ、科學も藝術も學問も生みだすことはできないのである。

かうした體制や態度が私達の生活にきちんとでき上ることが、一切の文化を生む根本であり、時々刻々に交へあふ話し言葉が、いつも正しく美しく保たれゝばこの根本をしつかりさせるといふことになる。

かうして、話し言葉を大事にすることは、國語の傳統に對して責任を持つことであるばかりではなく、今日の生活全體を正しく美しく、たしかにするために肝要なことである。

×　　×

毎日の生活をしつかりと豊かにするために、私達はお互ひに、話しやう、聽きやうを立派にしよう。お互ひの話し言葉を磨かう。

ところで、このことは簡單のやうでゐて、實は大變難しいことである。美しい文章を書いたり、味はひの細やかな詩や歌を書いたりすることよりも、或はずつと難しいことかも知れない。

もちろん、話しをするには、言葉の發音や抑揚、使ふ一々の言葉、言ひ廻し等を正しくするといふことが肝要であるし、ひとの話を聽くには、よく耳を澄ませて、聞き洩らさない注意が肝要である。それだけでもなか〱容易なことでは

ない。

しかし、難しいといふのは、話しやう、聽きやうを立派にするのに、かうしたいはゞ技術的な修業や注意だけでは充分でないからである。立派な話しやう、聽きやうとは、聲樂の練習や聽覺の訓練といふやうないはば技術的な骨折りばかりで、實現できることではないのである。その上に話をするとき話を聽くときの心の持ち方が大事な問題となるのである。

いつたい、話をするといふことは、たゞ自分の考へや感じや心持を、外にさらけ出すといふことではない。それらを、相手の人にしつかりと理解してもらふやうにするといふことである。また、話を聽くといふことは、ひとの話を、知りたいところだけわかるところだけを、自分勝手に理解するといふことではない。そのひとが言ひ表はさうとしてゐる思考や感情を、そのまゝ正しく理解するといふことである。或は言ひ表はしたいと思ひながらも充分に表現できてゐないところ

まで、深く理解するといふことである。

話方の技術が巧みであり、聽方の感覺が澄んでゐるだけでは、立派な話しやう、聽きやうにはならない。相手にしつかりと理解してもらへるやうに傳へる、相手がすつかり理解できるやうに心がける、それが立派な話しやう、聽きやうの根本條件である。

そこで、立派な話し言葉を交はすにつけても、それには私達の心を磨かなければならぬことが思はれる。すくなくとも、相手の身になつて相手の心の中に自分を置いて考へてみる思ひやり、やさしさが、常に私達の心に備つてゐなければ、立派な話しやう、聽きやうはできないであらう。

毎日の、凡ゆる瞬間に、私達の心が相手に向かつて明かるく開かれてをり、常に相手の心を深く思ひやりつゝ話をし、話を聽くといふこと、これはまことに容易なことではない。「かう言つてゐるのに分つてくれないのか」といつた相手の

わがまゝな注文や、「分るやうに話せばよいのに」といつた身勝手な不平にこそ陥り易いが、聽く身になつて話をし、話す心になつて話を聽くといふことは、私達にはなか／＼できかねる心の修業である。

しかし、かうした心がけの足りないために、私達の生活にどれほど多くの誤解や不和が生まれることであらう。誤解や不和まではゆかずとも、どれほどお互ひの傳へあひたい物事が、薄つぺらに、いゝ加減に、承けとられてゐることであらう。また、どれほど仕事の進ませ方に、餘計な手數を必要としてゐることが多いであらう。私達は、骨は折れても、話し言葉を磨き、洗練する努力をしつゝ心を磨き、練る修業を積まなければならないのである。

× ×

言葉を磨くことは、生活を正しくすることになり、また心を練ることになる。またさうしなければ、言葉の磨き上げられることはない。

古い昔の日本人は、いつも「言葉の雅び」を願ひ求めた。雅びは、宮びたる大宮ぶりの生活への憧れであり、「雅び言葉を願ふことは言葉について朝廷を慕ひまゐらせることでもあつた。言葉を典雅に保ち育てようとする國語生活の傳統は、日本人の最も本質的な生活態度、大君への忠誠といふ精神のひとつの具體的な表はれでもある。

私達は、日常の生活に於て話し言葉と話す心を洗練し、私達の生活全體を「雅び」の狀態にひき上げることを努めたい。身近かな生活に於て、日本の尊い國がらを、豊かに高く現はすことを努めたい。

話し言葉を「雅び言葉」に育てようと努めてゆくとき、私達は、今日の國民生活全體を、いつそう立派に、仕上げてゆく道に、いつそうこの國がらの尊さを現はす道にしつかりと立つことになる。毎日の、身近かな生活が、そのまゝに、日本の國がらの尊さを現はすことになる。

話し言葉の洗練は、決して小さな事ではない。

十八・七

國語と思想

——心といふ言葉——

何ごとについても、人生に於て最も大切な、本質を射當てた思想は、單純簡素な言葉に結晶してゐるのが常だ。いかに複雑な思索の徑路を經てゐるにしても、究竟の高みに達し、時々刻々生きて働くいのちを獲得した思想は、常に明快な、完結した言葉となつてゐるものである。複雑な思考がたゞに複雑な言葉でとゞまつてゐるかぎり、その思索は、まだゆきつくところまでゆきついてはゐないともいへる。それは、思索・思考のいとなみではあつても、そもそもまだ思想ではない。思想は、言葉として在り、言葉として生きて働く。さうして、言葉が生きて働く深さに達してゐるときには、言葉は必ず端的に他の心胸につき入る單一性を持つてゐるのである。

複雜晦澁な思索のいとなみが、刻々に自己脫皮と自己透明を努めて、一段々々と自分の一切を綜合し棄却し統一の狀態にせり上つてゆくと、つひには强靱な思想が錬りあげられて來る。簡素な、ぬきさしならぬ言葉が打ち出されて來る。

このやうなゆきついた思想――生活の知慧としての思想は、いつでも開放的で、誰でも內容のどこまでも入つてゆけるやうな性格を示してゐる。難解な論理で門前拂ひを食はせるやうな顏つきは決して見せない。どこから切り込んでいつても切り込む人間の力倆とその生活の重量に應じて、理解できるだけのものを與へてくれるのである。その思想の額緣になつてゐる言葉、いやその思想それ自身としての言葉が、いつも萬人向きで、思はせぶりや身勝手な現れ方をしてゐないからである。誰も彼もが、齒切れのいゝ、やさしい言葉によつて、たやすく思想の實體を掘れたやうな自信を持たせられるのだ。

しかし、實はこゝが曲者、謙虛に考へてみねばならぬところだ。やさしく、高

く、本質を射當てゝゐる言葉。これこそ實は最も難解な言葉なのである。日常性のまゝの言葉であり、或は論理的に根掘りしてみることのさして必要でない言葉である。從つて容易にすつかり理解できると考へるやうな低能は、問題の外である。しひて晦澁な言葉の操作によつて思索の怠慢を蔽はうとしてゐる卑怯な話術に接して、これを難解と考へる低能も亦、もちろん問題の外である。思想のやさしさ、むづかしさとはさうしたことではない。

話が橫道に外れるが、近頃の「わかりよく、やさしく」といふ言葉についての主張には、「事務能率の增進」といふ觀點・日常生活の實務的側面に於ては當然の理由があるといへるが、精神生活の表現・表出に對する要求としては、警戒せねばならない凡庸主義が認められる。偉大な信念や思想は、そのやうなたゞ「わかりよくしよう」といふ目的意識とは無關係に、自づと「わかりよく、やさしい」一姿に到達し得てゐるものなのである。

さうして、この様な統一に達してゐる思想に接して、上述の如く單純に「わかつた」、「やさしかつた」と思つたならば、それこそおほけないことである。深いのである。高いのである。わかり易く見えて、實は凡庸な生活では捉れないむづかしさなのである。謙虚に自分の生活をぶつゝけてゆかなければ、平明玲瓏な言葉の意味のひろがりは決して見透せはしないのである。

ことの本質を的確に啓示する思想は、單純簡素な言葉に結晶し、完結する。このことは日本人の精神活動に於て、特に著るしいやうに思ふ。さうして、本來言葉の性格は卽ち精神活動の構造・性格を示すものであらうが、平明卽深遠ともいふべき意味的ひろがり、包攝内容の豐かさが日本の言葉に屢〻見出されるやうに思ふ。

一例をあげてみよう。和歌についての思索に於て、最も的確に本質を衝いた思想は、畢竟「古今集序」の、

やまとうたは、人のこゝろをたねとして、よろづのことのはとぞなれりける

といふ明快な言葉に一切がつきるといへるであらう。爾後一切の歌論は、この一聯の言葉の解釋であり、各世代・各個性の特殊性による飜案ともいへるのである。

これほど單純にして、和歌の本質を明快に斷定した言葉はない。これほど、簡素にして綜合的な思想はない。「詩經」からの燒直しであるとか、一般に支那詩學の風下に立つ思考であるとかいふことは、この言葉を深く肉體的に讀みとらうとし、「古今序」全體に神經をゆき亙らせて讀みゆくとき、とるにも足らない凡庸な考古癖の饒舌であることに氣がつくであらう。とにかくこの言葉は、明きらかに日本人の詩的生活から成立した。卽ち詩情の「まこと」を第一義とする傳統に發した獨創的な思想である。

極めて平明な言葉である。誰にでもわかる言葉であり、思想である。しかし、たとへばこれを現代の言葉に直して、文藝研究者が得心ゆくほどに精緻に說き、

文藝愛好者以外の人々にまで納得のできるほどに示さうとしたら、決して容易なことではない。いや、それよりも、詩人や文藝學者が、觀念としてゞなく、その人間全體に於てこの一聯の言葉の意味するところを捉へ、その思想を理論的精緻さに於ても具體的・肉體的な理解の深さに於ても遺憾なきやうに註解しようとしたならば、そこには非常な力が要ることを見出さないわけにいかぬであらう。更には、詩人、文藝學者にして自らの理解度について、――といふことは結局、自らの詩的體驗乃至生活のこの言葉を充分に掘れる程に豐富であるか否かについて、完全な自信を持ち得る人々は必ずしも多くはないであらう。

さうして、この平明な言葉・思想を理解し體得することの困難さは、根本的にはもちろん思索の成熟度の高さにかゝつてゐるのである。簡素化せられ統一せられ得たほどに思想が高く、從つて思索の跡が背後にゆたかに藏せられてゐると考へられるからである。事物それ自身に無限や、永遠の象徴を讀みとることが、い

はゞ物自體の象徴を的確に握り得ることが、詩的享受の、特に日本に於ける詩的享受の仕方の第一義であることは明らかであらう。してみれば、平明な、完結した思想の結晶體に接して、その光背に限りなき思索の豐富を豫想し、透視し、體驗し得る能力を持つことも、亦なし得なければならない筈である。そして、要するにこのやうな思想は、言葉が平明であり得たことによつて眞に深く、從つて難解なのである。

さて、この一聯の言葉に於ける思想を、私達が自らの問題として、能ふかぎり深く、的確に把へようとすれば、その有力な手がゝりは、「こゝろ」といふ言葉の包括する意味の範圍を測定することであらうと思はれる。心・心、平明にしてわかり難い言葉ではないか。紀貫之が、どのやうな意圖をこの「心」といふ言葉に托してゐたのであらうか――實はさうした問方はどうでもよいのである。貫之が「心」といふ言葉を拾ひ出して据えた意識の中核には、もちろん特定の・そ

の時・その個性の・その生活情調の限定があつたであらうが、また同時に「心」といふ言葉が日本的古典の世代に於て持つてゐた意味内容全體が、その背後にしつかりと結びついて發言せられてゐたにちがひないのである。さて、一應「こゝろ」といふ言葉で締めくゝられてゐる意味を「大言海」によつて略記してみると、

(一) 腹中ニ凝リ集レル臟腑ノ稱ニテ、ヤガテ腹ノコトヲ云フ。
(二) 意識生活ノ本體。タマシヒ。精神。
(三) ナサケ。精。
(四) ココロバセ。オモヒ。意。
(五) オモンバカリ。カンガヘ。思慮。
(六) コトワケ。意味。意義。

などとある。そのほかにも、私見を以ていへば著しいものとして、――一般の

事象についての「内容、中味」、またその「情趣、風情」等々の意味に於て、「こゝろ」といふ言葉が屢〻平安期以來の文献に散見してゐる。傍證の暇がないが、まだまだ「こゝろ」について明晰な意味の分析列擧ができるであらうし、せねばならない。

　それは他日を期するとして「こゝろ」が一般に「内面」を、また「内的主體」を意味する限定は動かぬところであらうが、その包括する意味領域は、今日の言葉にひき直してみるとすれば、甚しく廣汎であり、多樣多層である。

「こゝろ」といふ言葉で締めくゝられてゐる意味の多樣性。多層性。さうして、ごく身近かな姿をしてゐるが、複雜な意味的構造を統一して「こゝろ」といふ言葉で押し出してゐる言葉意識、卽ちまたこの言葉を成立せしめてゐる地盤的思想は、平明にして豐かな綜合性を持つてゐると見なければならない。「こゝろ」といふ言葉は、その見事な意味の統一性の故に平明であり、わかりやすいが、その

豊かな意味の綜合性の故に深く難解であるといへよう。

さうして、その難解さを解く道はどこにあるのか。意味の多様性にぶつかつて、一々に意味の各面を分析し、抽出してみようとすること、それは必ずしも無意義ではない。また意味の多層性をみつめて、そこに層序をはつきりと區別づけ、秩序だてゝみること、それも必要な用意であらう。ことを平面的に把握する態度では、精神活動の所產を的確に見とゞける解釋の深みには達せられないからである。

けれども、このやうな分析的な、或は客觀的な心構へでは、もちろん充分ではない。充分でないばかりでなく、これは第一義な要件を忘れてゐる。難解さは、統一性そのものにかゝつてゐるからである。統一性そのものに於て、理解することでなければ、統一性そのものゝ中に、それを解かうとする主體を捨身してゆかなければ、この本旨はぴたりとはわからない。統一性を綜合性として理解するだけでは統一性そのものゝ理解とはまだ紙一枚のひらきがある。それは構造をあ

ます所なく識ることにはなり得ても、その構造を成立せしめてゐる統一そのものの具體的な把捉とはいへない。

「こゝろ」といふ言葉を一例にしてみたが、「人の心をたねとして云々」といふ平明な思想の場合に、その難解さを解く道は、要するに解釋する主體が、自らの生命の統一的焦點に於て先づこの平明な統一性に全體的に抱合し、自らを全部捉へられることによつて逆に統一性そのものゝ全部を握つてしまはうとするゆき方が第一だとする外はないのである。

さうして、日本の思想、日本の言葉は、實にこのことを多く私達に課するやうに思ふ。日本に於て、思想卽ち言葉は、常に明快な完結性卽ち統一性を以て打出されてゐることが多い。「苦澁の跡をとゞめず」といひ「やすやすとことを言ひ下す」といふ主張は、たゞ話術、表現技法の問題であるより以上に、思想の窮極の眞の高さを求める意慾に發してゐることが多かつたといへるのである。構造

の複雜、綜合の豐富は、そのまゝでは、決して思想の力ではあり得ない。言葉の立派さにもならない。言葉の立派さ、思想の深さは、ぎりぎりの簡素へ、單純へ、思索する主體を磨き上げてゆくところに生まれて來るわけなのであらう。

立派な言葉を眞に握ることは、容易ではない。眞に高い、慈悲深い「やさしさ」で、私達のまへにすつくと立つてゐる思想と取り組むことは、まことに容易でない。何べんも體當りをしていつて、何べんもはふり返へされる覺悟が、私達後學末生には何より肝要であらう。

十七・八

國語教養の環境

——せりふと話し言葉——

一

感ずること考へることを持つと共に、それを外部にいひ表はすこと理解して貰へるやうに形をとゝのへることを行ひ努める、そこに私達の生活が成立する。ひたすらに自らの內部で生命に滿ちたいとなみをつゞけると共に、その一途な、いとなみを外部に奔出し外の友に的確に摑んで貰ふやうにつとめる、そこに私達の生活が懸つて存するのである。內省と形成、或は夢想と表現ともいつてよいであらうか。ともあれ、閉ぢられた自己を外に開くこと、そこに私達の生活が現實に在り得るのである。好むと好まざるとにかゝはらず、その兩面にまたがらなくては、

私達の生活は悲劇的な分裂か、然らずんば空粗な虚榮に散亂し終るであらう。

それならば、私達の生活を磐石のごとき確かさに置き、無限に發展し得る態勢に置くためには、何が確實な手がゝりになるであらうか。自らが自らに問ふと共に、自らを外に持ち出し他に的確に理解して貰ふ有力な手がゝりは、何であらうか。

言葉である。もつと具體的にいへば、私達の國語である。內省し、夢想し、私達の生活を內的に充實した狀態に在らしめるためには、私達の國語に依らなければならない。形成し表現し傳達するためには、もちろん私達の國語に依らなければならない。

之を要するに、言語は、國語は、私達の生活を現實に構成し、私達の生活をより立派な充實した委和に至らしめる最も有力な手段である。

逆にいへば、私達の生活を內外を一貫して正しき立場に置かせるものは言語卽

ち國語である。國語をなほざりにしては、私達の生活は充實と高貴には至らず、のみならず生きて甲斐ある人生の眞諦に達することができない。

よき、力ある、常に新しき生活を身につけるために、分裂と頹廢とから生活を支へ統一と創造とに自らの生活を位置づけるために、私達を鼓舞激勵する手段として言語・國語がある。國語のはたらきがある。それ故に、常に私達を鍛え・伸ばせる方法として國語教養を身につけるといふことの必要が指摘されるのである。

國語の理解、國語の表現について正しきを期さう正しきを努めよう、その意慾と營みがしつかり立てば、私達の生活は根柢的にしやんとするのである。私達の生活が、現實的に秩序を持つのである。

それ故に生活の凡ゆる斷面・瞬間・場合に於て、國語教養を身につけることの必要が强く意識されなければならない。凡ゆる機會に於て、國語を通じて生活の規整が行はれなければならない。國語教養を身につけることの必要と、國語教養

を身につけるための方法・環境が、今ことこまやかに取り上げられる所以である。

二

國語教養による私達の生活の規整といふ問題を、あくまで實踐的な立場で考へると、この仕事は結局學校教育に於ける國語教育では充分にゆかぬことが明きらかとなる。國語教養を生活的意義に於て身につけようとすれば、私達を取り卷く一切の生活的事實のうちに、私達の國語感覺を磨き上げる機緣が存在してゐなければならないといふことになる。

しかるに、現代の私達の生活環境は、國語教養の場としては、むしろ遺憾な狀態である。封建世代の日本に確實に存在した國語生活の秩序がうちこはされ、國語についての健全な感覺さへ脫落してゐるかに見える。

それ故に、國語を表現手段とする藝術部門は、この際特に重要な責任を分擔し

なければならない事情に在るといへよう。私達の國語生活の環境を正しき狀態に至らしめ、それに刻々觸發されて自づと私達の生活が正されるやうに、國語藝術と考へられるものゝ働きこそ期待せられる。

さうして、私達の國語生活を正しく立たせるためには、書き書かれた狀態に於ける言葉よりも、話し聽く狀態に於ける言葉による影響の方が、殊に重視されなければならないであらう。

演劇に於ける國語の在り方、殊に「せりふ」の在り方が國語教養の場面としていかに重要であるかはくどくいふまでもない。「せりふ」は、劇藝術に於ける最有力な表現手段としてのみ重要な役割を持つのではなく、私達の具體的な生活を深化し擴大するといふ重要な役割を果すべき立場にあるのである。

「せりふ」のよき影響が私達の日常の「話し言葉」の中に、明きらかに現れ得るやうでありたい。さうしてこのことは、嘗ての日本に於ける劇藝術と大衆との結び

つき、大衆への國語影響の强さを思ふとき、決して架空の夢ではないと思はれる。

三

「せりふ」はもとより「話し言葉」として私達の耳に響きつたへられる。さうして、私達の行ふ或は行ひ得る行動の姿に於て、私達の前に發言せられるのである。私達は舞臺の上に、可能性としての私達自らの生活行動とその表現を見守り、聽くのである。私達は、見守り聽くうちに、私達の生活自らがそこにくりひろげられ進行してゆくごとく錯覺する。舞臺に於て交はされつゝある「話し言葉」たる、「せりふ」は、やがて私達自らが、凡ゆる日常生活の斷片に於て聽き話してゐる「話し言葉」そのまゝのごとくに享受せられ、感得せられる。

「せりふ」の如何が、どれほど深く、具體的に私達の國語教養に關するかは明きらかであらう。講義や訓示や說教ではなく、生活さながらの活きた現實の姿に於

て與へられるが故に、私達の國語生活への影響は深く、强いのである。

それならば、私達の國語教養に正しく役立つためには、演劇に於ける國語の在り方についてどんな配意が必要であらうか。

「せりふ」の言葉に於けるいはゞ機械的な部面・音聲的性格を美しく整へるといふことも、もちろん大切であらう。國語としての純美な音聲的特質が、私達の耳につたへられ、消えかゝつてゐる私達の國語感覺に清新なよろこびを與へてくれる配意はもとより必要である。音聲的性格の正しい現はれ方は、どうしても要求されなければならない。

しかしながら「せりふ」をして國語教養の向上に資するための方法的な問題はこれだけでは勿論片づかない。そこには複雜な、甚だ骨の折れる問題が多々あるであらう。「せりふ」の音聲面を整へるといふことだけなら、いはゞ俳優諸氏の技術的訓練の範圍で解決せられることである。ところで、その先の問題となれば、

これはむしろ、劇作家・演出家にとつての問題となり、更にいへば、「劇藝術」といふ藝術自體の根本的な問題にもなるのである。
　といふのは、「せりふ」は國語教養向上のために在るのみではなく、またさうした目的がはき違へられて强度に貫かれると、「せりふ」が「せりふ」たり得ないことにもなるからである。
「せりふ」は舞臺語であり、日常の「話し言葉」とは成立の構造を異にしてゐる。舞臺の上で甲といふ少年と乙といふ少年が話しあふ。その場合甲の「話し言葉」も乙の「話し言葉」も、それぞれ乙と甲とに向かつて話されてゐるがごとくにして、實は觀客たる私達に向かつて話されることに表現構成の基礎がある。大摑みにいひきれば、舞臺に於ける「せりふ」は「せりふ」を交はしあふ相互の人物にとつて、表現的な言葉ではない。表現的であるやうに僞裝せられ、構成せられてゐる言葉なのであり、「せりふ」が表現的な言葉であり得るのは、實は觀客たる

私達の存在によるのである。日常の「話し言葉」のごとくに表現的であるがごとくにして、實は全く說明的な言葉である。
　この本質的な相違をとつてみても、「せりふ」を以てそのまゝに日常の「話し言葉」の典型たり得るやうにすることの困難さが豫想せられるのである。
　しかも、一面に於て、「せりふ」は、生活さながらの狀態であるやうに構成されてもゐなければならない。「せりふ」の一切がただに科學的な正確さを持った標準的言語のみで表白されるとしたならば、そこには國語教室のみが現出して演劇の場所は消滅する。私達は、國語學的に抽象化せられた生活の模寫を、わざわざ見物にゆく必要も要求も感じないであらう。從つて、その時には「劇藝術」が生活的な結びつきを以て私達の國語生活の規整にはたらくといふことなどもちろん在り得ないことになる。
「せりふ」が充分に「せりふ」で在り得つゝしかも私達の日常の「話し言葉」を革

新する力を持つためには、まことに容易ならざる勞苦が要る。しかし、それを可能にする唯一の手がゝりは、「せりふ」を日常の「話し言葉」として錯覺し享受しようと身構へてゐる私達の心情である。その心情に對して、舞臺に於ける「せりふ」の進行の一切が、國語の純正をよろこばしいことゝ感得せしめ、國語の歪みがよろこばしからざることゝ體感するやうに構成せられることこそのぞましい。享受しようといふ身構への前では、一切が實質的に規範性を持ち得るのである。「せりふ」はその寫實性自體に於て、規範的位置に立ち得るのである。

それ故に、劇作家・演出家の大いなる努力によつて、純正な國語の高さが、舞臺上に進行せる種々の言語活動全體の結論的印象として私達觀客に與へられるやうでありたい。逆にいへば、舞臺から歪んだ「話し言葉」を全く放逐するといふやうな近視眼は、むしろ警戒さるべきであらう。歪んだ「話し言葉」が、歪んでゐるな正しくないなと私達すべてに印象づけられるやうに、工夫して並べられる

ことこそ肝要なのである。

なかなかむづかしい仕事である。具體的にどうすればそれが可能なのか。いふまでもなく、かうした實踐についての公式の在り得る筈がない。確實にいひ得る一點は、劇作家・演出家・俳優諸氏の勞苦の根柢に、國家觀が確立してゐることの必要であらうか。

少國民演劇の場合、「せりふ」と「話し言葉」との關聯は、殊に注意深く考へられねばならない。無邪氣と歪曲とを間違へて、明朗と破調とをはき違へた國語劇が、子どもにも大人にも乏しからざる今日、少國民劇に於ける「せりふ」の状態には、大きな責任がかけられる。「せりふ」の持つ規範的性格と寫實的性格が、見事に統一せられて子どもに教へられるやうに、切に願はざるを得ない。

十七・九

國語生活の倫理

――話し上手と聽き上手――

別れてから、もつと話を聽いてゐたかつた。もつと話しあつてゐたかつたと思はれる人がある。餘韻・餘情は、歌や詩ばかりにかぎられたことではない。そこはかとなき家茶飯の話や、話に滲み出る人がらやにも關することである。

よい時間を過した、樂しく言葉を交はしあつたと思はれることは、烈しい人と人との生活、頭と頭もしくは肚と肚とで觸れあふ毎日の生活の中で、さう屡々あるものではない。しかし、時として私達は、その人と話あつた時間の豐かさと重みを、いつまでも嚙みしめてゐたい心にさせられることがある。

話し上手と言葉を交はすことは、たしかに大きなよろこびである。

—すつきりと筋の通つた話し方で、話の中味がはつきりとのみこめた。」
—はき〳〵した正しい言葉づかひで、しかもらくにきいてゐられるやうな言葉の調子だつた。しぜん、よく話をきいてしまへるやうな發音・語調・抑揚だつた。」

話し上手と別れてから、その話しぶりの印象を思ひだしてみ、言葉といふものについて考へてみようとすると、先づこんなことが胸に浮ぶ。手順よく繰り出される。整理された內容。內容を運び出す言葉の正しさ、程のよさ。

ひとつは、いはゞ構想力の問題だ。ひとと話をする以上、先づ以て話の中味を的確に組み立て、その重點を浮彫にし、細部は側役としての位置に控へさせるやうにして、話の內容を聽き手に捉へ易いやうにするといつた構想の用意が大事な

のである。つまり、口頭の綴方としての構想をしつかりとしておくことである。

ところで、いきた話に於いて、構想を工夫することも、なか〳〵らくなことではない。話となれば、ものを書くときは勝手が違ふ。瞑想しばし、思案凝るに及んで筆を馳する底の餘裕はないのだし、刻々に、聽き手の出やうによつて、構想にも適宜手心を加へてゆかなければならない。聽き手は、默つてばかりはゐないのである。また、話あつてゐるうちに、さぞ厄介だらうと思つてゐたことが、存外手つとり早く分つてくれたり、とんでもないところに引つかゝつてなか〳〵肝心のところには頭を向けてくれなかつたりもする。そこで、話の中味の構想は、前以て整理され、用意されてゐるだけでは足りない。話しつゞける途中でも、刻刻に整理され、工夫されなければならない。それ故、口頭の綴り方に於ける構想は、刻々に生成する構想、活潑々地の組み立てである筈だ。

どうも、書くことゝ來たら、閉口だ。厄介だ。話をすること、それも座談とい

ふことなら、ひきうけてもいゝ。先づ〳〵用意に手數がかゝらないから、ざつくばらんのところ、出たとこ勝負でどうにかなるだらうから。かういつた考へは、よほど言葉についての修業のできてゐるひとでないかぎり、そも〳〵甚だしい了見違ひである。いつたい、口頭の綴方のはうが、特に構想力の如何については、骨の折れる仕事なのである。

とにかく、話し上手の話しぶりについては、構想力の手がたさが、先づ思はれる。

先程あげた印象のうちもうひとつは、いはゞ言葉の音聲面における技術的能力の問題だ。はき〳〵とした、すつきりとした、自然きいてしまふやうな美しい調子、これは、言葉をその音樂性に於いて、りつぱに扱つてゆける腕前が發揮されてゐるといふことである。

明斷な、正確な發音。それぱかりではない、話の內容に卽應し、聽き手の心の有樣や動きに適應しつゝ、緩急自在、聽き手の耳に豐かに傳はる意味と感情との溶けこんだ音波。あくまでも標準的な正しさを持ち、しかもその中味その場合に調和した、音聲としての言葉の波の典雅なうねり。堅確なひびき。

話し上手の、いはゞ技術的な洗煉に接すると、日本語の正しく話されるのは、かほど美しいことかと感じさせられる。そこで、かうした腕前で言葉を流れ出させられると、これを受けとめる聽き手の方でも、音聲としての言葉の修業に、眼を開けたくなつて來る。も少し、自分の耳に勉强させよう、澄んだ耳にしよう、それから口の開け方、脣や舌の動かし方に、もつと苦勞をしなければいけないなと思ふ。

話し上手のひとと話あつてゐたのちに、先づ以て敎へられる手近かな事實。――話の中味が、よく整理せられてをり、その時その場に卽して適宜に繰り擴げられてくるといふこと。そのわかり易さ。程のよさ。つまり、口頭の綴方とし

ての構想力の確かなこと、柔軟なこと。」
――標準的な正しさを持つた、發音・語調・抑揚。聽く耳に快い、明晰な音聲と適當な速度。つまり、話し言葉を運んでゆく音聲面の技術の確かさ。立派さ。」
かうした能力をみるにつけて、私達は、我と我身をふりかへつて修業の必要を考へる。話をしようとする以上、いつも筋道の立つた話ができるやうに氣をつけよう。話し言葉についても構想力を鍛へ伸ばさうと思ふ。また、言葉の音聲面に於ける標準的な正しさと訛つた歪みとを敏感に聽き分ける耳の訓練と、實際に正しく言葉の音波を流し出させるやうに脣や舌を働かせる訓練とを積まうと思ふ。現代の、大日本帝國の國民である私達だ。現代の話し言葉をしつかりと正しく保ち育てる技術的能力は、お互ひに是非とも磨かうとする心構へがなければならぬ。
この二つ、ひとつは話の中味の表はし方、ひとつは言葉の音性の保ち方、この二つは、たゞ技術的な訓練のみによつて立派になつてゆくとはいひきれぬものの、

とにかく技術に關する問題だといへる。そこで、話し上手になるためには、技術的能力を育て身につけることが、とにかく肝心だといふことになる。
ところで、話し上手から受ける、豊かな澄んだ印象の祕密は、どうもかうした技術的な卓拔性にのみ負つてゐるものではない。話し方・話の仕方の傑れてゐることは、疑ひないが、技術的な熟練と用意とのみで片づくものでない、何かぢつくりとした、本質的な感じが話の流れを支へてゐるのである。だいいち、話の仕方が上手だなといふ印象そのものが後から起る感情であつて、話をしあつたり聽いたりしてゐる間は、たゞすつきりとした樂しい印象があるばかりなのである。
そのぢつくりした感じを整理してみると、すくなくとも次の二つはあげられると思ふ。
そのひとつは、――言葉が浮いてゐないとでもいへようか。使はれる言葉が、いはうとする中味から自然にこぼれ出てゐるやうな感じである。いろ〳〵な意味に

於て、むだがなく、況やこけおどかしの、そりかへつた調子や、きざつぽい飾りめないことである。つまり「まこと」のある、まごゝろの感じられる話しやうだといふことである。さうして、話し手の感じてゐること、思つてゐることが、そのまゝにすつきりと現はれてゐるのだ。

そのひとつは、――これこそ何といつたらよからうか、聽き手の私達を、しらずしらず聽き入らせてしまふやうな面白味のあることである。魅力のあることである。私達の心にしつくりと觸れた話し方だといふことである。たゞ單に事務的な要件の話であれ、堂々たる主張や精緻な論證であれ、或はとりとめなき世間話であれ、とにかくたどたどしい、ごつごつした、がちがちした話しやうではなく、こせこせした感じでなく、私達の心の急所にぴたりと觸れ、おのづと心の全體でその話を受けとつてしまふやうな話しぶりだといふことである。つまり、私達の人間を、いつの間にかすつかり捉へてしまふやうな、豐かで細やかな魅力だ。

これは、實に容易ならぬ立派さだ。上手にならうとする努力だけでは、どうにもならぬ問題かも知れない。ひとつは、――常にひとと接するときに、話すことに責任を持ち、どんな些細な感情の動きに於ても自分や相手を胡魔化すことを絶對にしない純粹さ、まごゝろ。常住坐臥、自分の生活に倫理のきびしさを貫き通してゐる誠實さ、まことである。ひとつは、――おのづから働いてのことか、磨いて生まれてのことかはともかくとして、さまざまの高きもの、美しきものを蓄へてゐる人がらである。さうして、はつきりと、そのひと獨自の、他に求めることのできない世界や道が感じられる人がらである。要するに人がらである。ざらにはゐないな、と感服させられてしまふ人がらがおのづから擴散する香氣であらう。

さうして、この「まこと」、「人がら」のないところ、話し方の巧みさは、たゞ話術のうまさだけのことゝなり、後口の必ずしもよくない能辯家、雄辯家がある

ばかりとなる。いくら話しつぷりが上手でも、空しいことだ、聞きつ放しにしておかうといつた心持に私達をさせるだけのこととなる。「言はぬ」は「言ふ」にまさるといつた感慨を催させ易いことになる。

「言はぬが花」などといふ思はせぶりは、つまらぬ氣どりであるし、直截にはつきりと物を言ふことは日常生活の要件であり、お互ひの責任であるが、話し上手であるためには、結局、人間修業が第一義かと思はざるを得ない。

話し上手であるためには、技術的訓練のみならずそれ以上に、倫理的な緊張を、限りなき人間修業を、自分に課する必要がある。とにかく、日々の國語生活に於て、倫理のきびしさ、正しさを保つ心がけが大事なのであらう。

それは根本論であり、究極をつきつめた話であるが、日々の話し言葉の交換にあたつて、いつも心構へとしたい要點は、どこにあるのであらう。急には達するわけもないが、一刻々々話し上手になる道に、私達は立ちたいものである。

さうして、話し上手になるための心構へとしては、いつも聽き手の身になり、聽き手の心をよく觀、よく考へようとする態度が肝心かと思ふ。つまり、聽き上手にならうとする心がけが根本かと思ふ。

いつたい、話をするといふことは、たゞ自分の言ひたいことを曝け出すといふことではない。肚を割つて話すことの樂しさ・きれいさといふことはあるが、それとて野放圖に自分の體驗や意見や信念を外へ投げ出すといふことではないのである。話すといふことは、はつきりとした目的と制限とを持つた行爲であり、人間同志が相互の認容の上に展開する各々の交渉・切り結びである。とにかく、話すといふことは、自分の考へてゐること、感じてゐることを、相手の人にしつかりと分つてもらはうといふ目的を持つた行ひであり、聽くといふことを目安とした行ひである。それ故に、どれほど深く聽き手の心に入つて話ができるか、どれほど切實に聽き手の身になりきつて話ができるかといふことが、話し上手になる

ための基本である。この心構へが何より肝心であらう。

聽き手の心に入ること、聽き手の身になること、相手に面してその心理の動きに刻々に伴つてゐるといふ態度・身構へ、これの容易でないことはいふまでもない。澄んだ眼と、あたゝかい心の備はるべきはいふまでもないが、人間と人生とに對する智慧と寛容とが話し上手の條件として求められることとなる。俗にいへば、人間の練れ方の問題である。

聽き手に分り難い話、もしくは聽き手の心に觸れない話を、どれほど私達は繰り返してゐることであらう。自分の抱負や感懐、いやそれどころか事務的な用件すら、たゞ發表したか傳達したといふ一方的な安心でいゝ氣になつてゐることが多くはないか。分らぬのは、相手の低さの故であり、自分がかう言つた以上後は相手の責任や分別の問題だ、こつちを理解しろ・隨つて來いでは、話し方の巧拙どころか、人間生活そのものが立ちゆかぬのである。ぽんぽん言ふだけで分つた

筈と思ふのは、子供の言ひやうか、喧嘩沙汰の時の話である。

さて、聽き手の身になつて話すといふ心構へを念頭に置くと、話すといふことは、默る、物を言はないで分つてもらふといふことを同時に豫想するものだと思はざるを得ない。

「餘りの心」・「餘情」が、私達の詩歌、その他藝術一般に於て、大事な表現意識の問題であることはいふまでもないであらう。「餘白」の象徴的な饒かさ、適度の「沈默」の生み出だす表現の完全さは、私達が遠い祖先から承け傳へて來た高い藝術的叡智である。さうして、この叡智は、藝術上の、表現技法の上の意識であるばかりではなく、それは私達の生活の仕方に關する倫理的意識を示すものでもある。他の生活の自主性をしつかりと認め、他が自主的に、主働的に、自らを理解してくれることを望み、そこにこそ眞の意味で完全に自らの理解せられる場面のあることを知る寛容と愼みが、私達の日常生活に於ける大事な倫理であ

つた。心構へに於ける「愼み」は、やがて行爲に於ける「たしなみ」となり、自らを抑へる生活の習性は、自らを表現する場合の大事な倫理とされた。この倫理を基として、「餘情」の藝術が生れても來たわけであらう。

　そこで、人と話をするといふ日常的な表現行爲の上に、この意識の伴ふことが望ましい、いや不可缺だと思はぬわけにはいかない。

　何から何まで言ふ必要はないのである。むしろ、言はないはうがよいのにちがひないのである。

　さうして、事實私達は、よき聽き上手の人と接するとき、知らず〳〵この「言ひきらないで分つてもらふ」喜びを經驗してゐるであらう。千萬無量の思ひも、一言葉や二言葉で言へる。傳へられる。すくなくとも、その可能性はある。このことを、私達はいつも頭に置いて、相手と話をしてゐればよいのではないか。

とにもかくにも、話し上手になるためには、聽き手の身になり、聽き手の心理

の律動と共に動く寛容と智慧とを磨かなければなるまい。

　さて、だん〳〵と考へてゆくうちに、話し上手と聽き上手との境が、はつきりしなくなつた。さうして、話し上手であるためには、聽き上手でなくてはならず、聽き上手であつて、ほんたうの話し上手になれるといふことは、はつきりした事實であるが、何れも話方、聽方として技術的に解決づけられる問題ではなく、根本的には心の高さ、廣さに關すること、人間の練れ方に關することだといふことに衝き當つたわけである。

　それでは、人間としての成熟が不充分であり、心の練れてもゐない狀態で、話し方や聽き方などと考へても、どうにもならないことではないのか。道は、意外に遠く、人間修業を條件とする嚴しさが根柢ではないのか。

　それは、正にその通りであらう。話し上手も聽き上手も、人間としての完成を示す典型である。

けれども、人間としての完成を願ふ遙かな道は、いつの場合でも、やはりごく手近かなところから出發してゐる筈である。話方・聽方に骨を折つてみるところから、心の練れてゆくこともあるわけである。一足飛びに完成は、所詮望まれないことであるし、抽象的に人間修業などを考へても、なか〱修業はできるものではないでもあらう。話し上手にならうと努め、聽き上手にならうと努めることから、逆に人間修業が的確に行はれてゆくのである。

日常の生活に卽して、生活の高められてゆく手がゝりがこゝにある。さうして話し上手と聽き上手とが輩出して、國語生活の倫理がたしかに保たれるところ、私達の現代に、豊かな、きりりとした生活秩序が生み出されて來る。それを目標として、私達お互ひは、及ばずながら日常の話し言葉に氣をつけよう。

十八・九

正しい日本語

一

おはやうございます。

臺灣や、朝鮮や、關東州や、南洋群島や、それから滿洲國や中華民國や、ふるさとの日本內地を離れ、海を越えて遠く外地、外國にいつておいでになるみなさま、おはやうございます。

いま、東京は朝九時ちよいとすぎです。

大東亞戰爭遂行中の活氣のあふれてゐるこの東京はまたまことに平和な姿であります。

けさと明朝にかけて、正しい日本語といふ題で、私たちのことば、日本語についてごいつしよにすこし考へてみたいと思ひます。また、甚だ自分勝手の申し様ですが、東亞の外地 外國に進出して日夜奮闘しておいでになるみなさまに、私のいつも考へてをりますお願ひなどをすこし申上げてみたいと思ひます。

さて、私たちはお互ひに國語・日本語を使つて生活してをります。毎日、日本語を話したり、聽いたり、讀んだり、書いたりして日本人としての生活をしてをります。日本語を使ふことによつて、私たちは、はじめて日本國民としての生活ができるわけであります。

みなさまの中には、臺灣の言葉や朝鮮の言葉や、支那の言葉の上手な方も大勢おいでゝせう。外地や外國に進出しておいでになる方には、その土地々々の言葉に上達なさる事が便利でもあり、又必要な事でもありませう。併し、さうしたその土地の言葉がどんなに上手な方であつても、私達日本人の心持は日本語でなけ

れば充分に云ひ表す事が出來ないと云ふ事をお感じになつてゐるでせう。それはその筈です。私達は日本語を使つて毎日の生活をしてゐると云ふばかりではなく日本語によつて私達の考へを進めたり、まとめたりしてゐるからであります。日本語によつて、自分の心持や考へをお互ひにつたへ合ふばかりでなく自分の心の中でも、常に日本語がさゝやいてをり、日本語でさま／＼の事を考へてゐるからであります。話し書くといふだけではなく日本語がなければ、私達は考へることもできないからであります。

私達が日本人として生きる爲には一日も日本語をはなれる事は出來ないのであります。日本語は私達日本人の命であります。日本語は日本民族の尊い生命であります。

私達は何よりも先づ立派な日本人になる樣に努めなければなりません。その爲にはいろいろ努力すべき事があります。併し、最も大事な事の一つとして正しい

美しい日本語を使ふといふことと、私達の日本語をいつも正しく美しくたもつといふことを考へなければならないと思ひます。日本人である以上日本人の命である日本語は、是非とも大切にしなければならないからであります。

それならば、私達はどういふ事に氣をつけたらよいでせう。私達の言葉を正しい美しい日本語にする爲にはどう云ふ事に氣をつけたらよいでせう。

勿論それについても考へなければならない事は澤山あります。が、私は少くとも次の三つの點に注意しなければならないと思ひます。それは、正確正しくたしか――親切――上品と云ふ三つであります。毎日、時々刻々、日本語を話したり書いたりする時に、私達はいつも、正確に、親切に、上品に、といふ事を心がけねばならないと思ひます。

第一に私達は、言葉を正確にしなければなりません。じぶんの言葉が正確でなければ、考へや心持を間違ひなくはつきりと他の人に傳へることが出來ないから

であります。言ひ方、發音が正しくなければ相手に良くわかりません。それは申す迄もない事です。又、一つ一つの言葉使ひをいつも正確にしなければなりません。たとへば「勉强する」とか「讀書する」とか「交際する」とか「攻擊する」とか云ふ言葉があります。併しすべての言葉に「する」といふ言葉をつけていゝといふわけには行きません。「勉强する」「讀書する」とは云つても、「怠惰する」「圖書する」「疎遠する」とは云へないでせう。

「攻擊する」とは云つても「大砲する」「鐵砲する」とは云へないでせう。もちろん「なまける」とか「繪をかく」とか「疎遠になる」とか「大砲をうつ」とかいふのが正確な言葉です。外の例でいひますと「誰が行きますか」と云ふ文と、「誰か行きますか」と云ふ文では「が」と「か」のちがひがあるだけです。しかし、このふたつの文は、意味がはつきり違つてゐます。従つて、この「が」と、「か」の使ひ方が正確でないと、意味がまちがつてしまひます。文字の書方に

しても、正確に書くと云ふ事がどんなに大切であるか、これは申す迄もありません。「人」といふ字と「入」といふ字のちがひは、ほんのわづかです。しかしこれに「道」といふ字をつけるとすれば、「人道」と「入道」といふことばをそれ〴〵表はします。もし「人」といふ字の書方を間違へて「入」と書いたとすると「人道」即ち「電車や自動車の通るところでなく人間の通る道といふ意味、或は、人間らしい行ひをするためのきまり、道理」といふ意味が、「入道する」お坊さんになるといふ意味にまちがへられるといふことになります。とにかく、毎日日本語を話したり、書いたりするにつけて、私達は正確といふことに氣をつけなければなりません。

第二に、親切といふことが大切であります。言葉はたゞ自分だけのものではありません。たゞ自分の言ひたいことを言ひつ放しにするといふだけであつてはならない筈であります。相手の人によくわかるやうに、他の人によく呑みこめるやうに話したり書いたりするといふことでなければならないのであります。或はまた、相手の心を傷つけないやうに、他の人の心によくひゞくやうに、話したり、書いたりするといふことでなければならないのであります。耳の遠いお年よりの方には、なるべく大きい聲で、はき／＼と區ぎりをつけて話すやうに氣をつけませう。幼い子供たちに手がみでも出す時には、なるべくやさしい言葉、やさしい漢字を使つて書いてやるやうに氣をつけませう。悲しいことや、苦しいことにぶつかつてゐる人と話す時には、なるべく明かるい心持になつてもらへるやうに、言葉づかひや文章の書方に氣をつけませう。お互ひに日本人として毎日生活してゐる以上、お互ひに助け合つて樂しく生活出來るやうに努めなければなりません。お互ひに日本語を話したり書いたりして、自分の感ずること、思ふことを傳へあふにつけては、何よりも親切な心がまへで日本語を使ふといふことが大事であらうと思ひます。

第三は、私達の言葉を上品にする。私達の言葉に品位を保つといふ心がけも大事かと思ひます。私達は日本人としての誇りをもつてゐます。それならば、私達は、言葉を下品にしてよいわけはありません。下品な言ひ方、くだけた、品位のない言葉づかひをしてへいきでゐるといふことでは、日本人としての誇りを自らなくしてゐる、自ら傷けてゐるといふことになりませう。昔から日本人は、言葉の品位といふことを、重んじて來ました。「みやびかな言葉」上品な言葉づかひといふことを、私達の祖先はたいへん大事なことと考へて來たのであります。昔の武士たちは、言葉の品位といふことを、いつも心にかけてゐました。下品なことばで自分のことを言はれるときには自分の人がらに恥を與へられたことと考へ、そのためには、自分のいのちをもかけたのであります。又家庭では、言葉づかひを上品にするために、母親はいつも子供をしつけてゐたのであります。「文は人なり」とか、「言葉は人がらを表はす」といふやうなことが、古くから言はれて

をりますが、これは言葉に品位を保つ上品な言葉づかひとするといふことゝ深い關係のあることであります。人格に品位を保つこと、氣高い人がらになること、これを常に努めなければならないと私達の祖先は教へてをります。さうして、そのためには、言葉を「みやびやか」にするやうに努めなければならないと、私達の祖先は教へてをります。今日の私達も、やはり、言葉に品位を保つといふことに氣をつけなければなりません。

さて、もちろん、この正確・親切・上品といふことは、決してやさしいことがらではありません。簡單なことのやうでありますけれど、常にこのことに氣をつけるといふことは、なかなかむづかしいことであります。しかし、私達が日本語を大事にしよう、從つて日本語を正しく美しく保たうと思ふならば、どうしても、この三つは努力しなければならないと思ひます。さうして、この三つを努力してゆくとき、私たちの日本語は、だんだんに立派になつていきます。しかも言葉が

正しく、美しくなつてゆくばかりではありません。私たちの心が、一歩一歩、正しく美しくなつていくでせう。さうして、いつそう深く、いつそうひろく、肚の底から大和魂が、日本精神がわかつて來ることにもなりませう。また日本人の生活全體がいつそう明かるく、淸らかに、正しくなつてゆくでせう。私たちひとりびとりが、みんな、はつきりとした、やさしい心のにじみ出た、品位のそなはつた言葉づかひをするとき、私たちの日本は、いつそう住みよい、和やかな、氣高い心になつていきます。さうして、かやうに正しい日本語を身につけようとつとめることは、このありがたい「國がら」「國體」に對して、また私達の祖先の方々に對して、私たち現代の日本人がみんな持たなければならない責任でもあると思ひます。

お互ひに努めようではありませんか。

二

私たちは、日本語を大事にし、いつも日本語を正しく、美しく保つやうに努め

たいものであります、

ところで、正しい、美しい、本來の姿の日本語には、實に他の國の言葉にはない、すぐれた、尊い性質が明きらかに認められると思ひます。

よく、日本語はむづかしい言葉だとか、日本語はこみいつた・複雑な言葉だとかいふ人もあります。たとへば、敬語、人をうやまつたり、人に對してけんそんしたりする言葉づかひがあるので、日本語はむづかしいといふ人もあります。かたかなや、ひらがなや、漢字や、文字を三いろも使ふので、こみいつてゐる・複雑だといふ人もあります。しかし、申すまでもなく、これは一面的な、ものの一部分だけを觀る考へ方であります。尊い身分の方、長上、先輩をうやまふ心持、またさういふ方々に對してへりくだらう、謙遜するといふ心持、これは日本人として、ごくすなほな、自然な心持ではないでせうか。日本人のひとりびとりが、みんなさうした心持で生活するからこそ、日本は、さながらひとつの家のやうに、平

和な、秩序のある國になつてゐるのであります。ほんたうに、統一のある、萬國に比類なき國家生活がいとなまれてゐるわけでありませう。さうして、現人神でおいであそばす　天皇陛下をいたゞいて、日本臣民みんながそれぞれの分相應に御奉公申上げるといふ、この秩序を守るといふ根本の心持が言葉に現はれるとき、

そこに敬語が使はれるといふことは、日本人として、當然のことゝいはなければなりません。言葉を勉強する、言葉を磨くといふことは、いつでもやさしいことではないのです。たゞやさしい言葉といふだけでは、深い、こまやかな意味を表はすすぐれた言葉にはなれません。敬語があるといふことは、日本語のすぐれた長所といはなければならないのであります。敬語を使はなければ、日本人らしい心持で生活することはできず、敬語を使つてゐることによつて、日本には外の國にはない秩序ある、ゆるぎない國家生活がつゞいてゐるわけであります。敬語がむづかしいと思つたら、私達は敬語の使ひ方をべんきやうすればよいのであります。

なにごとによらず、勉強しないで放つておけば、むづかしいことになるのは當り前でせう。よく勉強しないでゐて、むづかしいむづかしいといふのはまちがひではないでせうか。また、ヨーロッパの國々やアメリカにくらべて、日本で使ふ文字には三いろある、表意文字と表音文字とをまぜてつかふ、それだからこみいつてゐて、複雜だといふのも、すこし考へが足りないと思ひます。ものごとは何もひといろであること、單純であることが、一番いゝといふわけではありません。

交通機關に、飛行機もある、汽車もある、電車もある、自動車もある、汽船もある、どうもこみいつてゐて複雜だ、いつそ飛行機だけにしたらいゝ、或は汽船だけにしたらいゝなどゝ考へるひとはないでせう。それぞれが、それぞれの特長を持つてゐて、いろいろな必要に應じてそれらのどれかひとつを使ふことができるやうになつてゐるからこそ、便利でもあり、都合もいゝわけではありますまいか。

日本語では三いろの文字をそれぞれの特質を生かしながら交ぜて使ふ。そこに日

本語の深さ、ひろさがあるのであります。もちろん、不必要な複雑さは整理しなければなりませんが、日本語のすぐれた特長は、生かしてゆかなければなりますまい。

　ところで、私達の遠い祖先たちは、日本語をたゞむづかしい・こみいつてゐると考へてゐ複雑だなどゝ言ひませんでした。日本語には、尊い神靈が宿つてゐると考へてゐました。言葉の「神靈」を敬ひ、あつかふ祖先たちは、日本語そのものに對して謙遜な心がまへで接してゐました。「言靈の信仰」つまり、日本の言葉には他の人を動かす靈妙な力がある。言葉が發せられると、言葉の神靈によつてその言葉の持つ意味が實際の事實として現はれるといふ靈妙な力がある。この「言靈」を尊ばなければならないと說いてゐました。さうして言葉の「神靈」を尊ぶことから、いきほひ言葉　言葉づかひに對しておそれつゝしむことが先づ必要なことだと考へてゐたのであります。そこで、言葉をおそれつゝしむから、いゝかげんな、

日本語は決して使はれないことゝなり、正しく美しい日本語が國中に滿ちあふれることにもなつてゐたのであります。「言靈の幸はふ國」と古人が歌つたのは、この正しく・美しい日本語がみちあふれる國といふことであり、「言擧げせず」と古人がいつたのは、言葉をおそれつゝしんで、いゝかげんな正しくない、ゆがんだ言葉を出さないやうに氣をつけるといふことでありました。

　かうして、古代の日本人の日本語についての考へ、即ち「言靈」を信ずること、日本を「言靈の幸はふ國」と考へる心、またみだりに「言擧げせず」といふ心がまへ、これらは、日本語の尊さを信じ、日本語を正しく、美しく保たうとする努力であつたと申すことができるのであります。

　それ故、今日の私達が、毎日言葉を正しく美しく保たうと努力することは、古代の祖先たちの心を心とすることになります。私達の祖先と共に生きるといふことになります。私達が純粹な日本人になるといふことになります。さうして、日

本人として日に日に新たな生活をするといふことは、純粋な古代の日本の精神にかへりつゝ、毎日を生活するといふことに外なりません。私達が、どうしても正しい美しい日本語をもちつゞけようと努力しなければならない理由は、こゝにもあるのであります。

さて、最後に、私はみなさまにひとつお願ひをしたいことがございます。それは、みなさまがたが、毎日正しく、美しい日本語をお使ひになることによつて、私たちとちがつて日本語の中に育つて來なかつたその土地々々のひとびとに對して、自づと日本語の先生になつてゐていたゞきたいといふことであります。

みなさまは、氣候　風土　風俗　習慣などの甚だちがふ異民族のひとびとの間で毎日おすごしになつておいでになると、いろ〳〵とお感じになりお考へになることがおありでせう。その中で一ばん大きなことは、申すまでもなく、「日本はいゝ國だな」。「日本はありがたい國だな」といふお氣持ではないでせうか。そこ

で、みなさまがたは、自分たちが中心になつて、いまおいでになる、それ〳〵のところに、できるかぎり、日本の内地と同じやうな樂しい立派な社會生活ができるやうに努力しようとお思ひになるでせう。さうして、景色や氣候の樣子は變つてゐるにしても、大東亞の各地域が日本の内地と同じやうに、道理の通る、人情の美しいところになるやうに、みなさまがたが先に立つてお手本をお見せになるとき、はじめて八紘爲宇といふ日本の國家的理想が實際に實現してゆくといふことになると思ひます。日本人のゆき、住むところ、どこにも、立派な、樂しい美しい社會生活がうまれるやうに努めること、そこにみなさまの光榮ある御責任があらうかと思ひます。東亞に新しい人間生活の秩序をうち立てるといふ大きな日本の仕事は、みなさまの毎日の御生活によつて一歩一歩實現しつゝあるわけであります。異民族に對して、たゞかけ聲をかけるだけ、訓示をするだけでは、東亞新秩序建設といふ骨の折れる仕事は進みません。異民族の間にあつて、りつぱな日

本人の生活を日々實際にお示しになる多勢の方々がをられてこそ、日本のこの偉大な仕事がほんたうにしつかりと進むことにならうと思ひます。

ところで、みなさまがたが、身を以て現住民のひと〴〵に日本人の生活の仕方・物の考へ方・感じ方の立派さをお示しになつてゆくにつけて、どういふ點に氣をつけることが大事でありませうか。そこにはいろいろ大事な問題がありませうが、私たちの日本語・私たちが毎日話したり、聽いたり、讀んだり、書いたりしてゐるこの日本語について正しさを保つといふことがほんたうに大事なことと思ふのであります。

ところで、いま私たちの日本語は、大東亜の各異民族がお互ひにじぶんの心持や考へを述べあひ、しつかりと團結しあふための共通の言葉、共通語となりつゝあります。また皆様がたもよく御承知のやうに、大東亜各地域の異民族のひとびとも、いまはいつしやうけんめいに日本語を勉強しようとしてをります。私たち

は、その要求に對しても、日本語の普及に大いに力をつくさなければならないのであります。さうして、日本語の普及にあたつては、たゞ便利な、簡單な言葉を普及しようとするのでなく、できるかぎり正しい、美しい日本語、私たちの遠い祖先から承け傳へて來た正しい美しい日本語を、異民族のひとびとの間に植ゑつけるやうに努めなければならないと信じます。

日本語を異民族のひとびとに傳へるといふことは、申すまでもなく、過去・現在、未來にわたつて日本國民を育てつゞける私たちの民族的生命を會得できるやうにするといふことに外なりません。從つて、私たちは日本語を普及する以上、私たち日本人のいのちが、その淸らかな、正しい姿のまゝに、異民族のひとびとに傳はるやうに努力しなければならないのであります。

さうして、みなさまは毎日自づと日本語の先生をするといふ立場においでになるわけであります。みなさまが、毎日正しく、美しい日本語を使つておいでにな

れば、それは何よりも有力な日本語普及の仕事になつてをるわけであります。かうして、みなさまの毎日の御努力によつて、正しく、美しい日本語が異民族の間に、だんだんに、自然に、ひろがつてゆけば、それはとりも直さず、立派な日本人の生活の仕方、ものの感じ方、考へ方が異民族のひとびとに理解せられ、會得せられるといふことになります。さうしてまた、先に申しました、樂しく明かるい、日本的な社會生活が大東亞の各地域に生まれることになるのであります。

內地を離れて、外地や外國に進出しておいでになるみなさま、どうぞお元氣で御奮闘下さい。いろいろおいそがしいことでせうが、みなさまが、日本人としての毎日の御奮闘を通じて、いつも異民族のひと〴〵に對して、日本語の先生、從つて日本人の立派な生活をお示しになる先生であることを考へていたゞければ、まことにありがたいと思ひます。

十八・四

言葉のたしなみ

〔一〕

各地の皆さん、元氣で御活動のことゝ思ひます。かうして幾山河を遠くへだてた東京からお話をするにつきましても、第一に感じられますことは日本の偉大な發展であり、また國力の發展と一緒に大陸へ進出してゐる私達の言葉——日本語の逞しい力であります。海の彼方の遠い皆さんのところへこの拙い私の話がとゞきますのも、日本語の力でであります。日本語が廣い地域にひろがつたことをつく〴〵感ずると共に、國語のありがたさをしみ〴〵感じないではをられません。

ところで、大東亞の各地においでになる皆さんと、東京にをります私たちとが、日本語によつて距離が近くされるばかりではありません。今日は、御承知のやう

に、北に南に東亞の各異民族の間に、日本語がぐん〳〵進出してをります。さうして、日本語は私達日本人とそれらの人々の間ばかりでなく、異民族お互ひ同志の間をもしつかりと結びつける力となりつゝあります。内地から移し植ゑた櫻が、大陸の春に美しく咲き亂れるやうに、私達の國語は、異つた土の上に、すく〳〵と伸びようとしてをります。先日もビルマの少年が書きました綴り方を讀んでをりますうちに、

ビルマのくにのためならば　何で命がをしからう
ビルマのくにのためならば　何で命がをしからう

と書いてある言葉にぶつかつて、私はまことに愉快になりました。その綴り方には、日本軍と協力して、新しいビルマの建設のために働くよろこびが、まだ名文とはいへないにせよ生き〳〵と書いてありました。また日本語をもつと〳〵勉強し、日本を深く知りたいといふ希望が、少年らしく率直に書いてありましたが、

「ビルマの國のためならば」のくりかへしには、私もひとりで思はず微笑してしまつたのであります。まことに、私達の日本語が大東亞の各地域を結ぶ共通の言葉となり、日本人の勇ましい心、逞しい精神、明かるく大らかな心持を異民族の友人たちに植ゑつける力となりつゝあることを、よろこばしく感じずにはをられないのであります。さうして、私達は、日本のために、また全アジア人の團結のために、正しい日本語、日本の精神をたゝへた正しく美しい日本語を、一層力強く普及させるやうに努力したいと思ふのであります。

さうして、日本語の普及とか、日本精神を生き〳〵と傳へるとかいふにつきましては、打ち割つたところを申しますと、日本語がこれほど普及するやうになりましたのも、その根本の力は、各地域で奮闘してをられる皇軍將兵と各地で活躍してをられる皆さんなのであります。皆様がたがその地で活動してをられることが、日本語普及の根本的な力なのであります。（皆様がたは、毎日その地で活動

してをられるまゝに、自づと異民族の人々の日本語の先生になつてをられるのであります。）そこで日本語の普及といふことを進めるにつきましても、皆様がたの一層の御努力が何よりの力となります。さうしたことを思ひますにつけ、私達の日本語を正しく、美しく異民族の間に植ゑつけることに、御力ぞへをお願ひせずにはをられません。

（二）

さて、私達が異民族に正しい日本語を植ゑつけるはたらきをしようと思ひますと、何よりも、先づ自分自身が、正しく、美しい日本語を身につけたいと思ひます。完全な手本を示すことはなか〳〵容易なことではありませんが、一應の手本は示せるやうでありたいものであります。さうして、これは異民族に對する日本語の教育のためといふばかりでなく、實は、大日本帝國の國民としての、大事な要件でもあらうと思ふのであります。

もちろん、言葉を正しく、美しくすると申しましても、一時にどこからどこまでも完全になるといふ風にいきませんし、劃一的に、公式的に、これ〳〵が正しく立派な日本語で、これ〳〵が歪んだ日本語だと、簡單に決めつけられるものではありません。また、正しく美しい、日本國民の標準となる日本語は、天皇陛下のましますす皇都で使はれます言葉のうち、教養ある人々の間に行はれる言葉を大體の目安としますものゝ、その標準となる言葉は、固定的なものでなくこれから私達お互ひの努力によつて、益々立派に美しく、日本語の昔からの傳統を生かし、今日の生活に一層適切な言葉に育てゝゆかなければならないのであります。標準となる日本語は、私達日本國民の力でもつと〳〵立派に美しく仕上げてゆかなければならないのであります。それ故に、私達の言葉を正しく、美しくするやうに努力すると申しましても、あまりに窮屈に考へたり、標準的な言葉を話さうと訓練するあまりに、毎日の生活でのび〳〵と自分のまことの心をいひあらはせな

くなつたりすることは、間違ひでありませう。たゞ私達は、東京で行はれる言葉のうちの品位のある言葉を大體の目安として、私達の言葉を次第々々に磨いてゆくやうに心がける必要があるのであります。さうして、いはゞ「晴れの言葉」改まつた場合、公けの席などの「晴れの場所」で使ふ言葉、つまり「他所ゆきの言葉」としては、いま申しました標準的な言葉を使ふやうに、お互ひに努めたいのであります。

ところで、かうした「晴れの言葉」を身につけようとすることは、實は古くからの日本の習慣でありました。他人の前に出るとき、改まつた、正しく、美しい言葉づかひをするといふことは、一人前の人間としては、缺くことのできない「たしなみ」とされてゐたのであります。日本人としての大事な教養とされてゐたのであります。これは、宮廷に仕へてゐた人々やその家族、武士やその家族はいふまでもなく、士農工商といはれるうち士をのぞいた農業・工業・商業に携はる

人々やその家族も、改まつた場合に、立派な話しやうをすることは、それ〳〵大事なことゝされてゐたのであります。言葉のたしなみのないことは、何にもまして、恥かしいことでありました。しつかりとした家庭では、親は、子供たちに對して何よりも力を入れて言葉のしつけといふことを、嚴格に行つたのであります。行儀をよくする、きちんとした態度・ふるまひをさせるために、きびしく躾をしたのでありますが、その躾の大部分は、實は言葉使ひを正しくする訓練でありました。

それ故に、私達が今考へる標準的な言葉といふのとは多少の違ひはありませうが、とにかくそれ〳〵の社會的立場・職業の世界に特有な標準語は、むしろ今よりも嚴重に守られてゐたのであります。つまり、それ〳〵の立場・職能に於て正しく美しい言葉を話さうといふいはゞ標準語意識は、しつかりと守られ、また行はれてゐたのであります。言葉の言ひ方を知らないために物笑ひになつたり、あ

まり賢くない男がおめでたの席やおくやみの場にのぞむことになつて物識りの大屋さんに口上を教へてもらつて一生懸命暗記したりする話などが、昔からの落語などによく出て來ますが、これらは、江戸時代の人々が、立派な言葉づかひを重んじてゐたことの分る例であります。

もうすこし、昔の日本人の標準語の意識を考へてみますと、いま申しましたそれぞれの社會的立場・職業の世界に特別な一定の言葉づかひを大事にしたばかりではなく、さうした「言葉のたしなみ」を重んずる心の底に、みながわが國の中心にまします皇室への憧れを持つてゐたのであります。これは話す言葉といふよりは、書く言葉に關係することが多いのでありますが、古くから傳へられて來た宮廷風の言葉、大宮ぶりの言葉、みやび言葉を、最も貴い言葉と考へて、さうした言葉の持つてゐる典雅な、みやびた趣が、言葉の理想とされて來たのであります。これは、毎日の言葉に宮廷風の言葉そのまゝを使はうといふ心組みではありませ

んけれども、言葉づかひにさうしたみやびやかな、品位のある、床しい趣を持ちたいものだといふ憧れを、昔の日本人は持ちつたへて來たのであります。標準的な言葉を使はうといふ意識の奥底に、宮廷の言葉の持つ氣高い美しい趣を憧れる心が、はつきりと動いてゐたわけであります。それ故に、さうした心は、また古くからの由緒正しい宮廷風の言葉でつづられた物語や和歌を、一般の人々が喜んでひもどき、又作り樂しむやうな、宮廷風の文學を好む傳統ともなつたのであります。

それはともかくとしましても、正しく美しい言葉を話さう、使はう、自分を訓練しようといふ心構へは、昔からの日本人の傳統であり、今日に始つたことではありません。私達は、この「言葉のたしなみ」・「言葉の教養」といふことについて、私達の祖先に及ばない嫌ひがあることを反省しなければならないと思ひます。

大昔から、「言靈の幸はふ國」といひ、「言靈のたすくる國」といひつたへて來た日本人、「言葉のたしなみ」を、社會生活上の、人間としての修業上の大事な要件として來た日本人が、今日、私達の言葉――日本語を粗末にしていゝわけはないと思ひます。或は、明治大正この方の今日ほど、私達が自分たちの言葉の正しさ、美しさについて、感じ方が鈍くなり、考へ方が亂暴になつたことは、今までにないことゝも思はれるくらゐであります。

私達は、今、日本語普及 異民族に日本語を敎へるといふ仕事にぶつかつてゐることからも、この「言葉のたしなみ」といふ日本人の傳統の上からも、正しく美しい日本語を身につけるやうに、お互ひに努めたいと思ひます。また、さうした心構へで皆が努めることにより、今日の日本語を一層立派に、美しく育てゝゆきたいと思ひます。

（三）

正しく、美しい日本語を話すにつきましては、もちろん、いろ〳〵と骨も折れます。先にも申しましたやうに、お互ひにさうたやすくすべての點で立派な言葉になるといふわけにはいかないとも思ひます。使ふ言葉のえらび方、言葉のつゞけ方、いひまはし、發音などに、氣をつける必要のあることは、申すまでもありません。しかし、もう時間もあまりないことでありますから、いち〳〵のことは別にゆずりまして、正しい言葉を身につけようとする努力の根本となる心構へについて、日本人の傳統的な考へ方を一言のべようと思ひます。

日本の武士は、「武士に二言なし」といふことを、鐵則としてをりました。これは、日本人の言葉についての根本の考へ方を、はつきりといひ表はしてゐると思ひます。もちろん、この言葉には、言葉を話すときの心構へ以上に、心の持ち方、生活の仕方の根本を表はしてゐる言葉であり、人間としての生活に於いて節操といふことを何よりも大事とする日本的な人生觀の根本を表はしてゐる言葉ではあり

ますが、またこゝに、言葉についての日本人の心構への根本が表はれてゐると思ひます。

これはつまり、言葉を話すときの責任感を表はしてゐるのであります。言葉は、い、加減にあつかひ、勝手にぽん／＼話してゐればいゝといふものではありません。言葉を發する時には、その言葉に私達は、時としては全生命をかけるほどの責任と覺悟を持つ必要があるのであります。從つて、言葉は大切にしなければならず、言葉をつゝしむといふ心構へが大事とされて來たのであります。

かうした、言葉を發するについてのつゝましい心構へは、もちろん武士にかぎつたことではなく、先にも申しました大昔以來の言靈を信ずる日本人の考へ方、言葉には尊い魂が宿つてをり、言葉が發せられるときには、その言葉の持つてゐる魂がはたらいてその言葉の意味してゐることを世の中に實現するやうになるといつた日本人の考へ方が、武士の生活態度の上にも現はれたのだとも思はれます

が、とにかく、責任を持つた、まじめな、つゝしみの念を持つて言葉を使はうとした日本人の態度は、今日私たちが、是非身につけねばならないことゝ思ひます。

また、かうした心構へから、日本人は、言葉に「まこと」と、「みやび」とを求める習慣を持つにも至つたと考へられます。正しく、美しい言葉といつても、日本人にとつては、それは「かたち」だけの正しさといふのではありません。「心のまこと」のにじみ出た話である筈だ、「まこと」のそのまゝ現はれた言葉でなければならないといふ考へ方なのであります。また、「見せかけ」だけの美しさではなく、みやびやかな、典雅な、床しい美しさでなければならず、そのためには、心が典雅な、淸らかな、豐かな心でなければなりません。さうして、大昔からの日本人の精神的傳統、宮廷風の高い敎養を修めようといふ努力が、先にも申しましたやうに、日本人一般に古い宮廷風の物語や歌を讀んだり作つたりする習

慣ともなつてゐたわけでもありました。

とにかく、なかみのない言葉、床しい奥行のない言葉、心のこもらぬ言葉を、昔の日本人は、輕蔑し、きらつてゐたのであります。それ故に、ある場合には、すべてをいひきらず、控へ目にいひ表はして、深い心を感じてもらはう、知つてもらはうといふやうな、極めて高い、言葉の使ひ方も行はれたのであります。懸河の雄辯よりもわづかな言葉に深い心を托した言葉づかひを一層尊んだ日本人の習慣は、こゝにその根本があるのであります。

物いへば脣寒し秋の風

と芭蕉は歌ひましたが、空しい、中味のない言葉、「まこと」のこもらぬ、床しさのない言葉を發することは、實に心のさびしくなることなのであります。

さうして、この言葉に對する心構へ、またかうした心構への上で表はされる言葉のやりとりの床しい習慣こそ、今日私達がしつかりと持ちたいことであります。

また、かうした心構へと、言葉の習慣を持つとき、私達お互ひは現代の日本語を一層正しく美しくするのに役立つといふばかりでなく、私達の心が、人間全體が一層太古以來の立派な日本人らしい心、人がらにもなつてゆく道に立つことになりませう。また、かうした言葉への心構へ、言葉の習慣こそ、ごく卑近な、身のまはりの事ながら異民族の友だちに握つてもらひたい日本精神、日本人の生き方の根本でもあります。

先ほど、「物言へば脣寒し秋の風」といふ句を思ひ出してみました。私のこのお話も、床しさや中味には乏しい話でありましたが、ご一緒に立派な日本語を話す立派な日本人となりたいといふ願ひから、拙い言葉をつらねたわけであります。大陸にはもう秋風がたつてゐることでございませう。切に皆さん方の御健康をお祈りいたします。

十八・八

標準語と雅語

――國語生活の統一について――

一

國語についての自覺や教養の必要が盛に主張せられてゐることは、戰爭下の今日に於ける著しい文化事象の一つである。さうして、國語に關する今日の論議の中には、明きらかに凡庸な・機械的な國語觀から蟬脫して國語のいのちを啓示することに向かふと共に、また徒らに肩を張つた說得的な標語の展示にのみ陥ることなく、質實な探究を以て國語生活の傳統を再發見し、私達の國語感覺を恢復・改新することに資さうとする傾きも見える。國語に關する論議は、明治以來ずゐぶんに舊い由來を持つが、今日ほど、建設的・實踐的な性格に於いて現出してゐ

ることは嘗てなかつたともいへるであらう。

さうして、かやうな自覺や教養の必要を說く主張について、その具體的・實踐的な主題を大摑みに捉へるならば、それらの主張は、結局、國民生活に於ける標準語のより深き確立を志向してゐると考へられる。標準語のより深き、より廣き確立こそ、今日、國語論議のみならず、すべて國語に關する營みに於いて、その實踐的志向の中心をなしてゐるといへよう。

かうした志向は、國語に課せられた、大東亞建設戰爭の絕對的要請に基く二つの問題、——卽ち國語の海外進出と國民思想の統一といふ二つの問題が、何れも私達の國語生活の統一を基礎的條件とすることに、直接の動機を持つのである。

國語生活の統一があつて、始めて國民思想の統一は抽象的・觀念的な位層から進んで、より具體的より肉體的となり、生活の全體に於ける日本的心性の活きた形成に至ることができる。日常性のまゝに、生活の全體が、日本的生活精神　日

本的文化感覺によつて建設せられることとなる。さうして、むしろ日常性そのまゝに於いて私達の生活が日本的心性の獨創的な表現であり得ることが、國民思想統一の活きた眼目であらう。かくて、國民思想統一といふ問題は、國語生活の統一といふ課題を中核とし、それはまた、いふまでもなく國民生活に於ける標準語のより深くより廣き確立といふ目標を手がゝりとして實現するのである。

また、屢說の要はないであらうが、大東亞各地域に日本語を普及するといふ營みについても、日本語の普及をいはゞ自然的發展にのみ托して晏如とする怠惰を避け、確乎たる目的觀を以て計畫的に推進してゆかうとするかぎり、畢竟は私達日本國民の國語生活の統一を必須の基盤とする。さうして特に、標準語による表現能力の一般化といふことを第一義的な條件とするのである。

とにかく、國語生活の統一についての建設的な努力が、今日の國語に關する様々の營みに於いて核心をなすべきであり、また事實かやうな志向が活潑に働ら

きつゝあるわけである。さうして、それがためには、先づ標準語が國民生活の現實に於いて、深く廣く確立しなければならないし、また現に確立へのさまざまな努力が行はれてもゐる。

もちろん、標準語運動の歴史も、明治以降國語に關する論議と共にずゐぶんに舊い。しかし、標準語による表現能力の一般化の必要が、今日ほど、正しい意味に於ける政治的意義を持ち、現實的な重要性を以て意識せらるべき時はなかつたであらう。標準語確立の必要は、たといはゆる國語教育の領域に於ける正當な要求としての意味を持つのみならず、またいはゞ學問的な關心と知識とに於いて解決せらるべき問題であるのみならず、大日本國民としての國民生活自體の現實的要求であり、大東亞に新しく逞しき現實を創造するための政治的要請に關することである。

とにもかくにも、標準語による表現能力を深く廣く私達の國語生活に植ゑつけ

ることは強力に進められなければならない。一切の研究、見識、試みは、この實踐的な主題の追求と有機的な關聯を持つことを意識すべきであり、また常にかやうな關聯に於いて推進せられてゐるやうなより一層の配意が肝要である。

二

ところで、國語生活の現實に於いて、標準語的な表現が眞に有力であり、一般化せられてゐるかといふことになると、未だ滿足すべき狀態にまで至つてゐないことは、誰しも異論のないところであらう。もとより標準語の徹底度を計る絶對的な基準のごときはあり得ないにしても、とにかく現狀を以て滿足すべき弘通度に達してゐるとは誰しも考へられない筈である。

さうして、標準語の徹底といふ問題については、樹てらるべき企畫や採らるべき方法も種々あるであらう。しかし、さうした企畫や方法を精緻に考へ強力に行

ふと同時に、いやむしろそれより先に、國民生活の日常性に於いて標準語がいかなる意識を以て受けとられてゐるかについて、反省する必要があるかと思ふ。つまり標準語的表現能力の不足といふ事實よりも、一歩手前の問題として、標準語意識が、國民生活の日常性に於いて、充分に徹底してゐない憾みが認められないであらうか。標準語の一般化といふ必要に當つて考ふべき問題は、標準語的表現能力の不完全といふ現象よりも、むしろ標準語意識、標準語を確立しようといふ意識が、國民一般の活きた生活的要求にまで至つてゐない實情そのものではあるまいか。

二

標準語徹底度の不完全といふ事實については、直ちに方言による表現意慾の根强さといふ對比的な考へ方を機械的に想起して理由づけるだけでは、實踐的な究明ではないであらう。また、かやうな平板な考へ方のみでは、事實の改新も强力には行へないであらう。問題は、標準語についての意識が國民生活の全體に充分

に滲透してゐるとはいへない事實にかゝつてゐると思はれる。日常生活を支配する活きた生活精神の中樞に、標準語意識が切實に喰ひ入つてゐないことが何よりの問題ではないであらうか。

もとより、そこには標準語運動乃至は標準語敎育の營みが、學校敎育の領域内、それも特に國民學校敎育の領域内でのみ專ら推進せられてゐて、いはゞ社會敎育の領域に浸潤せしめる營みの缺けてゐることが、大きな原因であらう。しかも、いふまでもなく、國民學校に於ける標準語敎育の徹底のためにも、兒童をめぐる日常的言語環境の狀態が切實な問題なのである。多くの誠實な國語敎師は、標準語的表現とは遠い日常的な兒童の言語環境といふ壁に打ち當つて、惱んでもゐるのである。國民敎育に於ける標準語敎育のためにも、社會敎育に於ける標準語運動・標準語敎育を推進する必要は切實である。

しかしまた、この國民敎育といふ觀點を離れても、國語生活の統一を必須とす

る現實的な國家的要求が、今、社會教育の領域に於ける營みを課してゐるのである。標準語教育・標準語運動は、いはゞ國民運動の一部門としての位置を持ち、强力に進展せしめられ得る逞しき理論構成と實踐的性格とを持たなければならない。さうして、それには先づ、國民生活の日常性に於いて標準語意識が一般に滲透することが望まれるのである。

標準語的表現能力を一般に育成するといふ仕事の重要性はいふまでもないが、現實は、國民生活の日常性に於いて、標準語を身につけようとする意識・意慾を喚起する必要を教へてゐる。標準語による表現技術の問題であるよりも、標準語への意慾の問題である。さうして、標準語教育・標準語運動は、いはゞ國民運動の一部門たる性格と實踐的基礎に於いて、私達日本國民の生活意識に、標準語への意慾をしつかりと植ゑつけることに成功しなければならない。先づ何よりも、日本國民としての自覺的な生き方に於ける切實な問題として、標準語への意識・

意慾が確立せられなければならない。この意識、この意慾が生活的事實として國民生活の全面に釀成せられないかぎり、標準語運動・標準語教育は、一種の技術教育たるの性格と限界に於いてのみ受けとられるにすぎず、その速やかな進展は望み難いのではあるまいか。

三

標準語の徹底の困難といふことについては、もとより國民一般の標準語に關する理解が不充分であるといふ事實も擧げられるであらう。たとへば、標準語の徹底が、活きた言語表現、方言による自然な言語表現のひたすらなる壓迫の上に望まれることのやうに考へられたりすることが、その誤解の最たるものである。標準語を固定的に考へ、標準語の徹底を以て、自然なる言語生活を奪ふことのやうに怖れたりするのは、その誤解の最たるものである。標準語の不徹底について

は、標準語に對する理解の不充分、無關心といふ理由が認められることはいふまでもない。しかしながら、問題は、理解の不充分や無關心を指すことでは意味をなさないのである。理解の不充分や無關心といふ事實が存する責任を、むしろ標準語運動や標準語教育の側に發見しようとする寛容と探究心があつて始めて、稔り多き實踐が生まれる。效果的な推進が行はれるのである。

かやうに考へて來るとき、私達は、今日迄に與へられてゐる標準語といふ概念そのもの、乃至はその說き方に不充分な點の存することを反省せねばならぬかと思ふ。今さうした反省すべき點の中極めて常識的な二三の點を擧げてみると、

第一に、標準語教育が、あまりに技術的な訓練の面に於いてのみ强調せられる傾きがあり、いはゞ科學的・機械的正確度のみが要求せられて、言語の情緒的・心理的意味といふごとき點については考慮せられないかのやうな感を與へることである。標準語教育については、國語の科學的・技術的正確度のみが第一義とせ

られて、いはゞ國語の持つ詩や倫[illegible]については、殆んど問題にせられないかのやうな感を與へることである。

第二に、標準語教育が、いはゞ西歐に於ける言語生活の規範的形式の直譯的性格を脫却せず、音聲學者や言語學者の直譯的理論の產物にすぎぬかのごとき感を與へることである。國民が長く受け傳へて來た國語感覺、國語の美しさに關する感覺のごときは、殆んど問題にせられようとせず、たゞ發音やアクセントの最大公約數的な平均性を以て一定の規範的形式とし、これを與へようとするかのごとき感を與へることである。そこには、國語そのものの性格に卽した價値意識による斷定や計量がなく、從つて美的價値評價は全く働かずして、たゞ西歐言語理論の直譯的な適用による國語の表現形式の發見と規範化があるのみだといふごとき感を與へることである。

第三に、標準語の實體に對する疑問である。いはゆる教養層に於ける東京語を

基準とすることには問題はないとするも、事實は、さうした東京語のみを以て全體を覆ふことになるのではないかといふことに對する不滿乃至危惧である。或は標準語が眞に權威を持ち得るためには、かうした東京語の上に、他の地域に現存する國語の表現的傳統事實が充分計量せられ、攝取せられて、凡ゆる點に就いて價値判斷が加へられて標準語が建設せらるべきだといふごとき考へである。

かくのごときは、もとより常識的な標準語への疑惑にすぎず、理論的には充分解明せられるところであらうが、問題はかうした意識がたゞ學問的な問題としてでなく生活的事實として充分に拂拭せられるには、如何したらよいかといふところにある。さうして、このことは勿論、標準語の意識、意慾の確立といふ努力によつて、始めて解決せられる問題であると思はれる。標準語に對する學的理解よりも、活きた生活的事實としての標準語意慾の育成といふことによつて、始めて拂拭できる問題であると思はれる。

四

さて、標準語意識の確立といふ基底的な問題を思ふにつけて、私達の反省のよすがとなるのは、雅語を慾求し來つた言葉の傳統である。

雅語を求める表現努力の傳統は、もとより主として文語に關することであり、また雅語そのものの性格については充分の分析が必要であるが、この國語生活の傳統が今日の私達に敎へるところは甚だ大きいと思はれる。さうして、いはゞ文學道に於いて常に雅語を第一義として求め來つた傳統、この言葉に關する美的傳統は、國語生活の上に甚だ深く廣き倫理的基礎を築いてゐたといへるであらう。堂上の世界、武士の世界のみならず、國民大衆の間にまで、言葉のたしなみ、言葉の作法が、生活的要件として求められてゐた國語生活の事實は、言葉の雅びを尊ぶ傳統的感性の繼承に、その根柢を持つといへるであらう。雅語の意識の傳統

を國語生活の倫理性を確立した根柢として考へることは、充分の理由を持つと思はれるのである。

さうしてまた、雅語は、その性格に於いて、國語生活の倫理を確立する重要な契機を持つてゐたかと思はれる。詳説の暇はないが、雅語の性格については、俗語との對比に於いて、唯に古代語と近代語、文語と口語、中央語と地方語、標準語と方言、敎養語と日常語といつた徴表が認められるのみではない。いふまでもなく、そこには、大宮ぶりの言葉と里の言葉といつた徴表が重要な徴表として見出されるであらう。

文學的表現については、常に心との相卽關係に於いて詞の問題が採り上げられ、しかも雅語の性格を把持すべきことが第一義的に求められてゐたことは、皇室、宮廷への憧れが言葉に關する凡ゆる營みの中樞に生動してゐたことを物語るといへる。文學的表現に於いて雅語を求める精神は、卽ち宮廷への切なる憧れであり、

文學的表現はまた日本に於いて國語表現の典型乃至規範としての意義を持ちつゞけてゐたことを顧るとき、この文學道に於ける傳統が國語生活の根柢に深切な倫理を與へたことも當然であると考へられよう。

日常的國語表現に雅語そのものを導入しようとした事實は、もとより一般的には認められないけれども、雅語に於いて高貴と風趣を見出す精神、言語意識が日常の國語生活に於いても、能ふかぎり規範性を確立しようとしてゐたことは、疑ひない事實である。

かくして、雅語の意識を根柢として、宮廷への憧れを骨格とする一種の標準語意識が、國語生活の中に生動してゐたとも考へられる。さうして、かやうな標準語意識は、もとより今日の標準語の概念に直ちに接續し得るものではないけれども、日本人としての生活を自覺的に形成してゆかうとするに當つて、その根本たるべき精神、皇室の尊崇といふ精神に基礎を持つ點に於いて、今日の標準語運動・

標準語教育に示唆するところが大きいと思はれる。

古き日本人は、國語生活に於ける規範の把持を以て、正に重大な人間生活の問題と考へてゐた。日本人の生活は、それぞれの身分、職業に於いてそれぞれ成立してゐる國語表現の規範をしつかりと身につけることによつて、眞に自覺的形成に達するものと考へられてゐた。さうして、かやうな國語表現の規範に從ふことは、たゞ國語の操作技術を身につけるといふ技術上の問題ではなかつたのである。それは同時に心の問題であり、生活の自覺的形成の要件であつた。

かやうに考へて來るとき、今日標準語の意識、標準語への意慾を確立しようとする營みは、充分に雅語の意識の傳統を顧る必要があるであらう。

私達の國語生活の傳統は、當然、日本的生活の自覺的形成に當つて國語倫理の恢復を課するのである。また、現代に於ける國語表現の規範的典型の確立と、それに對する自己訓練の態度を私達一般の間に育成することを課するであらう。今

日に於ける標準語の理念構造が如何であれ、標準語への意慾が、深き日本的自覺に伴つて現出するやうに、標準語運動や標準語教育は推進されねばならぬやうに思はれる。

さうして、今日に於ける標準語意識　意慾を確立することは、そのこと自身、雅語への意識の傳統を再現することであり、擴充することになるかと思ふ。

昭和十九年九月十五日　初版印刷
昭和十九年九月二十日　初版發行（二、〇〇〇部）

㊫定價參圓
特別行爲税相當額參拾錢　合計參圓參拾錢

日本出版會承認
う30339
（105504大阪屋號書店）
戰爭と日本語

著者　釘本（くぎもと）久（ひさ）春（はる）

發行者　田中乾郎
東京都日本橋區呉服橋二丁目五番地

印刷者　清水一二
東京都麹町區麹町三丁目十二番地

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二丁目九番地

發行所　株式會社　龍文書局
東京都日本橋區呉服橋二丁目五番地
代表者　田中乾郎
電話日本橋一〇〇五番
日本出版會員番號一四〇〇一九號

印刷所　東水印刷所　（東京26）

810.4
K

3158

皆さん

○ 読書の前後によく手を洗い
○ ゆびをなめずにページをひらき
○ 表紙を巻きかえさず
○ 書き込みや折り目もつけず
○ いつも気持がよいように

読みましょう

東京・丸善製

TOKYO SCHOOL OF THE
JAPANESE LANGUAGE

810.4